
当方、おでん屋台あり

篠崎きなこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

当方、おでん屋台あり

【Nコード】

N8255G

【作者名】

篠崎きなこ

【あらすじ】

自作、東方LAL（小説版）の外伝になります。東方LALに出番のないキャラを出します。門番編だと小悪魔さんとか、大妖精さんとか、フラン様は俺が書き忘れた。正直すまんかった。そういう方々を絡めつつ、おでんでもカツ食らおうという小説。あと、それだけだと間が持たないので、現代的な場所でごちゃごちゃになります。

前説：この物騙りについて（前書き）

サブタイトルから虚構満載。

百合とかあるし、ゆっくりとか出る。

あと、おでんとか食べるしお酒も飲む。

本当にそんな話で特に意味はない。

それでも良かったら、前説からどうぞ。

2009/9/7 追記

チャプター1が終了。記述をアライメントに合わせて変更。

チャプター2を開始。

前説：この物騙りについて

メインタイトル：当方、おでん屋台あり。

Chapter 1 『Evil of silence』
Chapter 2 『Ogre』 ↑ 今ここ。

・主な登場人物（更新状況に応じて増えます）。

なべっち ：おでん屋台店主。黒髪黒目、酒好きの煙草呑み。

俺口調なのは仕様。ゆっくりに異様なまでのコンプレックスを抱く。

ゆっくりに関する知識は半端ない。非常にヤクザっぽい。年上好み。

屋台を引くと異世界に迷い込む程度の能力。

他、チート性能を有する。

ゆいさん ：なべっちの命の恩人。他者を苛める程度の能力。
●

デレ。
甘ったれ口調なのは仕様。昔に色々あったと思いねえ。

訴えられてもおかしくない程度の犯罪者っぽい存在。
他、チート性能を有する。

生真面目な姉が一人いる。お説教は最高に怖い。

サン ：やたらじじくさい少女。もののけ姫じゃないよ！

あたし口調なのは仕様。色々複雑なのです。

なべっちの親戚の子供という設定にしておかないと

面倒くさい。

詳細は中国編最終話をどうぞ。年齢は五歳。枕は抱

き枕派。

まりさ … ゆっくり種まりさ科。人間に敵意を抱くゆっくり。

れいむ … ゆっくり種れいむ科。まりさの将来を心配している。

鬼畜嫁。

わんこ … 後輩。ペットにれみりやとかさくやを飼ってる。わ

りと酷い性格。

にいさん … わんこの兄貴で色黒のナイスガイ。某ブ・ントさん
ほどではない。

てんさん … 人生の勝ち組なのに腐女子。男性は苦手。

りゅーさん … インザスカイの人ではない。てんさんの相方。爽や
かない男。

れみりや … わんこのペット。なべっちの躰は無駄に終わるが、
にいさんへの愛の

ために己の小宇宙を燃やし尽くした結果、見事な転

身を果たす。

さくや … わんこのペット2。おぜうさまの究極進化に伴い、

意気消沈気味。

お客さん … 人間とか妖怪とか神様とか色々。愚痴を吐いたり吐
かれたり。

ゆっくり … ゆっくり種の総称。ゆっくりするために生まれてき
た。

・主な食品（更新状況に応じて増えます）。

・おでん

出汁を醤油等で味付けしたつゆに、大根、竹輪、コンニャク、ゆ
で卵など様々な具材を入れて煮込んだ料理。具材の種類は地域や家
庭によって異なる。

また、バラエティ番組の鉄板（絶対に受けるネタ）として厚遇されている。

主な食材は以下の通り。

大根：おでん種の基本にして究極。詳しい説明は不要。

ゆで卵：おでん種の基本にして究極その2。嫌いな人は嫌い。作者は好き。

コンニャク：もによもによしてる食品。こちらもおでん種の基本で美味。黒・白の板状に加え、ひねったものや青海苔・ごま・ゆず・一味などの団子状の物もある。

ちくわ：竹輪と書くがどうでもいいだろう。おでん種の基本で美味。穴の中にゴボウなどの野菜を詰めることもあるが、作者的にそちらの方は認めていない。異論は認める。

しらたき：もによもによしてる食品その2。もによもによしてるので美味。結んで食べやすい形にするのは最早常識。むしろそのまま入れるのが非常識。

厚揚げ・生揚げ：おでんに必要なものを足してくれるニクイ奴等。異論は認める。

がんもどき：豆腐という食品の中で異質な存在だが、おでんに入った時に真の力を発揮する究極の豆腐。がんという食品がなんだかは知らない。

巾着：油揚げの中に餅等の具を入れ、かんぴょう等で口を縛った物。美味に決まっているので詳しい説明は不要。

昆布：美味しいけど進んで食うほどじゃない。好きな人は好き。作者は乾燥昆布こそ至高だと思いついて入っている不屈き者。そのうち昆布様から罰が当たる。

じゃがいも：皮を剥いて、丸ごと又は一口大に切る。後半崩れてくるので少し厄介。

ハンペン：白いアイツ。バラエティでも大活躍だが、思い切り出汁が染みている状態だとハンペンの良さが若干損なわれると作者は

思っているので、なるべく中盤に食べる。

さつまあげ：海老のヤツとかすごく美味しいよ！

他、色々。個人的には牛筋とか銀杏とかも好き。

・ごはん（アライメントの変更に伴い、記述追加）

最強にして究極。この世界における全食材の頂点に立つ食品。農家の人の愛の結晶であるがおでんとの相性はイマイチ。

相性はだしに依存するが、おでん自体が単体で完結している食品のため、なかなか出番がなかったりする。

ゆっくりも大好物。俺が決めた。そう決めた。

・お酒。

アホみたいに種類があるので割愛。Wikiとか参照すればいいじゃない？

作者的には日本酒が好きだが下戸という宿命。

・あまあまさん（アライメントの変更に伴い記述変更）

甘いもの。ゆっくりの大好物。チョコとか飴とか、子供も大好きな食品。

ゆっくりは食事のグレードを下げることを知らないナマモノなので、あげたりする際は注意が必要。特に『人間から奪った』と思わせないようにすることが肝要です。

聞き分けのいいゆっくりの場合は食べさせても構わないが、その場合は自然に戻すことは諦める。一度飼ったら責任を持って最後まで

で。飼い主としての義務です。

当たり前なことだが栄養のバランスは最悪なので、基本はメーカーが発売している既製品の『ゆつくりフード』を食べさせましょう。ゆつくりフードは雑穀に多少の甘みを加えた栄養バランス食品で、ゆつくりの健康を正常に保ちます。髪はスベスベ、お肌はツルツルになり、ゆつくりがとてもゆつくりできます。我流で餌をあげている方は今すぐゆつくりフードをあげてみましょう。

人工フードが苦手なゆつくりは、『生餌』シリーズをお試しください。

主な注意点（ほぼ嘘なので真に受けないように）

東方projectの二次創作ものですが、物語に意味はありませんし、持たせません。

緩やかな頭で、なにも考えることなく、一切の無心で読みたい人向け。

描写が少ないと感じたらおでん屋台とかのび太の家とか思い出してください。

お客さんは東方LAL（分からない場合は検索神ぐるぐる様の力を借りよう）で冷遇されているキャラクターほど出番的に優遇されます。

時系列とかも気にしちゃいけません。気にしたら負けです。

ゆつくりというナマモノが登場します。現代に溢れかえっています。

子供たちにはポケモ•扱いされています。弱者に存在価値などないワイルドな世界で生き延びなければならぬ過酷な環境が白いマツトのジャングルになっております。

ピ•チュウ、ボルテッカーだ！ とか言ってる場合じゃないくらい過酷です。

ゆっくりは饅頭ですが生きています。それさえ押さえておけば作中の説明も薄々ぼんやりと理解できることでしょう。理解できなくとも生活に支障はありません。

世界観とか気にしちゃいけません。幻想郷の外にあるのは間違いないませんが、外の世界とはまた別の理屈で成り立っています。また、二次創作の設定をともに受け取ったり積極的にイチヤモンをつけてはいけません。人としての器を疑われます。

あと、作者の心がストレスでマツハになりますが、まあそれは別にいいか！

犬に長くおあずけをした時の切なそうな顔に耐え切れない人、猫の尻尾で鼻をむずむずした時の微妙な表情などに耐え切れない人は帰った方が無難です。

上記のような温いいじめが随所に存在します。多少の百合描写があります。耐え切れない人は帰った方が無難です。

耐え切れなくなったら助けてアンパ・マンと叫んでください。でもまあヤツの友達には愛と勇気だけなので、多分助けに来ないと思います。

仕事で疲れているので頭がグルグルしています。飯時に書いているので、お腹が減っています。

と、いうわけで始まり始まり。

これは、なんにもない物語である。

Chapter 1 終了時追記

ほぼ本当なので真に受けるように。

この物語は東方LALの外伝である。主人公のアライメントによってストーリーが右往左往する。アライメントの上下は作者の気分

次第。小説だからね。

ただ、東方LALでの外伝ではあるのでちゃんと目的はある。目的ってのはつまり・・・さんに・・・させないようにすること。東方LALの作者であるコーキーさんがアレを実装するかどうかは現段階では分らないが、正直なところアレがあると小説としては手も足も出ない!! 必然的に外伝はゲームオーバーということになる。

と、いうわけで外伝とは、彼女からあの選択肢を奪い取る物語だと解釈していい。

外伝で他にやりたいことはあるけど、それはあくまで蛇足に過ぎない。東方LALが主軸であり、こちらはあくまで外伝。……正直あってもなくてもどっちでもいい。

英雄ではない一人の女の物語を描きたかっただけで、他に理由は無いのだ。

前半は主人公のアライメントがカオスでかつ、ゆっくりに対して最大級のコンプレックスを抱いているため、若干ゆっくりに対して乱暴気味。

ただ、主人公のアライメントに変化があったため、そういう酷い描写は書くことはなくなっていくと思われる。ありがとう、諏訪子様! ストレスがマッハで死ぬところだったよ! ホント……ホント助かったぜ!

ただ……幻想編はあんなもんじゃねーらしいので、あの描写に嫌悪を覚える人は冗談抜きで帰った方が賢明です。

……ちらつと書いてみたけどさ、ホントえらいことになったから。以下、Chapter終了時の補足説明。

・Chapterについて。

まあ、一言で言えば区切りつてやつです。

Chapterは東方LALで二編が終了(今回は門番編、帰還編)した時に終了とする。

Chapterごとにサブタイトルが存在するが、気分をつけているので気にしない。

Chapterごとの展開により、獲得アイテム、コミュニティ、おでん屋のステータスと属性に影響を及ぼす。

獲得アイテム、コミュニティ、ステータス、属性については後述。

・獲得アイテムについて。

幻想郷と外の世界で入手したアイテムの総括。

数え切れないほどのキーアイテムを入手しないと、某ウィユヴェールのバッドエンドみたいな結末を迎えることになるので、作者はわりと必死だ。

特にChapter1の『もりやのおまもり』は超重要アイテム。これがないと、物語が破綻してバッドエンドまっしぐらってくらい重要。

一番大事なものは、一番最初に手に入れる。

・コミュニティについて。

言わずもがな、人間関係。

Chapter終了時に表示されているのは『おでん屋↓誰か』に対する感情のみ。

他人がどう思っているかは分からない仕様です。言葉から察してください。

なんらかの事情でコミュニティは消滅することがあります。

キーキャラとのコミュニティが消失したらゲームオーバー！。

どのキャラがキーになっているかは現在秘密。

主人公が年上好みなので、一般的に『ババア』と呼ばれる人に限って好感度がバンバン上がるよ！ 仕様なんだよ！ あ、諏訪子様はババアじゃないけど年上だから滅茶苦茶好いてるだけです。勘違いしないように。

・ステータスについて。

言わずもがなステータス値。

成人女性なので、力とか精神力は上がりません。

あくまで性質的な面の能力値が上下します。

具体的にはアライメント、信仰心、勇気、カリスマなど。

アライメント、信仰心についてはL OとF F T 準拠。

信仰心はともかく、アライメントは重要なステータス。守矢神社に行く前は - 2 0 だったけど、ケロちゃんパワーにより一気に + 3 0 されたため、総合 + 1 0 となった。

なぜ - 2 0 になっちゃったかの理由はとりあえず明かさない。

・属性について。

色々つていい言葉だね。良いことも悪いことも誤魔化せる。

現在、この物語の主人公であるおでん屋は人間らしく生きるために『色々』あつた挙句トラウマとコンプレックスの中に本質を埋もれさせている状態である。

幻想編終了までに、4つの属性を取り戻さなければ終了のお知らせ。

Chapter 1 終了時点では以下の属性を取り戻した。

属性『克己心』

辞書によれば自分の欲望をおさえる心。自制心。己に打ち勝つ心。

以下は旧五千円札の人、新渡戸稲造の著書『武士道』より抜粋。

克己の修養はその度を過ぎやすい。それは靈魂の澆刺たる流れを抑圧することがありうる。それは素直なる天性を歪めて偏狭畸形となすことがありうる。それは頑固を生み、偽善を培い、情感を鈍らすことがありうる。いかに高尚なる徳でも、その反面があり偽者がある。吾人は各個の徳においてそれぞれの積極的美点を認め、そ

の積極的理想を追求しなければならない。

この一文で『樋口さん終了のお知らせ』とか思った。新渡戸さんの格好よさは異常。

己に打ち勝たねば、この後の属性を取り戻しても無意味。

外伝の最終編で一番必要な属性だと思われる。

一番必要なものは、一番最初に取り戻す。

取り戻しても、鍛え上げなければ意味がないから。

前説：この物騙りについて（後書き）

てなわけで、お次は第一話。

おでん屋ことなべっちさんと、その相方の話。

小悪魔さんは第二話に登場予定。お楽しみに♪

第一話：俺とゆいさんと時々ゆっくりと（前書き）

相方登場の回。

バキネタとか、分からないネタはスルーでお願いします。

捕捉するとこの世界、小学生の三人に一人は自分のゆっくりを所有しています。本当に残念なことです。

ちえん種なら欲しいと思う。

第一話：俺とゆいさんと時々ゆつくりと

ゆつくりできやしねえよ。

十年前、世界はほんの少しおかしくなった。

「ここはまりささまのおうちなんだぜ！　じじいはゆつくりしないでさつさとでていくんだぜ！　それか、あまあまさんをもってくるんだぜ！」

家に帰ると、そこには黒い帽子をかぶった生首がえらそうにふんぞり返っていた。

その生首は『ゆつくり』と呼ばれている。

ちなみに、英語でも『Y U K K U R I』だ。

この十年間で世界のあちこちで存在が確認されるようになった生き物の総称だ。

頬の膨れた人間の生首のような形状をしており、種族全体を通じて『ゆつくり』していつてね！』と叫ぶのが特徴。

生き物とはいえ、中身はなぜか餡子で外側の皮はさらさらぶにぶにしている。ぶつちやけて言えば饅頭だ。基本的には雑食。ただし食事のグレードを下げるできないため、人間の餌に慣れてしまったゆつくりは野生に帰ることはできない。

猫や犬ように、美味しい餌といつも食ってる餌を認識できるわけじゃなく、美味しいものを食べてしまうとそれ以下の味のものを食料と認識できなくなってしまうのである。

ただ、過剰な塩分や辛味は毒。甘味や無味のものを好む。

野生生物のくせに繁殖力旺盛で繁殖期というものがなく、年中発情可能。そのせいで子供を作りすぎて餌が足りずに餓死するゆつくりも大勢いる。

生物として致命的な欠点を、繁殖の速度で補っているような生き

物なのだ。

「ここはまりささまのおうちなんだぜ！　じじいはゆつくりしないでさっさとでていくんだぜ！　それか、あまあさんをもってくるんだぜ！」

この通り、人の言葉を話すが、その言葉は大抵相手を見下したものだ。態度は傲慢で横柄。要求をすれがそれが必ず通ると思い込んでいるところがある。

と、まあ長々と説明してしまったが、ゆつくりは饅頭である。

子供たちにはポ・モンの意味で大人気。引きずられるように、大人たちは渋々固い財布を開けてしまおうという負の連鎖が続いている。

ホント、おかしいことになっちまったもんだ。

「じじい！　さっきからまりささまをむしるとはいいいきょうなんだぜ！　そんなやつはゆつくりできなくさせてやるんだぜ！」

無視されていることに怒ったのか、金髪黒帽子のまりさ種と呼ばれているゆつくりは、ぽよんぽよんと俺の足に体当たりを繰り返す。成体になるとバレーボールくらいの大きさになるが、大きさはソフボールより少し大きいくらいなので、ようやく大人の階段を登り始めた頃合だろう。

……自分の運命も知らずに、呑気なことだ。

「なあ、まりさ」

「ゆ？　ようやくじじいがへんじをしたんだぜ！　さっさとまりささまに、あまあさんをもってくるんだぜ！」

「一応言っておくけど、ここはゆつくりできない場所だから逃げた方がいいぞ」

「なにをいつてるんだぜ？　ここはとてもゆつくりでき……」

まりさの言葉は、最後まで続かなかった。

「猫用の出入り口をつけたただけなのに、わりと引つ掛かるもんなんだねえ」

まりさを持ち上げたのは、大きな丸い目を持つ女性。

通称、ゆいさん。残念なことに……俺の恩人である。

背は高く、細くて出る所は出て引つ込む所は引つ込んでいる。ぱるぱるぱるぱる。

目は大きく、おっぱいが大きい。ぶつちゃけ超美人。ぱるぱるぱるぱる。

社会人の女性。趣味は貯金と料理と生態研究。どんな職業なのかイマイチ不明。

甘え上手なのか甘えすぎなのか、ツンの文字すら見当たらない。

子供は無邪気で残酷を地で行くお方。

酒にはやたら強い。午前中は気だるそう、午後は眠そう、夜は酔っ払っている。

その恩人が最近ハマっているのが、小学生の間で大流行中のゆっくりを使ったスポーツ対決なのだった。

ゆっくりでかけっこやら相撲やら人間の競技を争わせて、その必死さ加減を楽しむゲームなのだが……ゆいさんはこれにはまりまくっているのだった。

大人なのに、小学生の流行に乗ってしまっているのだった。

「よし、これで準備完了。このまりさを使って強いゆっくりを造り、あのクソガキどもに目にモノ見せてくれる！」

「……あのさ、ゆいさん。小学生相手にむきになるのは大人としてどうかと思う」

「なべっち。これは大人とか子供とか一切関係ない、己のプライドと魂をゆっくりに乗せて戦う女の生き様なのだ！」

己のプライドと魂を、ゆっくりみたいなナマモノに乗せていいものだろうか？

あと、力説するのはいいけどまりさを振り回しまくるのはどうか

と書いて。

「ねえまりさ。まりさは強くなりたくない？　ちなみに強くなれば可愛いゆっくりにももてまくりだしあまあまさんやお野菜さんも食べ放題。みんながまりさを羨望の眼差しで見つめ、メイン盾にもなり得る……かもしれないわ」

「ゆゆっ！ それはすごいんだぜ！ まりさはつよくなるんだぜ！」

……いいのかなあ。

それ、確実に死亡フラグだと思うんだけど、本当にいいのかなあ。俺がまりさの立場だったら、なにも言わずに舌を噛み切つてるところだぞ？

まりさの返事に気を良くしたのか、ゆいさんはにこにこ笑って言った。

「じゃあ、ジャツ ● ハンマーみたいな、強いゆっくりになろうね」

「それは色々まずいだろ！」

著作的にも、人道的にも、道德的にも！

とにかく色々引っ掛かるから駄目だ！

ちなみに、ジャツ●ハンマーってのは週刊少年王者で連載している●キシリーズに出てくるキャラクターで、強くなるためなら明日すらも捨てる覚悟でヤバいお薬を服用し己を鍛え続けているキャラクターだ。

スポーツでよくあるドーピングが行き過ぎたような感じだと思うと、分かりやすい。

「もう、そんなに心配しなくても大丈夫だよ。……子供が見たらおしっこもらして泣き叫ぶ程度の、厳ついゆつくりが出来上がるだけだから」

「それはもうゆっくりじゃねえ！ 本物のクリーチャーだ！」

「まりさはくりーちゃんじゃないよ！ まりさはまりさだよ！」

[illegible]

反射的に怒鳴り返してから、俺はちょっと涙目になっている自分に気がついた。

ホント……どーすりやいいんだこの人。

ここで、まりさを見捨てるというのが一番楽な選択肢なのだが、一度見捨てたモノのナレノハテなんて見た日には確実にトラウマになる。

『ゆっぐりじでいぐがいい……ゆぐつゆぐつじゅべえええええええええええええええ！』

やべーよ、絶対強酸とか吐いてくる。あと、牛くらいなら一頭丸まる食いそうだ。

そんなモンスターを世に放つわけにはいかない！ 世界の平和のためにも！

「あ、あのさ……ゆいさん。さすがにお薬の類はまずいと思うんだ。ゆっくりの競技にも公式に規定とかが存在してるし、それくらいなら小学生も把握してるから」

「え、そうなの？ ……つてことは、ニトログリセリンはまずいかな。いざとなったら敵もろとも自爆させるつもりだったのに……」

「……………」

まずいなんてもんじゃない。

ニトログリセリン。ダイナマイトとかに使われる薬品。ゆっくりもろとも周囲の子供たちまで自爆に巻き込む程度の爆発力を誇る。

駄目だこの人……早くなんとかしないと、子供たちの命が危ない！
「と、とにかく！ 生き物とカテゴライズされる物体で遊んじゃ駄目だろ！」

「遊びじゃないもん！ 真剣にガキどもを泣かせたいだけだもん！」
「真剣ならなにやっても許されるってもんじゃねえぞっ！？」

あと、大人がだもんとか言っちゃ駄目だ。本当に駄目だ。

あー……もう。ホントどーすっかなあ。あまりの強情さに、くじけてしまいそうになってしまっじゃないか。

「大体、本気で勝とうと思うんだったらちえん種とかみよん種とか基本性能高いヤツ育てた方が効率もいいだろうに、なんでまりさ種なんだよ？」

「……ゆつくりなんてどれも同じじゃないの？」

「これからゆつくり育てようって人間がなんで種類とか知らねえんだよ！」

れいむ種：基本的な能力を持つ。母性が強く初心者向け。

まりさ種：ゆつくりの中ではわりと器用。育て方によっては化ける中級者向け。

ありす種：高慢で扱いにくいが上手く育てれば優秀なゆつくりになる。上級者向け。

ぱちゅりー種：ゆつくりの中で最も優れた記憶力を誇るが病弱なので注意が必要。中級者向け。

ちえん種：運動能力が高い。懐きやすいので初心者にも最適。

みよん種：戦闘能力が高い。用心棒などに雇われたりする。中級者向け。

その他、捕食種を含めてわりと珍しいゆつくりが多いので、割愛。
「へえ……その発想はなかったわ。っていうか、ゆつくりの種類とかあつたんだね」

「……そーだよな、ゆいさんは衝動買いした魚の稚魚の種類も調べずに育てて、その結果水槽の魚全部食われたほどの逸材だもんね」
「ち、違うよっ！？ そんな黒歴史はゆいさんのログには存在しないよー！」

ゆいさんは頭のいい女性だが、時折とんでもないポ力をやらかす。その時のことをからかうと、ゆいさんは顔を真っ赤にして拗ねるか涙目になって布団に潜り込んだ後、足をばたばたさせて悶え苦しんだりする。

とはいえ、後々の仕返しが怖いので、この辺にしておこう。

「とにかく、改造だろうが飼育だろうが、俺はゆつくりを家に入れるのは反対だ。あいつらといると意味もなく実家を思い出して死にそうになる」

「あー……なべっちの実家、和菓子屋だもんねえ」

その通り。和菓子屋なのだ。

高校時代に色々あつて跡継ぐのが嫌になつて飛び出して、同級生だったゆいさんに拾われる羽目になるのだが、それはまた別の話つていうか話したくない。

もしも当時に戻れたら家を飛び出した自分をタコ殴りにしてやりたい。

ちなみに、家の方は弟が継ぐ予定なので特に問題はないらしい。

「そういうことなら、仕方ないね。ま、ガキどもはゆつくり以外の方法で泣かすから別にいいか。無意味にゲームのセーブデータとか消したり」

「……やめてやれよ。それは泣くぞ、マジで」

あなたのぼうけんのしょはきえてしまいました。

当時のカートリッジには、血も涙もなかった気がする。

「そういうわけだから、まりさはいらなくなりました」
「よかったね」

「ゆゆっ！ そんなことよりばあはやくあまあまさんをもってきてね！ さもないとひどいめにあわせるよ！」

「……………ばあ？」

修羅のオーラを纏いながら、ゆいさんはゆつくりと立ち上がる。

ゆいさん、今年で二十歳のうら若き乙女。

俺と同期なのだから若くて当然なんだが、どうやら最近『ババア』という言葉に過敏に反応するようになってしまったらしい。

「ここは私となべっちの愛の巣です。饅頭はさっさと消えてね」

「なにをいつてるんだぜ！ ここはまりさのおうちなんだぜ！」

「じゃあ、まりさのおうちはゆいさんがもらっちゃった♪ 安心して死んでね♪」

まりさはぽんぽんと無意味な体当たりをゆいさんに繰り返す
ゆつくりに限らず、自然の動物にとって雨風が凌げる場所とはとて
も大切な空間だ。特にゆつくりの場合は饅頭という体である以上、
水に弱いのは避けられない。

下手をすれば雨が降つても死ぬ。そんな理由から、ゆつくりは雨風を凌げる場所を常に探し求めている。

それだけ、連中も必死だと言えるだろう。

だからといって、甘やかしたりはしない。

縄張りを主張したいのはこっちも同じ。

某の●太の家とそっくりな間取りだが、この家はゆいさんの家で、俺は同居人。

「ゆぎゃ ああああああああああ！ ばばあはじねええええええええええ！」

仕方なく俺はまりさを掴んで、庭先に放り投げる。

「ゆべっ！　じじい、なにをするんだぜ！」

「軒先くらいは貸してやるから、気が済んだら草食つて出てけ。こ

ここにはあまあまさんもないし、ゆっくりぶれいすでもなんでもない場所だ。お前には野山とか、そういう場所でゆっくりするのがお似合いだと思うぞ？」

「そんなのかんけないんだぜ！　ここがまりさのゆっくりぶれいすなんだぜ！」

「……いやホントやめとけ死ぬから」

溜息を吐きながら窓を閉める。まりさはまだなにか喚いているようだったが、どうでもいいので相手にはしなかった。

石で窓を割って侵入してくるゆっくりもいるが、庭には石も落ちていない。

あとは放って置けばどこに行くだろう。

「なべっちはちょー優しいなー」　惚れ直しちゃうなー」　……スカートめくりてえ」

「……………」

ニヤニヤと……にやにやとゆいさんは笑っていた。

目は血走っていたし、息も荒い。ぶっちゃけ怖い大人のヒトになっていた。

「実は、私つてば今日で三日ほど徹夜続きでね、とても疲れてるの。ちゅーしてえ」

「つ、疲れてるなら寝た方がいいと思う。ほ、ほら布団も敷くし！」

「徹夜つてとても嫌な感じだね。嫌な汗も出るし、些細なコトで怒りやすくなったりするし……ホント、あのクソガキども冗談抜きでぶっ殺してやるうかと思ったヨ」

「ゆ……ゆいさん？　無理はいけないと思うぞ。ほら、疲労回復用に飴玉もあるし、これでも舐めて元気を出して！」

「大丈夫だよ。私は元氣一杯。……ああ、すごく泣かせたい」

駄目だこの人。本音がだだ漏れまくりだ！

っていうか、色々ピンチだ！　あらゆる意味で危機的状況だ！

こんな格好でこんな口調だケド、別に俺は百合じゃないのにこの人はいつもいつも！

ゆいさんは真っ赤に血走った目を俺に向けて、ポツリと言った。
「あとさ、疲れてるとホントなんていうか……無性に繁殖したくない？」

繁殖したくない？

繁殖したくない？

繁殖したくない？

それは、恐怖の言葉だった。

俺は口元を引きつらせて、後ろに下がったが、後ろは壁だった。

「そういうわけで……いただきまーす」

「いや……待つて。あのさ……まずはゆっくりと話し合いをにやあ
あああああああああああああああああああああああああああ
あああああああ！」

問答無用の、有無を言わせず。

ゆいさんは俺を押し倒した。

まりさはぜんぶみていた。

そしておもいだしていた。

むれのみんながいつていたことば。

ははおやのぱちゅりーがいつていたことば。

にんげんさんのおうちは、ゆっくりできない、と。

第一話：俺とゆいさんと時々ゆつくりと（後書き）

この後、おでん屋はゆいさんが美味しくいただきました。

いや、作者的には多分抱き枕の刑なんだけどね？ 読者のにはどんな想像をしたのかな？ かな？

想像の翼で、人は空高く飛べるらしいですよ？

次回は小悪魔さん編。卵とテキーラを一杯。

だいぶやさぐれておりますが、それは多分分からない人だから。
お楽しみに♪

第二話：小悪魔さんは分からない（前書き）

多分、小悪魔さんは酷い目にあっていたと思うので酔っ払ってもらった。後悔はしていない。

卵は当時作者が食べたかったおでん種。コンビ二に買いに行ったら前に並んでいたオッサンとオバハンが五個とも全部買っていた。お前らの血は何色だ、と叫びそうになった。

第二話：小悪魔さんは分らない

いらっしゃい、ご注文はなににしましょう？

今ならゴマ入りさつま揚げとか美味しいと思います。

「ねえねえ、なべっち。おでん屋台引いてみない？」

「……………は？」

「ほら、私つてば大学で野菜作ってるじゃん？ その野菜が作りすぎて余っちゃってさ、廃棄するのも面倒だから、いつそのこと売っちゃおうかって思ってるの」

「つていうか、大学で野菜作るとか今初めて知ったんだけど……そういう野菜つて勝手に売っちゃっていいのかわ？」

「近所のおばちゃんとかも路上で売ってるじゃん。あれと一緒にだつて」

「いや、安全衛生的にだよ。そもそも、何の目的で野菜作ってるんだよ？ 俺の記憶が確かなら、ゆいさんの職場つて農業系じゃなかったはずだけど」

「大丈夫よ。ラットはもりもり食ってるし」

「……いや」

「じゃ、よろしくね、収益は全部懐に入れちゃっていいから」

「……それ、人体実験じゃね？」

俺の恩人であるゆいさんは、俺の問いかけには決して答えなかった。

嫌だ馬鹿。屋台とか冗談じゃねえとか言えれば、どれほど楽だっただろうか。常に立場が弱いのはヒモっぽい人間の悲しい所である。いや、ヒモじゃないしバイトしてるし大学にも通ってるけども。

それでも、頭のいい彼女との収入の差は雲泥なわけで。

「ま、目的を考えなきゃわりのいいバイトなんだよな。材料費は夕
ダだし」

タダより恐ろしいものはないとも言うが、責任なんざ知ったこつ
ちやない。

安全が欲しいなら、コンビニのおでんを食べればいいじゃない？
ホント……最近のコンビニのおでんは美味い。酒は出しちゃくれ
ないが、自分の家で安心して酒を飲みたい時はやっぱりコンビニだ
ろう。

「……すみません」

と、俺が妄想に耽っている間にお客様がやって来た。

ここがどこだか分からない。昔から台車やらリヤカーを引くとな
ぜか迷子になっていたので薄々予想はしていたが、屋台を引いても
同じことのようなのだ。

しかし、一晩中には必ず帰れたし、なにより仕事帰りの一杯はど
んな場所でも耐え難いほどの誘惑を持っているだろうと判断し、あ
まり気にしないことにしている。

とはいえ、人里離れた街道で屋台を出すのは良くなかったかもし
れない。

本日初めてのお客様さんは、なんだか空ろな目をした司書さんだっ
た。

背中に蝙蝠の羽が生えているような気がするが、気にしちゃいけ
ない。

可愛い女の子はなにをしても許される。世界共通の認識である。

「へい、らっしゃい！ ご注文はいかがでしょうか？」

「……この店で一番強いお酒を。あと、ゆで卵を三個」

「……………」

このお客さん。どうやら、疲れているようだ。

俺はなにも言わずに、テキーラをロックで用意し、ゆで卵を盛り付けた。

「……………いただきます」

司書の彼女はグラスを受け取ると、なにも言わずに一息で飲み干す。

ちなみにテキーラはロシアあたりの国で暖を取るためによく飲まれるアルコールで、顔から火が出るほど度数が強い。

続けて、卵を一口で一個の割合で食べ、あっという間に三個を完食した。

どうやら、相当お疲れのようだった。

「美味しいですね、このお酒と卵」

「まあ、相方の仕込がいんですよ」

「ほうほう。私の相方なんて鬼畜ですから、羨ましい話ですねえ。あ、同じお酒と卵を四個追加お願いします」

「……………」

……………落ち着け、俺。我慢しろ、俺！

相手はお客さんだぞ？ 神様だぞ？

回転寿司だって、ナマモノが嫌いだからってメロンしか食えない奴もいるんだ。彼女はもしかしたらおでんが嫌いで、それでも卵だけは大好きで注文してるかもしれない。

客がなに食おうが自由だろう？ こっちは金貰ってる立場だし。

俺は深呼吸をして、テキーラと卵の追加注文を差し出す。

もつきゅもつきゅと卵を食べる司書さんは、大変幸せそうで可愛かった。

……………滅茶苦茶酒臭いけど、気にしちゃいけない。

「じゃ、卵をもう五個。あとさっきのお酒をもう一杯お願いします」
「……………」

単一の物しか食っちゃいけないっていう、自分ルールでもあるんだろうか？

飽くなき卵への執念。卵を酒で流し込むその姿は、どう考えても

世界最強の生物だって、もうちょっと上品に食べますよ？

なにが彼女をそこまで卵に駆り立てるのか。それは多分永遠の謎だつた。

「あつはつは、お姉さん、いい食いつぷりだね！　かれこれ三十個は食べてるけど、お財布の方は大丈夫なのかな？」

「アホかキサマはあああああああああああああああ！」

「って、無一文って！金がないなら屋台に入るな！」

「いえ、大好物ってわけじゃありません。単純にお腹を膨らせるの

「卵だけじゃなくて他ののも食えや！
つくねとか牛筋とか普通に美

「くっふっふ、やっぱそれが本音ですか？　ちなみに、無一文と

「む……それならそうと言ってくれ。愚痴には付き合ってやれるけ

「お金はちょっとしかありません」

あんまりといえはあんまりだったが、もう怒鳴らずにはいられなかった。

別におでん屋に誇りを持っているわけじゃないが、無銭飲食は良くないと思う。食うだけ食ってツケにしようとか、まけてもらおうとかそういう根性もいかなと思う。

.....

どちらにしろ、ヤバイことには変わらないが。

「へえ、そりやすごい。とても美味そうじゃないか」

喋ってる途中でマジ泣きしだした。

あー……もう。本当にどうしよう。警察機構って本当によくできた組織だったんだなあ、と今更になって思い知ったぞ。

「お姉さん、巨大ロボットの武装がよく分からない……って、言ってたな？」

「……ぐすつ……うつ、はい。そうです」

「俺もあんまりよく分からないが、とりあえず一つ分かることがある」

「……………」

司書のお姉さんが不思議そうに首を傾げたので、俺は真っ直ぐに言った。

「とりあえず、ドリルをつければいい」

虫の鳴く音が、夜の街道に響き渡る。

沈黙がこの場を支配していた。司書のお姉さんは固まっていた。

「あの……すみません、ドリルってなんですか？」

「三角錐の形をした兵器だ。高速回転して敵を一撃だぞ？」

分かりやすく、紙に絵を描いてやる。

これで理解できることを期待していたが、反応はイマイチどころか最悪だった。

「両手を人間みたいな手の形にした方が、武装の自由が利いていいと思うんですけど」

「ほら、そこは付け替え可能にすればいいじゃん？」

「やですよ、そんな面倒なの。大体、ドリルとか意味が分かりません。魔法で似たようなことくらいならできますし、特に必要ありません」

「……………」

このクソアマ、マジで分かってねえ！

ドリル一つしか知らない男の生き様とか、全然分かってねえ！

いや……待て。落ち着け。相手は女の子だ。理解できないのも仕方がない。同居人兼恩人のゆいさんも似たような反応だったじゃないか。

深呼吸して、とりあえず聞くべきことを聞いておく。

「じゃあ、アンタが思い描く人型兵器の武装ってなんなんだよ？」

「辺り一面を焦土と化すミサイルとか、空気圧で敵を吹き飛ばしたりとかですね」

「ホントもう、全然分かってねーなあ！」

人としてあるまじきことだが、金を持っていない司書さんはもう客でもなんでもないの、怒鳴り放題だった。

「威力がなさ過ぎたり、ありすぎちゃそもそも意味がねーだろ！」

雑魚を散らすのに小規模なミサイルを使う程度はいいが、周囲全部を吹き飛ばしちゃ意味がないだろ！」

「えー？　だって、人間の生活とか正直知ったこっちゃないですし」

「そんな考えの奴が巨大ロボットとか作んなや！」

みんなを守ってこそその巨大ロボットが、みんなを吹き飛ばしてどうする。

人に優しくないスーパーロボットは、パチンコで目下ファイバー中の汎用人型決戦兵器（笑）ことエヴァ・ゲリオンや、地面から出てきた宇宙最強のガンキャノ子さんことイ・オン（得意技は惑星切り）だけで十分だ。

ああ、あとは自由な頑駄無も却下。フリーダムすぎるのも考え物なのである。

「そもそも、巨大ロボットってのは巨大な敵を倒すために存在するんだから、圧倒的破壊兵器とかは不要なんだよ。ドリルくらいが一番いい」

「……巨大な敵なんてどこにもいませんよ？」

「なにを想定して作ってるかまでは、俺の知ったこっちゃねえよ。個人の趣味の範囲だったら、効率とか考えなくてもいいだろ」

「むう……イマイチ納得いきませんが」

「効率重視も悪くないが、それだと最終的にはなんにもなくなっちゃうだろ。酒を飲んでおでんを食うのと同じように無駄は無駄で大切なモノなのさ」

無駄なことは無駄ではない。無駄なように見えてちゃんと意味がある。

無駄なことばかりでは生きていけないように、効率ばかりでも面白くはない。

ようはバランスだ。

たまには……ゆつくりしていくのも、悪くはないと、俺は思う。

「さて、与太話はここまで。そろそろ店じまいにするから出て行ってくれ」

「えー？　ようやく面白くなってきたのにー」

「やかましいわ、金もないくせに散々飲み食いしやがって。……次に見かけたら確実に取り立てる。今回はツケでいいけどな」

「……むう、さりげない優しさがなんだか心に寒風を吹き込みますねえ」

顔を赤く染めながら、司書さんは頭を抱えていた。

まあ……あれだけの醜態を見せてしまったのだ。恥ずかしくない方がおかしい。

「あ、そうだ。お金はありませんが、私にできることなら『死ね』以外だったらどんな命令でも聞きましょう。私、こう見えてもあちこち融通が利くんですよ」

「さつさと帰って寝ろ」

「子供扱いは酷いですよ？　こう見えても私つては一介の悪魔ですから、お兄さんに淫夢を見せるくらい容易なのです。まあ、そつち系の悪魔じゃないんで、多少拙い夢になってしまつのはご容赦して欲しいところですが」

「……いや、俺女だから」

「まじッスかつ！？」

「なんで口調が変わるほど驚いてんだよ！　見れば分かるだろうが！」

「……ごめんなさい、どこのヤクザ屋さんかなあくらいにしか思っ
てませんでした」

「どいつもこいつもおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおー！」

あの魔法使いといい、この司書といい、どうしてこいつらは！

どっからどう見ても女だろうが！ いや確かにちよつと野郎に見えないこともないし、ゆいさんなんかは『それが良し！』と断言しちゃうんだけども！

いや、意味が分からない！ なにが良いんだかさっぱり意味が分からない！

「それはつまりギャップ萌えという奴なのですよ」

「なんで萌えが分かって巨大ロボットが分からねえんだよ！」

「いえいえ、パチュリー様が言っていた受け売りで、別に分かっていたわけではありませんよ。……ただ、今ちよつと分かりそうな感じですけど」

司書さんの目がキラリと輝く。

獲物を狙う蛇のような、獰猛な目。完全な酔っ払いの目と言っても過言じゃない。

アレに捕まると、しばらく帰れなくなる可能性があるのですが、俺は手早く荷物をまとめて、屋台を引いて全速力で走り出す。

「じゃ、俺は帰る。今はツケにしておくけど、次会ったら絶対に金払えよ、小娘！」

「誰が小娘ですか！ 私はどっちかっていうと、小悪魔ですよ！」

小悪魔タイプか。なるほど、なんとなく納得できる。

ありや絶対に男を手玉に取るタイプだ。

しかし、女からは顎でこき使われるタイプと見た。

いるんだよな、男にはやたら敵しいくせに、同性にはやたら優しい女って。そのデレっぷりをもっと男に発揮して欲しいと心底願っている。

……いや、まあ。ゆいさんのことなんだけど。

ガラガラと屋台を引いて全力で走りながら、ふとそんなことを思った。

そんな嫉妬心丸出しなことはしない美女ですよ？ スイーツ（笑）
じゃありませんよ？」

「ま、ゆいさんみたいな女子は大切に思われてる証明がないと不安で仕方ないだろうが、ある程度は我慢する場面も必要だと、老婆心で言っておく」

「……あのさ、サンちゃんって、本当に五歳？」

「乙女には不思議がいっぱいらしいぞ」

本当はもっと色々と言いたいことや忠告したいことはあったが。
サン＝ジョウゲンはなにも言わずに、苦笑していた。

第二話：小悪魔さんは分からない（後書き）

次回、劇的ビフォア・アフター。

昨日までさっぱりしていた庭が、帰ってみたら草ぼうぼうだったりした場合、多分人は怒ると思う。

ちなみに第四回のゲストは大妖精さんか、レミリア&咲夜ペアが望ましいと思われる。

お楽しみに♪

第三話・ゆいさんはいつもノンストップ（前書き）

いちゃらぶパート1。第一回目は作者自身ののザ・ワールドが仕事の忙しさで若干壊れかけていたのであんな感じだった。正直今は後悔しているが、いつものことなのでまあいいや。

あと、ゆっくりは別に出そうが出すまいがどっちでもいい……というわけじゃなく、この物騙りに必要不可欠でわりと重要なポジション。

どう重要かは後半で明らかになるやらならないやら。

それでは、物騙りの始まり始まり♪

第三話：ゆいさんはいつもノンストップ

だから、餡子は嫌いだったってんだろぅが。

先日草取りをしたはずの庭は、劇的な変化を遂げていた。

青々とした草が一面に生えており、なぜか小規模な池まで設置してある。

庭の隅っこには『ばでいざ&でいぶ』と悪意満点で書かれたプレートが貼り付けられた犬小屋が置いてあり、中には親切なのかなんなのか、乾かした雑巾が置いてあった。

せめて、タオルか毛布を置けと言いたい。

そんな中で、二匹のナマモノがモサモサと草を貪っている。

黒い帽子と金髪の……多分、先日俺が放り出したゆっくりまりさ。大きさはソフトボール程度なので、大人になりかけといったところ。赤いリボンと黒髪の……多分、先日俺が持ってきたゆっくりれいむ。大きさはバレーボール程度なので、こちらは完全な大人といったところだろぅ。

「ここはまりさとれいむのゆっくりぶれいすだよ！　じゃまなじじいはゆっくりしないででていってね！」

「ここはれいむとまりさのゆっくりぶれいすだよ！　ゆっくりできるおにいさんならゆっくりしていってね！　そうじゃないならさっさとでていってね！」

紫煙を吐き出しながら、とりあえず俺は空を見上げる。

本日は快晴。実にいい天気だ。いい天気過ぎて、ちょっと泣きそうになってしまう。

「ばかななじじいはさっさとでていってね！」

「おにいさんいいにおいがするね！　れいむたちにあまあまさんちようだいね！」

「……………」

んー……仕事明けで眠いから、ゆつくりの声がすげ不快。ゆつくりって声を抑えるとかできないからなあ。仕方ないっちゃ仕方ないんだけど、なんつーか今すぐここでヤッてしまいたい。

殺意を押さえ込むようにゆつくりと溜息を吐いて、スコップでその場に穴を掘る。

それから、大学の後輩にもらったクッキーを取り出した。

「ゆゆっ！ くつきーさんだ！ おにいさんゆつくりはやくちょうだい！」

「さつさとよこすんだぜ、じじい！」

うるせエと叫びたい衝動を堪えながら、俺はクッキーを穴の中に落とす。

そして、ゆつくりどもが飛びつく前にさつさと穴を埋めて石を乗せた。

「なにをするんだぜ、じじい！ ばかなの？ しぬの？」

「俺は今このクッキーを捨てたんだ。欲しいならまりさの力で掘り出せばいいだろ。そんなこともできないまりさはゆつくりできないゆつくりだと思いました。ツッコミは週刊少年跳躍でお馴染み銀色の魂から『作文かよ！？』でお願いします」

「ゆゆっ！ そんなことはないんだぜ！ こんならしくしようなんだぜ！」

「がんばってねまりさ！ れいむはまりさのみかただよ！」

「ゆっへっへ、およめさんのれいむのためにがんばるんだぜ！」

近くに落ちてた木の棒を口でくわえて、穴を掘っていくまりさ。そのペースじゃ日が落ちててもクッキーには辿り着かないが、俺はこいつらがクッキーに辿り着かないことだけを祈っておく。

大学の後輩が作ったあのクッキー。味は地獄製である。

アレは食べ物ではない。食べ物の形をしてはいるが、断じて食べ

物ではない。

匂いは普通なんだが、とにかく味が辛くて生臭くて最悪なのだ。

……まあ、その後輩はゆいさんのことが好きでたまらないらしいので、ただの嫉妬という可能性が大なのだが、ぶっちゃけ俺に嫉妬されても困る。

あのクッキーをゆつくりが口にしたら死に至る可能性があるが……まあ、掘り出せない限りは大丈夫だろう。わりと深く埋めたし。

「……づ、づがれんだぜ！ れいむ、くつきーさんはあきらめてまりさとすーりすーり」してゆつくりするんだぜ！」

「ここはれいむのゆつくりぷれいすだよ！ くつきーさんをほりだせないまりさはゆつくりどこかにいつてね！」

「どぼじでそんなごどうのおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおっ！？」

泥だらけで号泣するまりさの顔は、いつか鏡の向こうで見た自分の泣き顔とそっくりだったような気がする。

どうやら、あのれいむはかなりの鬼畜嫁らしい。

クッキーが目の前にあれば別だが、このような喧嘩が一時間ほど続き、一時間後には二匹ともクッキーが埋まっていた事実そのものを忘れてしまう。

喧嘩に夢中になった結果、埋められたクッキーのことを忘れ去ってしまうのだ。

悲しみを平気で忘れ去るゆつくりだが、自然界はそう甘いもんじやないのでそれでいいのかもしれない。

仮にクッキーのことを忘れていなくても、俺にとっちゃどうでもいいことだ。

「……とりえず、どうでもよくないことを解決しに行くか」

俺は思い切り溜息を吐き、家のドアに手をかけた。

ゆいさんの腹にボディブローをぶち込み、手錠でサクツと拘束。

気絶したゆいさんを後ろ手に柱に縛りつけ、サンを呼んでからゆいさんに活を入れ、無理矢理叩き起こす。

さて、これで準備完了。

「じゃあ、緊急だけど今から同居人会議……もとい、第一回被害者の会を始める」

「あの……なべっち？ これは一体どういうことなのかな？ 私はどっちかっていうとDSだから、こういうMの人が嬉しいがるハードプレイはちよつと……」

「いや、違うから。そんな異次元の発想じゃないから」

俺はゆつくりと溜息を吐いて、ゆいさんを睨みつけた。

「最近、ゆいさんの所業が行き過ぎてるから説教しようってだけのことだ。特に、サンが来てからが酷すぎるだろ」

「え？ 幼女が家に来たらテンションが上がって当然じゃないの？」

「……サン、今すぐ荷物をまとめろ。実家に帰る」

「世話になったな、ゆいさん」

「ちょ、ちよつと待って！ とりあえず、落ち着いて話し合いましょう！ 今なべっちに実家に帰られると、私の生活が蛍光ピンクから灰色がかったセピア色に！」

「……………」

蛍光ピンクのあたりをものすごく突っ込みたかったが、ゆいさんが話し合いに応じてくれること自体あんまりないので、仕方なく俺は席に着いた。

それから、息を吐いてゆいさんを睨みつけた。

「とりあえず……まあ、色々と説教したいことはあるが、それは一旦置いておいて……庭のあの惨状はなんだ？」

「ん、前回のことでちよつとゆつくりに興味が出てきたから、飼ってみようと思って」

「……………」

飼ってみようと思って。

以前にも、似たような言葉を聞いた気がする。

ちなみにその時はクワガタで、最初はきちんと世話をしていたのだが、段々飽きてきたのか放置するようになり、最後は存在すら忘れ去った拳句に、うっかり焚いたバ・サンで一族郎党皆殺しになるという悲惨な結末だった。

ただ、両生類や爬虫類は『きもいから』の一言で手を出そうとはせず、鳥類は『なんか臭そう』という一言で拒絶し、哺乳類は『あー……うん、まあいいよ』とばつの悪そうな顔をして、決して手は出さない。魚類に至っては先日の殲滅事件で懲りたらしく、しばらく生物の育成に手は出さないと思っていたので、安心していただけが……。

ゆつくりとは、盲点だった。

「……ゆいさん。さすがにゆつくりを飼うのはちょっと」

「んー……確かにクワガタや熱帯魚の時は私も考えが甘かったと思ってる。だから、今回はちゃんと飽きてても大丈夫なように工夫を凝らしたの」

「飽きる前提で話を進めるな！　まず、一生懸命世話をする努力をしろー！」

人として当然のことを言ったが、ゆいさんは聞く耳を持たなかった。

説教される時のゆいさんのスルースキルは常軌を逸している。

逆に、スルーできないほどの説教をすると、信じられないほどへこむ。

……逆境に弱い人なのだ。

「まず、ゆつくりたちの餌として繁殖力の強い草を用意したわ。この草は繁殖力が強くて、ゆつくりたちが毎日好き放題食べても大丈夫な、とても都合のいい草なのよ」

「……それ、食って大丈夫な草なんだろうな？」

「あと、ちゃんとゆつくりたちに水場も用意したし、犬小屋も自作したわ。この時点でちょっとイラッときて、乾いた雑巾を押し込んだりしてみたけど」

草については言及してくれなかった。

ゆっくりも餡子も饅頭も基本的に嫌いなので、あの草が農薬漬けだろうが品種改良されてようがなんでもいいんだが……あのゆっくりたちにはホント同情する。

あと、イラツときた時点で飼うのを断念して欲しいと心底思う。

俺は溜息を吐いて、ゆいさんを真正面から見つめた。

「……で、あとは？」

「衣食住全て揃ったこの環境に隙はなかった」

「隙だらけすぎるわ！」

なんだその放置プレイ。昆虫飼う時の方がよっぽど手が込んでたぞ！

俺はゆっくりと溜息を吐いて……どうやってゆいさんを説得しようか考える。

いや、まあ無理なのは承知の上なんですけどね？

分かつちやいるが、言わずにはいられない。

「あのさ……ゆいさん。ゆっくりを飼うのって意外と大変なんだぞ？　まず庭に放置してたけど、あれだとすぐに脱走するし、ゆっくりの味をしめた鳥あたりに速攻で殺されるぞ。外で飼うんだったら、脱走を防いだり外敵から守ってやれるような、丈夫な囲いを作らないとロクに世話もできねえし」

「ああ、それは大丈夫。透明なプラスチックのバリケードを既に業者に発注済なのさ」もちろん、上下左右全面を覆ってゆっくりを飼い殺しにするために、わざわざオーダーメイドしたの」あのまりさコンチクショウ絶対に目にモノみせてやるんだから！」

余程頭に來たのか、まるで本音が隠せていない。

きつと、あのまりさがまた『ばあ』とか言っただろう。

最終的には、ゆっくりを欲しがっている子供たちにあげようと静かな決意をしながら、俺は人としての心得を口にする。

「それと、いきなり番で飼おうとしてたけどあれはアウト。他のペットと同じで、まりさが大きくなったら速攻で子作りに入るし、数もねずみ算で増えていく。そうなたらあの草だけじゃ賄え切れない。食えば食っただけ増えていくぞ」

「猫や犬みたいに去勢できないの？」

「ゆつくり専門の技術が要るんで意外とお値段が張ります。一匹3〜4万くらい」

「まじでっ！？　んー……そりゃ困ったね。たつくんの家はそうしてるから、ウチでもそうしようかと思っただけだケドねえ」

たつくん。ゆいさんをからかう小学生筆頭。息をするように嘔吐く。

おかっぱの髪と眼鏡に低身長。年齢は十歳の小学校五年生。半ズボン。

死んだような目でゲームをプレイする現代っ子。

あと、誰にでも丁寧語のくせに、敬意とかそういう大切なものを母親の腹の中に置き忘れてきたような、ふてぶてしい野郎である。

「……まさかとは思うケド、ゆつくりを飼おうと思っただのって、その『たつくん』の入れ知恵とかじゃねーよな？」

「いやいや、これは私の意志だよ。とはいえ、ある程度影響を受けたのは否定できないね。とても楽しそうだったから」

ゆいさんはそれなりに影響されやすいところはあるが、決して『食わず嫌い』をしない女性だ。

やってみて、好きか嫌いか判断する。

「ま、なべつちが『やめなきゃ出て行く』って言うならやめる。私にとって、ゆつくりと天秤をかけるほどのことじゃないし」

「……………」

押して駄目なら引かれてみた。

これを計算でやっているんだったら大したもんだが、残念ながらゆいさんは基本的にも応用的にも天然な人なので、そういう腹黒いことはなかなかできないらしい。

嘘は吐けず、真っ直ぐで、逆境には超弱い。

明け透けで、分かりやすく、見ていて気持ちいいくらいにさっぱりしている。

仮に計算でも……騙されてもいいかなと、思える程度には。

ゆいさんは、わりと面白い女の人だ。

「……ま、話は分かった。近所のガキどもに痛い目見せてやろうとか、そういう思惑じゃなく普通に飼いたいんだったら、俺としちゃ反対もできねーよ」

「飼ってもいいの？」

「ちゃんと世話はしろよ。あいつら、つけあがると最悪だから」

「うん、それは大丈夫！ いざとなったらぶん殴ってでも躰けるから！」

……なるべく、暴力はなしの方向でお願いします。

常識に縛られない小学生を相手にするのは、かなり厄介だから。

認めたくないが、今やゆつくりは小学生の間じゃポ・モンの代替品となっている人気のナマモノだ。皆殺しにしようもんなら、翌日には石が飛んでくる。

弱いゆつくりでも飼っていれば遊び友達、ゆつくりを持っていなければどんなに優秀な子でも馬鹿にされる。女子は当然のごとくそんな男子たちを養豚場の豚でも見るような冷ややかな目で見つめ、馬鹿な男子はそれに気づかずゆつくり育成に夢中になるのだ。

小学生男子ってのはそういうもんだ。

ちなみに、ゆつくりを鍛えるために外で走り回る子供が増えたため、県や国は学校や公園付近の警備の強化及び安全にゆつくりで遊ぶための場所の設置を検討中だとか。

……住み難い世の中になっちまったもんだな。

「んっふっふ、これでようやくあのガキどもと同じステージに立てる！ 今から、ゆいさんの復讐劇が始まるのだ！」

「いい大人が小学生と同じステージに立つちゃまずいだろ。……まあ、本当の理由は大体分かるけどな。最近、目に見えて腹回りがや

ばいし」

「ちちちちち違うもん！ ゆいさんは太ってなんていません！」
目をぐるぐるにして否定するゆいさんは、まあ可愛いと言えなくもない。

とはいえ、俺も人のことは言えない。最近おでんの味見やら酒の飲みすぎやらでちよいと運動不足。ランニングと軽い運動はサンとやっているが、たまには体を本格的に鍛え直すくらいはしてもいいかもしれない。

「ま、まあ太つてるとか太ってないとかは置いておいて、この話題は終了だからそろそろ拘束を外して欲しいな」 実はさつきから足が痺れて限界なのです」

「ああ、悪かったな。……話が横道に逸れた。そろそろ本題に戻さないとな」

「へ？」

ゆいさんが、ポカンとした表情を浮かべる。

そんな彼女に冷たい視線を向けながら、俺は言い放った。

「実のところ……ゆつくりを飼うことに怒ってるんじゃないよ」
ゆつくりを育てるために、色々と準備をしたんだろ。

俺が植えていたトマトだのジャガイモだのピーマンだの、わりと手塩にかけて育てていた野菜の苗を皆殺しにしてしまう程度には……周到な準備だったんだろ。

「えっと……なべっちは笑った方が可愛いと思うな！ だからそんな修羅みたいな顔は今すぐやめてっていうかとにかくごめんなさい！」

「はっはっは、いくらなんでも許すかタコ助。俺にも限界ってもんがあるんだよ」

新しい煙草に火を点けながら、俺は懷から携帯電話を取り出す。
それは恐らく……ゆいさんには最も効果のある切り札。

「あ、もしもし？ 先生ですか？」

サンは、ちらりと横目に二匹のゆつくりを見てから、口を開く。

「それでも、あたしの親を殺したのは、あいつらじゃない」

サンの視線の先には、二匹のゆつくりがいる。

幸いなことに地獄からやってきたクッキーのことは忘れ去ったらしい。

二匹で仲良く日向ぼっこなどしながらすやすやと眠っている。その寝顔は……多分、とてもゆつくりしたものだったと思う。

そんな二匹を見つめ、口元を苦々しく歪めて、サンは無理矢理笑っていた。

「体と共に心を鍛えろ。真の強さは心に宿る。……弟子にそう教え続けてきたあたしがなんの罪もないあいつらを潰したら、それが全部嘘になっちまうだろ？」

「……………」

「仇はなべさんが取った。だから、あたしは子供らしく我慢するさ」
強がっちゃって……まあ。

子供のくせに生意気だとは思いつつ、俺はサンの頭をくしゃくしゃと撫でる。

「分かった、頑張れ」

「ああ、頑張る。ゆつくりの世話もちゃんとするし、ゆいさんも叱る」

「すげえよな、お前。結婚してくれ」

「十年後に考えておいてやる」

いつものやり取りを繰り返して、俺たちは手を繋いで歩き出す。姉と妹に見えたらいいなあとそんなことを夢想した。

三時間後、家に戻るとゆいさんは燃え尽きていた。
体を畳の上に投げ出してぐったりと横たわり、目からはいつもの

輝きは失われ、ごべんだざいおねーちゃんと呟く彼女は、まさしく生ける屍そのものだった。

ほんの少しかわいそうになったが、自業自得なので同情はしない。同情をしない代わりに、言葉を投げかける。

「今回の反省は？」

「……勝手にお庭を改造すると罰が当たる。あと、ごめんなさい」「よくできました」

「反省したからひざまくら」

「へいへい」

「ごめんの後はいつも通り。懲りぢゃいないだろうが、反省はしてくれただろう。」

俺の膝に頭を乗せる弱々しいゆいさんを見つめて、俺は口元を緩める。

さて、それじゃあここからはいつも通り。

ゆいさんを構ってから、おでんの仕込みを始めましょう。

第三話：ゆいさんはいつもノンストップ（後書き）

ごめん大ちゃん。マジでネタが思いつかなかった。

いや、むしろ逆に考えるんだ。大ちゃんの出番は氷精編にこそ作るべきだと、そう考えるんだ！

と、いうわけで。次回、フランお嬢様&咲夜さん登場回（未定）。

また、番組は予告なく変更する可能性が以下略！

お楽しみに♪

第四話：妹様は退屈です（前書き）

フラン様登場回。東方LALに出番を作り忘れたので急遽出番を作ったわけだが・・・思った以上に使いづらいことが判明。

個人的には、紅魔館のキャラ的な使い勝手としては、美鈴>レミリア嬢>咲夜さん〃パチュリー>小悪魔>フラン嬢といった感じ。

そもそも、原作での会話も少ないし、さてどうしたもんかと悩んで反抗期。

あと、ルーミアの使い勝手の良さはガチ。さすが某陰陽鉄でメインヒロイン張ってるだけうわなにをするやめ（ry

仕事が忙しいので、本編が進まない。

さて……こまったぞう……

と、いうわけで第四話。物騙りの始まり始まり♪

第四話：妹様は退屈です

いのちみじかしこいせよをとめ。

フランドール「スカーレットは毎日退屈している吸血鬼だ。

ふわふわと屋敷内を飛びながら、ぼんやりと外を眺める毎日。

地下牢に閉じ込められている時ほど退屈ではないが、刺激的なこともない。弾幕ごっこは楽しいが、相手がいなければゲームは成立しない。

遊び相手になってくれる門番はこの時間帯は既に眠りについてい
るし、霧雨魔理沙は今日は遊びに来なかった。

「ん……退屈」

ふわふわと屋敷内を飛びながら、フランはゆっくりと溜息を吐い
た。

「なんか最近おかしいよね。美鈴は傷だらけだし、咲夜も腕折っ
ちやってるし、パチュリーは留守だし、一番元気なのはあいつくらい
なもんじゃない」

あいつ。フランの苦手な相手……この館の主でもある、フランの
姉のことだ。

その姉に関わるごたごたで、遊んでくれる相手がいなくなっ
てしまった。厳密には違うが、フランはお姉様のせいだと勝手に決め付
けた。

というか、最近では都合の悪いことは大体姉のせいだと思っ
てる。

人はこれを反抗期と呼ぶのだが、吸血鬼である彼女にそんな自覚
はない。ただ、なんとなく『お姉様と一緒にの空間にいたくないなあ』
と、感じているだけだ。

なにしろ、微妙な年頃なのだった。

確実に数百年は生きているだろうが、微妙な年頃なのだった。

「……………ん？」

と、退屈を持て余していたその時。フランは外に妙なものを見つけた。

リボンをつけた妖怪と、屋台を引いた人間が追いかけてくをしているようだった。

「……………ふふっ」

薄く笑いながら、フランは窓を開ける。

普段紅魔館からは出ることはないが、好奇心と退屈がそれを可能にした。

その追いかけてくがどのようなものか本質を知ることではなく。ただ、楽しそうだからという理由で、フランは屋敷から飛び出して外に出た。

全力で逃げていた。

屋台を引きながらというのが間抜けではあるが、とりあえず全力だった。

「テメー、カニバリズム少女。本当にいい加減にしろや！ 毎回毎回俺ばかり狙ってくるんじゃないよ！ 鬼ごっこや缶蹴りでも、同じ人は二回狙っちゃいけないってローカルルールがあるのをご存知ねえのかよ！」

「おねーさんが唇が美味しそうなのが悪いのだー」

「聞きよによっては百合っぱいセリフに聞こえないこともねえけど、むしゃむしゃといただくつもり満々だからねこの子は！ 二回目で食傷気味だけど、俺はジャツ●ハンマーにはなりたくありません！」

屋台を引きながらなので速度は出ない。少女の人食いもそれ分かっているのか、余裕綽々の笑顔で俺を追跡している。

狼に捕らえられる寸前の兔になったような気分。

とはいえ……あいにくだが、俺は兎ではなく、諦めの悪い人間なのだった。

屋台を止め、息を整え、性質の悪い酔っ払いやら暴漢対策に常備している金属バットを取り出す。

「悪いな、幼女。今日の俺は最初からクライマックスだぜ！」

「ものすごい気迫なのだー。でも、ルーミアはお腹が減ってるのだー」

「くつくつく、今の俺を簡単に食えると思うなよ。こっちの世界で翡翠やら琥珀やらの石を安価で仕入れ、それを俺の世界で売り払えばそこそこの金になることに最近気づいたんだ。つまり……金に目が眩んだ今の俺は3倍のパワー発揮する！」

「……きたない。さすがおでん屋きたない」

わりと真剣に考えた儲けのプランを、きたないで一蹴されてしまった。

うん、なんていうかそれだけならまだいいんだけど、ツンデレでもない幼女に汚物を見るような視線を向けられるのは、この上なくへこむね。

「とにかく、死に物狂いになった人間の力を見せてやる！ あ、お前はとりあえずスペカとか禁止な！ あと、なんか暗闇とか使うのも禁止。捕食者が飛び道具とか反則……」

「いただきますーす」

「だあああああああああああああああああああああああああああ
あ！」

背を向けて一目散に逃げ出す。次の瞬間には弾幕が地面を穿つ。

金属バットを持っていようが、相手は人間を捕食する妖怪。その力の差はワンダと巨像くらいあると思われるので、俺がどう足掻こうがどの道相手になりやしないのだ。

さて……どうしたもんか。

幼女に頭の中から爪先までもきゅもきゅされて、異世界で行方不明ってのは……。

「……数年前だったら、わりと悪くない末路だったかもな」
全力で走りながら、幼女を見据える。

スperlカードルールで戦う人間と妖怪を、何回か見たことはあった。

遠目で見るとそれは煌びやかで、美しく、まるで花火のように咲き散っていく。

あの輪の中に入れたら楽しいだろうとは思ったが、思うだけだった。

思うだけならタダだから。

ああ……そうだな。思い出した。思うだけなら、願うだけならタダだった。

それじゃあ神様仏様、世界中のありとあらゆる森羅万象の皆々様、どうかこの馬鹿で気持ち悪い男女の願いを聞いてくださいまし。

「ゆいさんの酒癖の悪さが、直りますように！」

叫んで反転。弾幕が地面を抉り、はねた土で服が汚れたが、知ったことではない。

前に出る。届いても届かなくてもいい願いは今使った。あとは前に出るだけだ。

他の誰かと同じように死ぬ間際まで……足掻き続けてやる。

「俺は、これから就職してゆいさんの家から離れて、テキトーに金持ちで照れ屋のいい男見つけた後にそいつと結婚して、子供は男が一人の女が三人で、実家の世知辛い人間関係とか、夫の浮気とか、子供の万引きとかに苦労しながらなんとか切り抜けて、子供が独り立ちして孫も見せてくれる頃合の、八十歳のババアになって大病を患って死の間際までにこにこ笑って、それを子供や孫に見せ付けて死ぬっていう、楽しく愉快で血を吐きそうになる人生を送るんだ。こんな所で……テメエに食われてる場合じゃねえんだよ！」

夢と希望に満ち溢れた未来なんざ夢想できるわけもないが、その

程度の夢なら見たっていいんじゃないかと思う。

思うだけならタダだ。空想するだけなら、人に迷惑はかからない。幻想を実現させるのは……俺じゃない他の誰かがやってくれるだろう。

「にやはー」 お姉さんは本当に美味しそうなのだー。森のゆつくりたちより、もっともつと美味しそうー」

「あつはつはつは、俺ア諦めが超悪いからな！ 足掻くしもがくし死ぬ間際まで暴れまくる！ 俺を食いたかったら、四肢をもぎ取ってから心臓に杭をぶち込むくらいはやらないとテメエときじゃ間違ひなく食えないね！ あと、骨とかの食えない部分は燃やして灰にしてからあつちこつちに埋めないと、もれなく復活する！」

「埋めなきゃ食べ放題なのかー？」

「自分本位じゃなくて、食べられる側の身になって考えろ！」

最早ツツコミなんだかよく分からないことを叫びながら、俺は突進する。

さて……まだちよいと早いが、覚悟を決めておこう。

ここで妖怪をぶちのめして生き延びる。おでんも売って懷も暖める。どっちもやらなきゃいけないってのがおでん屋の辛い所だが……なに、ギャングの幹部よりはましだろう。 雛見沢の少年のように、あるいはオカンの少年のように、金属バットを構える。

と、次の瞬間だった。

ゾクリ、と背筋が震えた。

心より体が先に反応する。反射的に、俺は幼女を突き飛ばして地面に伏せる。

頭の上をなにかが通過する。熱くて赤くて痛そうなモノ。その弾は離れた所にある湖に着弾し、大きく水を跳ね上げた。

まずい。なにか分からないがまずい。いつの間にか状況は最悪だ！
「おい、幼女。起きろコラ！」

「……な、なにー？」

「じゃれ合いはここまでだ。俺が囷になるから、お前は森に逃げろ」
「で……でもー……おねーさん、死んじゃうよー？」

幼女は、俺たちを襲ってきたモノがなんなのか、知っているらしい。

知っただけがいがいが関係ない。この幼女を含めて、あの赤い弾を放ってきた存在に勝てる者はそういないと……本能が告げている。

震える手で煙草を取り出して口に加える。火を点けたかったが時間があった。

「知ってる。だからこそ、俺を餌にして逃げろって言ってんだよ。捕食者」

「……おねーさん」

「ああ、それから……俺が死んでも、死骸を食うのはやめとけ。肺は真っ黒だし、肝臓はアルコール漬けだし、あちこち筋ばって美味しくないからな」

ポンポンと幼女の頭を撫でて、ゆっくりと立ち上がる。

遠めに見えるのは金色と赤。なんとも豪勢な美少女がこちらを狙っている。

やれやれ……ロクな死に方はしないと思っていたが、面白い末路になったもんだ。

「ふっ！」

呼吸を吐いて走り出す。

それと同時に、弾幕が天から降り注ぐ。地面を抉り、土と草を跳ね上げ、ド派手な赤が死を撒き散らす。

だが、恐らく死ぬことはない。

この弾幕を作っている少女が、スペルカードルールというものをきちんと把握していれば、回避方法のない弾幕は打てないはずだ。そんなものがあつたらまず勝負にならないし、なによりやって面白くない。

「まあそんな理屈は置いておいて、一般人がこんなもんかわせるわけねーんだケドなああああああああああああああああああ
ああああああああああ！」

ものすごく痛い、無視。ふざけんな、くそ馬鹿と言いつつ走り出す。

結局――死ぬんだろうか？

八重歯が綺麗な吸血鬼。楽しそうに笑っている捕食者。

殺す？ 殺される？ 今ここで？ アレの手にかかって？

殺されるのも悪くないか。末路としてはこの上なく上等。

アレと一緒に刺し違えるのも、悪くない。

首筋に冷たいモノが押し当てられる感触に、肌が栗立った。

「後ろから申し訳ないんだけど……貴女、どこの人かしら？」

「命がけのおでん屋っす。ほらほら、あの屋台とかがその証拠。幼女の妖怪に追われてここまで逃げて来たんですが、いきなりの弾幕にもう涙目でおしっこちびりそう」

「……なるほど、状況は分かったわ」

少々呆れたような溜息が聞こえてきたが、俺は一切気にしない。
いや……だってねえ。刃物ですよ？ 首筋に突きつけられているから正確なところは分からないけど、ドラ●エとかだとこんぼうよりも明らかに攻撃力の高い刃物を首筋に突きつけられてるわけですからね、ええ。こちらでも紳士的に対応する以外に対処法など何一つありはしないですよ。

と、俺がびびりまくっていると、背後の誰かは不意に口を開いた。
「フラン、この人間はただの人間よ！ あなたとは遊べないわ！」
「……げ、レミリアお姉様っ!？」

高いお金を払って買ったゲームがクソゲーだった時と似たような嫌悪に満ちた表情を浮かべながら、フランと呼ばれた吸血鬼は地面に降りてきた。

うん……なんつーか、育ちっていうか種族っていうか、根本から違うね。

超可愛い。これはつまり最強と言い換えてもいいかもしれない。
むくれている顔もかわいいあたりが、なんかもう卑怯くさい。

「なーんだ、遊んじゃ駄目なんだ。楽しそうに追いかけてっこしてたから、なんか楽しそうだなって思ったのに」

「フラン……紅魔館から出るなとあれほど言っておいたはずよ？」

「……………チッ」

「あれ？ 舌打ちした？ なんか今あからさまに舌打ちしたわよね？」

「してませ〜ん。それはお姉様の妄想です」

「あれ……なんか今すごく馬鹿にされた気がする。ああ、そうね。たまには妹と弾幕ごっこっていうのも悪くない。遊びたいんだった

ら死ぬほど遊んであげるわ」

「や」

それは、明らかな拒否。たった一文字だが明確に意志が伝わってくる言葉。

あからさまにも程があるだろう拒絶に、俺の背中から出てきた美少女……いや、大きな羽の生えた美少女は、こめかみに青筋を浮かべ、ものすごい形相で妹を睨みつける。

ああ……こつちも美少女なんだなあ。怒ってる顔も実に可愛らしい。

吸血鬼まじすげえパネエっす。

まあ、それはともかく、俺はやるべきことをやることにした。

「えっと……君はこの子の姉貴ってことでいいのか？」

「ええ、そうよ。っていうか、あなた……私のこと知らないの？」

「遠い所から来たんで詳しくは知らない。ただ、見れば分かることもあるし、多くを語るのは好ましくはないだろ。上位者は上位者らしく振舞ってくれればいい」

「へえ、殺されかけたっていうのに、なかなか殊勝な人間ね。……」

いいわ、妹の非礼と不始末は私が詫びましょう」

「いや、詫びとか別にいいから」

「……え？」

呆氣に取られる美少女の前に、手の平を差し出す。

それから、弾幕で取っ手部分と屋根が半壊したおでん屋台を指差して、言った。

「詫びはいいから、修理代を寄越せ」

レミリアと呼ばれた少女の頬が、一瞬だけ思い切り引きつる。

それからコホンと咳払いをして余裕たっぷり……口元を緩めた。

「あら、吸血鬼を脅すつもり？」

「いやいや、お嬢様。俺ア不当な催促は一切行っていない。その

超絶美少女の妹様に汚されちまった服の洗濯代と、屋台の修理代の要求をしてるだけだ。……それとも、まさか吸血鬼様とあるう者が、その程度の額を払えないとでも？」

「わ、私を愚弄するつもり？ そんなもの、払えるに決まってるじゃない。その、お金とか……そのあたりの管理はメイド長に一任してるから、彼女が戻ってくるまで待つてもらうことになるけど」

ママが帰って来ないと、お金がどこにあるのか分らないの。

そう解釈することもできるが……まあ、偉い人ってのはそういうもんだ。

レミリアはゆっくりと溜息を吐いて、苦笑した。

「まあ……そうね。本来なら妹の不始末は姉の責任ね。……とはいえ、今紅魔館はとも人手不足なの。あんまり大したもてなしはできそうにないわ」

「俺としちゃ修理代がもらえれば文句はないさ。飯と酒ならこつちで用意できるし」

「それならいいけど……そういえば、貴女一体何者なの？」

「おでん屋だ」

「おでん？」

「煮物みたいなもんだよ」

ゆっくりと立ち上がって背伸びをして、美人姉妹を横目に見る。

うむ、眼福眼福。美少女はいいものだ。明らかに世界的に保護すべきだろう。

喉元過ぎれば熱さを忘れる。命の危険まで忘れちゃうのはちよつといかんような気がするが……可愛いつてのはそれだけの価値がある。と、俺だけは思っておく。

と、そこで不意に視線に気づく。

なんだか拗ねたような、不機嫌そうな顔。フランと呼ばれていた妹は、しっかりと俺を睨みつけていた。

あんたのせいでお姉様に怒られたじゃないのと言わんばかりに。そんなに甘えたいんだったら、姉貴に甘えりゃいいと思ったが…

…妹ならではの葛藤があると思ったので、口には出さないでおく。
代わりに、別のことを言った。

「悪かったな、弾幕ごっこに付き合えなくて」

「……………別に」

退屈そうな眼差し。暇を持て余していた誰かの目。どこかでそれは見たことがある。

例えば……………高校生の頃、鏡の向こうで、見たような気がする。

「なあ」

「……………なに？」

「君には、弾幕ごっこで遊んでくれる友達はいるか？」

「……………うん」

「どんな奴だ？」

「えっと……………騒がしくて、泥棒で、私を見ても怖がらない」

返答はそれだけで十分だった。十分過ぎるほどに、十分だった。

友達がいるなら、きっと彼女は大丈夫だろう。

泥棒つてのも多分恋泥棒とか、そういう意味に違いない。

少なくとも、同性に甘えまくったり、気まぐれで虫やゆつくりを
飼い始めたり、風呂を覗いたり、フランクフルトに大量のマスター
ドを仕込んだり、へこんでいるからといってちゅーや膝枕なんて要
求する友達ではないのだろう。

一緒に遊んで楽しいダチが一人いれば、多分、きっと、大丈夫だ。
大丈夫だと俺だけは、思っ——。

いっ。

熟れ過ぎてはぜた果実のように、鮮やかな赤色がしたたり落ちる。
真っ赤な血をその場でぶちまけて、俺はその場に倒れ込んだ。

えっと……………さすがにちよいと唐突過ぎやしないか？

弾幕には当たらなかったし、出かける間際にフラグも立てていな
い。

りますよ？　こう、フィット感が最高というか、可愛くてもうたま
んねえというか」

「……………」

「あの、サンちゃん？　なにを書いてるのかな？」

「次の被害者の会に備えて、材料を集めてるんだ」

「……………材料？」

「あたしとしちゃ和菓子は嫌いどころか大好きの部類に入る。ま、
精々今のうちに会長に媚を売っておくことだな」

「……………サンちゃん」

「ん？」

「なにか、食べたいものはあるかな？」

「食べたいものはないが、あのヌンチャクみたいなげえむは欲しい
な」

「……………ゆとり世代め。モンスター狩って俺TEEEEですか？」

「猥褻ひわいな小説が部屋にゴロゴロしてる女に言われたかないな」

「……………んっふっふっふ。マ・ア様が見てるは卑猥な小説じゃないん
だけど？」

「……………あっはっはっは。モ・ハン舐めんな小娘」

二人の間に流れる空気がギチギチの最悪になった頃。

もう一人の同居人の運命は、まずいことになりつつあった。

第四話：妹様は退屈です（後書き）

と、いうわけでおでん屋さんがお亡くなりになったので今回で最終回とか、そんな戯言を真に受ける人は絶対にいないよねw w
血イ吐いた程度で終わるような外伝じゃないわけで。

次回は・・・この時点では一切考えてないけど、多分おぜうさま登場か、老師のわくわく日常生活。

ちなみに老師の口調が女の子の子してるのは、育った環境によるものと、本人が意識して変えてるのもあったりなかったり。

独り言だと、意外とじじくさい口調で喋ります。

第五話：あなたのなまえはなんですか？（前書き）

よく考えたら、怪我をしたら医者に行くべきだ。

と、いうわけで帰還編と蓬萊編の合間の外伝になります。話の都合上多少シリ阿斯が混ざります。

ではでは、第五話の始まり始まり♪

第五話：あなたのなまえはなんですか？

トンボだって、オケラだって、アメンボだって。

牛だって豚だって鳥だって。

ゆっくりだって。

人間だって。

みんなみんな、生きているんだ。

ごちそうなんだ。

下らない悪夢を見た。

終わらない絶無を見た。

つまらない虚無を見た。

夢の内容を覚えているのは久しぶりだったので、寝起きは最悪だった。

実家でやらされていたことを思い出し、さらに吐き気は加速した。トラウマと同属嫌悪。結局のところ、俺の餡子嫌いはそこに行き着く。

生にしがみついていたわけでもない。

死を望んでいるわけでもない。

なるべくなら死にたくはないが、さりとて長生きしたいわけでもない。

どう足掻いたところで……結局は無駄に終わるのだから。

あいつらと、同じように。目的を果たせずに終わるはずなのだから。

「……………ん？」

目を開けると、そこには見知らぬ誰かがいた。

銀色の髪を三つ編みにくくった女性。同姓の俺から見ても美少女

……いや、美女の部類に入る。年齢は俺より年下か年上かは判別できない。服装は赤と青を組み合わせた、ある種奇抜でとんでもなく派手なものだが、それが派手に見えないのは着ている彼女自身が派手であるせいだろうか。

熱を測っているのか、彼女は俺のおでこに手を乗せていた。

「具合はどう？」

「……アンタ、誰だ？ 医者か？」

「私は八意永琳。一応医者よ。紅魔館の主直々のお願いで、あなたを治療したの」

紅魔館。真っ赤なお屋敷。美少女が二人。吐血。

そこでなにがあったかを思い出す。

「あー……そういえば、弾幕に巻き込まれて死にかけたんだった」

「全身の擦り傷、切り傷はともかく、動き回ったせいで折れた肋骨が肺に刺さっていたからね。冗談じゃなく、あと少し遅かったら死んでたわ」

「……なるほど」

あと少し遅かったら死んでたということは、今回も死に損なっただらしい。

「……神様ってのは、つくづく俺のことが嫌いらしい。」

美少女の胸の中で死ぬってのは、わりといいシチュエーションだというのに。

と、不埒なことを考えていると、不意に不可解なことに気づいた。

「ん？ でも、今は痛くもなんともないぞ。痛み止めでも打ったのか？」

「治療の過程と使った薬品については秘密にさせてちょうだい。……」

……それとも、どんな手段で治療したか、知りたい？」

「助けてもらっておいてなんだが……アンタ、後ろ暗いことがある人間だろ？」

「質問を質問で返すのは失礼じゃないかしら？」

「質問を返されて気分を害するくらいだったら、黒幕っぽいと思わせ

ぶりな態度はやめた方がいいと思うぞ」

ゆつくりと体を起こす。間抜けなことに、その時になってようやく自分がなにも着ていないことに気づいた。

多分、治療の邪魔になるとかそんな感じの理由で脱がしたんだろう。

手、足、腰、首、その他間接には異常なし。切り傷や擦り傷には絆創膏らしきものが張られている。最も重傷だと思われる腹には包帯すら巻かれておらず、激痛が走っていた箇所には縫合した痕跡すら見られない。

どんな魔法を使ったんだか知らないが……都合のいい魔法もあったもんだ。

「ま、深くは突っ込まねえよ。こっちは助けてもらったわけだしな」
「知り合いに頼まれたからね」

俺の様子を見て問題ないと判断したのか、永琳さんは俺を見つめて溜息を吐いた。

「……ま、深く突っ込まないのはお互い様ってことにしておきましょう」

「それでいいさ。俺も面倒ごとは御免だ」

「で……一つだけ聞いておきたいんだけど、あなた本当に女性で間違いないわね？」

「ぶっ飛ばしたるか、ヤブ医者。素っ裸にひん剥いておきながらそりやないんじゃねーかと思うのは、俺の気のせいかな？ それともアレか、お医者様は頭がいいし金も持つてるから人のコンプレックスをなんぼ抉っても殴られないって誤解してるのか？」

「お金はないわ」

「……………」

金がないときっぱり告げた永琳さんの目は、この上なく悲しそうだった。

なんとも、切羽詰った話を聞いてしまった。

ゆつくりと溜息を吐いて……仕方なく、口を開く。

「治療費、いくらだ？」

「え？」

「魔法だか手術だか知らないが、とにかくアンタに助けてもらったのは事実だからな。対価はちゃんと支払うさ。あんまり高額だと払えんが、出せるだけ出すよ」

「……………」

「ヲイコラ、なんだその意味ありげな沈黙は？ まさか俺が寝てる間に財布から金抜き取って全部使ったとかそーゆーオチじゃねえよな！」

「え、えつと、そんなことはしてないんだけど、似たようなことはしたかも」

「あつはつは……まさかとは思うが、俺が引つ張ってたおでん屋台からテキトーに色々食いまくってるとかそんな、分かりやすく、安易で、俺が一方的に損をするオチじゃないよな？ お医者様ともあるう人が、まさかそんなおでんごときで」

「……ごちそうさま。個人的には竹輪が美味しかったわ」

「お粗末さまでした！ あの竹輪は手作りだから美味いに決まってるだろうが！」

普通、人の屋台のおでん勝手に食うかつ！？

あるいは、それほどまでに逼迫しているんだろうか……医者のくせに。

ブラックジャック先生を見習ってほしいと思う。

「ったく……まあ、食ったものは仕方ない。一応、不本意ながら、こっちは命を助けられたわけだしな。今回は治療費と相殺でいいさ」
「そう言ってもらえるとありがたいわ。ウチにも……その、色々あって」

「まあ、その色々はどうでもいいや。なんか聞いてもどうしようもないことっぽいし。それより俺の服返してくれ。上着はともかく、下のクラッシュジーンズはわりと気に入ってるんだよ。結構高かったし」

「……………え？」

きよとん、とした表情を浮かべる、竹林のお医者さん。
背筋に嫌な汗が流れるのが、はつきりと分かった。

「なあ……………えーりんさんよ」

「……………な、なにかしら？」

「もしかして……………俺の服、捨てちまったとかそういうオチじゃないよね？」

「捨ててはいないわ」

「あ、そうなの？　なんだ……………びっくりした。俺はてっきり」

「芋を燃やすのに使っただけよ」

「そこに直れヤブ医者あああああああああああああああああああああああああ！」

結局というか、予想通りというか、なんというか。

俺は結局、目の前の女性に長々と説教をすることになってしまった。

と、まあそんなわけで、幸いなことに下着は無事だったがえーりんさんのすっかりミスにより服が燃え尽きてしまったので、弁償してもらった。

ただ、えーりんさんの服はド派手だし、胸的な意味でサイズが合わないので、えーりんさんの弟子だか誰かの服を借りることになってしまった。

……………うん、まあこの際服ならなんでもいいけどさ。

いくらなんでも20歳の女がブレザーにミニスカってのは、正直きつい。

というか……………こんな服装が趣味の弟子とか普通に嫌だ。

「あら、似合うじゃない。普段からそういう服装なら間違われることもないのに」

「いや……………それ、あんまり嬉しくねえわ」

足元がスースーする。正直落ち着かない。

「つか……これ、しゃがんだりしたら中が見えそうなんだけども

「……なあ、本当にこれ以外の服ってないのか？」

「あなたのサイズに合いそうな服はそれ以外にはないわよ。……もうちょっと体格が小さければ、まだ着られる服もあったんだけど」

「うっ……」

こういう時、自分の中途半端なスタイルが恨めしい。

もしくは、目の前のボインさんがもちっと慎ましかなスタイルだったら、俺もこんな羞恥プレイをしなくても良かったはずなのに。

携帯電話や財布などの私物を詰め込んだバッグを受け取ってから、スカートを翻して立ち上がる。

さて……それじゃあ、懐かしの我が家に帰りましょうか。

「……ま、なにはともあれ世話になったな。ちよいと礼が後れたが、ありがとな」

「医者として当然のことをしただけよ。それに……おでも食べちゃったし」

ばつが悪そうに顔を逸らすあたり、罪悪感はそれなりにあったらしい。

俺はゆっくりとため息を吐きながら、率直な感想を述べた。

「ったく……最初からそういう風に可愛く反省してくれりゃ、俺としても説教は一時間ほどで済ませたつてのに」

「あら、お世辞でも可愛いって言ってもらえるのは嬉しいわね。

「……どう足掻いてもお説教はされちゃうみたいだけど」

「世辞じゃねえよ。本音だ」

「私、多分あなたが思ってるよりもずっと年増だけど？」

「年齢は関係ねえよ。外見や年齢に関係なく、女つてのは幸せに笑ってりゃいつでも可愛いもんだ。俺の実家の近所に住んだばーちやんなんで、いつでもいつも幸せそうでも可愛かったし。……ま、えーりんさんの場合はちよいと事情がありそうだが」

「……分かるの？」

「嘔吐きは嘔に敏感だ。付け加えるなら、誤魔化しの気配にも敏感だよ」

幻想郷の連中は、人間でも妖怪でも大体真面目だ。

だからこそ、嘔を見抜けない。押し売りくらいはあっても大規模かつ本格的な詐欺に騙されたことは恐らくないだろう。

えーりんさんは群を抜いて頭が良いようだが、それでも嘔を吐くのは下手だ。

表情は誤魔化せる。挙動不審などももちろんない。それでも嘔吐きとしては三流だ。

決定的な所……虚構の気配を、隠せていない。

「俺としては、後ろめたさに潰される前に親しい誰かに悩みを打ち明けることをオススメしておく。えーりんさんは強いけど、欺くことには慣れちゃいない」

「……肝に銘じておくわ」

「なに、お釣りみたいなもんだから気にするな。外の世界で治療したらもつと高くつくからな。おでんと説教とアドバイスで、対価の相殺としては悪くない。……ジーンズの件については、俺が生きてる限り絶対に忘れないが。あと、あの赤い館の関係者に会ったら『慰謝料は直に取り立てに行く』って伝えておいてくれ」

「……分かったわ」

二時間に及ぶ説教を思い出したのか、苦渋の表情を浮かべるえーりんさんは、わりと可愛かった。

先生に手を振りながら部屋を出る。部屋にいる時から薄々感づいてはいたが、どうやらこの屋敷は竹林の中に建っているらしい。

医者をやらんだったら、人里でやった方が確実に儲かるだろうとは思ったが、えーりんさんには、なにかしら考えがあるんだろう。元々、俺が口を出すようなことでもない。

地球の歩き方。危ない所には近寄らない。

事情があるんだったら、お互いに不干渉でいましょう。

そう思っているのに……状況がそれを許さないことも、多分あるんだろう。

どうやって運んできたのか、屋敷の前に屋台は置かれていた。弾幕で多少傷ついてはいるが、工具と補強材さえあれば楽に修復できるくらいの損傷だった。

もつとも……損傷については、今はどうでもいい。

屋台の座席に座り込んで、漫画を読みふけってる美少女がそこにいた。

腰まで届く長い黒髪に、大きな瞳。ただ漫画を読んでいるだけなのに、優雅とも取れる立ち振る舞いから育ちの良さがうかがえる。肌は抜けるように白く着ている衣装はまるで平安貴族そのもの。

ただ、その瞳に写していたモノは……彼女の第一印象とはかけ離れていた。

「あら……えーりんってば、もう治療しちゃったんだ。仕事が早いなあ」

「……アンタ誰だ？」

「蓬莱山輝夜。この『永遠亭』の主人よ」

俺を真っ直ぐに見据えながら、少女……輝夜はにっこりと笑った。なんの苦労もなさそうな、お嬢様の表情だった。

いや……あるいは、なにもかもを知り尽くした老婆のような顔だったかもしれない。

まるで逆のことを連想しながら、俺はゆっくりと溜息を吐いた。

「で、お嬢ちゃん。アンタ人の屋台でなにやってんだ？ それと、その漫画は俺が買ったもので、ついでに言えばまだ一ページも読んでない新作なんだが」

「お嬢ちゃんとは失礼ね。私、こう見えてもあなたよりよっぽど年上なのよ？」

「実年齢は関係ないだろ。人間関係ってのは信頼と敬意で成り立つ

もんだ。信頼と敬意はやるべきことをきっちりやったかで決まる。ただ、人並以上になんでもやれるからって、必要以上にでかい態度を取ってると疎まれる」

「……なにが言いたいのか？」

「許可なく人の漫画を読むな。読みたいんだったら対価を払え。金とか」

「や」

一文字かつ分かりやすい拒絶だった。

うん、実に可愛い。姫って基本こういうキャラじゃないといかんよね。

あまりの可愛らしさに頬は緩んだが、体はいらつきを処理するために、輝夜ちゃんの頭を掴んで力を込めていた。

「あだだだだだっ！　ちょ、いきなりなにすんのよっ！？」

「ほらみる、対価を払わないから痛い目に遭うんだ。さつさと本を返すか金を払うかしないと、このままエ・モンド本田が得意とする相撲技『鯖折り』に移行する。あの技って、ほぼセクハラだけどまあ別にいいよな」

「いいわけあるかー！」

どんな裏技を使ったのか、輝夜ちゃんはあると俺のアイアンクローから抜け出していた。……まあ、ちよつと涙目に見えたのはあえてスルーの方向で。

輝夜ちゃんは頭を押さえながら、俺に指を突きつけた。

「私になにかあったら、アンタこの竹林から出られなくなるんだからね！」

「残念ながら、俺に脅しは通用しない。……もしも俺になにかあったら、この家のネットワーク環境が全て使えなくなると考え！」

「な……ん、ですって！」

あまりに予想外のことを言われたのか、輝夜ちゃんの顔が思い切り引きつる。

ニヤニヤと口元を緩めながら、俺は肩をすくめていやらしく笑う。

「くつくつく、思った通りだ。えーりんさんのような女性は自分と趣味と家族だけでこの竹林での生活という退屈に対応できるが、君のような子は日々の退屈には耐えられない。それを解消するのがゲームやらネットというわけだ。……幻想郷でゲームとかネットつてもアレだと思うけど」

「な……なんのこと、かしら？」

「……ブルーメッセージ」

「はう！」

「……再セツトアップ」

「ちょ、やめて！ それ以上不吉なことを言わないで！」

うーん……可愛い。耳をふさいでフルフルしてるあたりが特に可愛い。

実際のところというか、当然のことだが、彼女自身やらこの屋敷に対してなんにもするつもりはない。第一この子が本気になったら、俺ごとき小市民など一瞬で粉微塵に決まっているのだ。幻想郷で『主』と呼ばれる存在に手を出すほど、俺はお馬鹿ではない。

しかし……まじ可愛いな、この子。紅魔館の吸血鬼も洒落じゃなく可愛かったけど、この世界の『主』って呼ばれる存在はみんな可愛いもんなんだろうか。

「そういうわけで、双方のためにもここで争うのは得策じゃないと思うんだが？」

「……そうね、勝手に読んじゃってごめんなさい。目新しいものがあると、つい」

「ま、別にいいさ。別に漫画が読めなくなっただけでもないし。俺としちゃ対価として髪を梳かさせてくれれば、それでいい」

「あの……それって別に対価でもなんでもないんじゃない？」

「いやいや、これが案外侮れないもんだぜ？」

鞆の中から櫛やら髪をくくるためのゴムを取り出しながら、俺はにやりと笑う。

「少なくとも……おしおきにはちょうどいい程度の精神的苦痛は伴

うからな」

立派な髪をどういう風に料理してやろうかと夢想しながら……口元を緩めていた。

弓を引き絞る。矢をつがえる。心は穏やかに、冷静に。

姫の髪のを結び始めた少女に向かって、屋根の上から矢を向ける。

「……………」

幸いなことに、ここは迷いの竹林だ。案内人がいなければ永遠亭に辿り着くことすらできない。ましてや竹林の中には腹を空かせた虎や妖怪がウロウロしている。

ここで誰かが消えたとしても——なにも問題はない。

この永遠亭に住んでいる自分たちは、既に閻魔に見放される程の罪人だ。今更……虚構を隠すために、人間の一人や二人殺したところで大したことはない。

「おでん屋さん。なんか、髪のが突っ張るんだけど」

「さすがにポニーテールにするには、ちよいと髪が長すぎるか」

結い上げた髪を解いて、今度はお団子状にまとめていく。

「しかし、なんつーか……いい髪質してるな。普通に羨ましいんだけど」

「えーりんがいつも整えてくれるからね。たまには自分でやるって言ってるのに、いつまで経っても子供扱いなんだから」

「じゃ、この屋敷を出て人里で一人で暮らせばいいだろ」

「簡単に言わないでよ。いつまで経っても年を取らない人間が、人里になんて住めるわけないでしょ？ それこそ……気味悪がられるし、最悪殺されちゃうわよ」

「……なるほど」

お団子にまとめた髪は気に食わなかったのか、いったん解いて新しく結び直す。

皮肉げに口元を緩めて、おでん屋は苦笑した。

「なるほど、輝夜ちゃんといーりんさんは不老不死なんだな？」

「そうね。年も取らないし死にもしない。いえ……正確には、死んでも生き返るの」

「ふうん……そりゃめんどくせーな」

相槌を打ちながらも、おでん屋は真剣な表情で髪をくくつたり解いたりする。

どうやら、不老不死についてはどうでもいいらしい。

「んー……やっぱり、ノーマルが三つ編みが一番可愛いな。なんとかして工夫したいところではあるが、元がいいとそんなもんか」

「あの、おでん屋さん？ 私の話聞いてた？」

「聞いてるよ。だからちゃんと『めんどくせえ』って言っただろ？」

「……それだけ？」

「感想はそれだけだ。俺には不老不死の人間の気持ちは分からないただ……輝夜ちゃんやえーりんさんには明日死ぬ人間の気持ちは分からないだろ？」

一通り髪をいじって満足したのか、おでん屋は輝夜の髪に櫛を通す。

その手つきは優しく、丁寧で、不老不死に対する引け目も忌避もなかった。

「想像はできるけど共感はできない。今日か明日か明後日か、それとも今かは分からないが、いつか俺は死ぬ。……布団の上で大往生はできそうにないが、それでも死ぬ」

「……………」

「こんなこと、腐るほど言われて食傷気味かもしれんが、つまりそういうことだ」

想像はできるけど、共感できない。

分かったふりをすることはできるけど、理解はできない。

不老不死じゃないから。

いつ死ぬか分かったものじゃないけど……いつかは、死んでしま

うから。

「ただ、不老不死だろうが妖怪だろうが、腹は減る。生きてりややることはみんな一緒だよ。俺に言わせれば、永遠の美少女を忌避する連中の気持ちに分からんね」

「や……あなた、相当の変わり者だと思っわ」

「俺もそう思っよ。輝夜ちゃんと違って、育ちが悪いんだ」

自虐的なことを言いながら、おでん屋はケラケラと楽しそうに笑う。

そして……結局、輝夜の髪をお団子にまとめてから、屋台の下から数冊の本を取り出して輝夜に渡した。

「……なにこれ？」

「輝夜ちゃんが読んでた漫画の前の巻。新刊だけじゃ展開分からないだろ？」

「んー……でも、これもらっても後の展開が分からないんじゃ面白くないわ」

「誰がやるか。貸してやるから、後でちゃんと返せ」

「けち」

「育ちが悪いからな」

おでん屋はいたずらっぽくにやりと笑う。

つられるように、不老不死の少女……輝夜は笑った。

まるで普通の女の子のように、笑っていた。

それから少しして、おでん屋は白い髪案内屋と一緒に永遠亭を後にした。

おでん屋台が見えなくなっってから、八意永琳は弓を下ろす。

彼女は異邦人だ。外の人間だ。もう、ここに来ることもない。

だったらなぜだ？ 彼女を狙っていたこの矢はなんだ？ なぜ私はこんなことを？

「……ああ、そうか」

後ろめたいことがあったから。

後ろめたいことを見抜かれてしまったから。

ばらされるのが不安で、だから反射的に弓を取った。

しかし、最初から最後まであの人間は、なにも語らずに立ち去った。

後ろ暗いことを見つげながら、それを見て見ぬふりをして、立ち去った。

『えーりんさんは強いけど、欺くことには慣れちゃいない』

それは、欺くことに慣れた人間だけが言える言葉。

弱いからこそ嘘を吐き、醜いからこそ偽装して、嫌われたくないから欺いた。

危険がない人物だということは治療後に依存性のない自白剤を投与して確認済みだし、過去の経歴も分かっている。彼女は外の世界の人間で、幻想郷には『能力』を使用してやってきたこと。その能力は誰かに危害を加えるタイプの能力ではなく、極めて限定的で使いつらいものであること。

そして……彼女の体質のことも、知ってしまった。

「……化け物、か」

不老不死の自分たちを『可愛い』と評した、おでん屋。

自分たちのような歪なモノを見ても、彼女は揺らぐことはなかった。

異常で異質。幻想郷にぴったりの人間。ただの嘔吐きのくせに、異質を受け入れる。

いや……あるいは。

不老不死など取るに足りないほどのなにかを、彼女は知っていたのかもしれない。

「……我ながら、馬鹿なことを考えるものだわ」

溜息を吐いて、永琳は自嘲気味に苦笑していた。

一方、その頃。

不老不死の薬師に化け物と評されたおでん屋……もとい、少女は涙目だった。

「というか……ほとんど泣いていた。」

「もーやだあ！ 蛇が出るとか聞いてないよう！ おうち帰るう！」

「だから離れろって！ 今その『おうち』ってのに帰ろうとしてんだろつが！ 大体、あの蛇には毒もなんにもありやしねえつつうの！」

「……毒とか関係ないもん！ 蛇怖いもん！」

「いや……もんとか言われても、私は別に蛇とか怖くないし」

「にぎやあああああああああああああああああああああ
あ！ が、ガサツっていった！ 絶対蛇だ！ 間違いなく蛇だ！」

「いだだだだだ！ ば、馬鹿、髪を引っ張るんじゃない！」

「だって、蛇が……蛇が！」

「大丈夫だって言ってるだろうが！ 蛇が出てきてもどうってことないし、なにかあったら私が守ってやるから！」

「……………ホント？」

「ああ。とりあえず、アンタは客だからな。無事に外まで送ってやるよ」

「……ふつつかものですが、よろしくお願いします」

「あれ？ なんで三つ指ついたの？ なんで土下座してるの？ なんでこつちを見る目が若干潤んでるんですかつ！？」

「大丈夫です。妹紅さんがどんな人でも……蛇じゃなきゃ、耐えられますから」

にこりと笑うおでん屋の目からは、輝きが失せている。

「どうやら……パニックのあまりなにがなんだか分からなくなっているらしい。」

ぶちつと音を立てて、案内屋の堪忍袋の緒が切れた。

「かぐやああああああああああ！ 今度会ったら、絶対にぶつ殺してやるからなあああああああああああああああああああ！」

面倒な客を押し付けてくれた永遠亭の主の名前を叫びながら、白い髪のご案内……藤原妹紅は、おでん屋に抱きつかれながら涙目になっていた。

第五話：あなたのなまえはなんですか？（後書き）

次回、第六話はどうでもいい現代ものになる予定。

ただ、こちらの方はフリーダムにやらせてもらっているので掲載時期とかあんまり考えてないのですが、本編のほうが色々悩むところがあつて遅筆中。

……いや、シャンの可愛らしさをどう伝えていくかとかどうでもいい所で苦悩してるわけですがww

第六話：いけないことはいけません（前書き）

と、いうわけで東方LAL外伝第六話、後輩さん登場回で、ある意味ではゆつくり育成講座。

ゆつくりはわりとデリケートな生き物だそうなので、飼うのは面倒だと思うがゆつくりが好きな人はそんなことは構わずに滅茶苦茶可愛がるに違いない。

ただ、懷けば可愛いと思うけど、心の底から本気で懷いてくれるまでが至難って気がする。

……あれ？ これ生意気なお嬢様系キャラのテンプレじゃね？

と、そんな無意味な疑問を投げかけつつ、第六話の始まり始まり〜

♪

第六話：いけないことはいけません

だから、餡子は嫌いだったってんだろ？

ここではない世界。通称、幻想郷で死にそうな目に遭って戻ってきた。

そんな俺を待っていたのは、ゆいさんの笑顔と三時間に及ぶ説教だった。

『なべっち？　さすがに無断外泊は良くないと思うんだよ。や、私のことはいいんだ。私のことはいいんだけど、献身的にゆっくりの世話をしてるサンちゃんのこととかさ、もーちよっと労わってあげてもいいんじゃないかな？』

いやそのゆつくりはゆいさんが飼いだしたもので……すみません。もう反論しないから耳はやめて耳は。くてってなっちゃうから！

『そんなわけで、なべっちには二つの罰を受けてもらいます!』

そう言ったゆいさんの口元は、実に楽しそうに歪んでいたわけで。もちろん、俺にゆいさんに逆らう方法があるわけもなく、それ以前に後ろから抱きしめられて耳を齧られていた時点で、どうしようもなかったりする。

「……まったく、めんどくせーな」

そんなわけで……ゆいさん曰く、罰の一つ。我が家の庭で絶賛生殺し中のゆっくりどもの小屋の掃除をしているのだった。

[illegible]

ゆつくりは水に弱い生き物ですが、汚れている場合はある程度なら水洗いしても構いません。適度なタイミングで体を拭ってから自然乾燥させると、もちもちすべすべとした肌を取り戻します。髪の毛のブラッシングは適度にしてやると、ゆつくりも喜びます。

ただ、洗ってやる際には飾りの紛失にご注意ください。……ってところか。

水に濡れたまりさを手早くタオルで拭いてから帽子をかぶせ、暴れられると面倒なので穴の開いた通気のいい透明ケースの中に放り込む。

ケースの中に放り込むと、ゆつくりのストレスが溜まってしまうのであんまりやりたくないのだが、賢いれいむならまだしもこいつの場合は水浸しになった庭に突貫し、そのままお陀仏になりかねないので、緊急措置だ。

「ばでいざとでいぶのゆつくりぶれいずが……」

乾燥的な意味で、全ては太陽が解決してくれるのだが、まりさは人に自分たちの場所が荒らされたと勘違いしているようだった。

まあ、心底どーでもいいが。正直、疲れたので相手にするのも面倒だ。

「あー……疲れた。いい頃合だし、シャワーで汗流して昼飯にするか」

水に濡れた庭からはさつさと退避だ。まりさがホースを踏んでしまったせいで実はこっちも水浸しで、下着まで透けているのでとつととシャワーを浴びたい。

その前に体を拭きたい気分だったのだが、あいにく家には誰もいなかった。

ゆいさんも、サンも、昼飯の買い物に出かけている。

「……仕方ない。玄関に回るか」

縁側から家に入ってもよかったのだが、それやってしまうと水で地面が濡れてしまい後々面倒なことになる。玄関にはタオルが常備してあるので、それで体を拭いてからシャワーを浴びることにし

よう。

と、玄関に回ったところで、なんだか奇妙な視線を感じた。

「……………あう」

「……………」

家を囲む塀から、誰かがこちらを覗き込んでいた。

見覚えのある顔だ。見た目は美少女で銀の髪を持つという、日本では到底考えられない美少女なのだが、眼鏡に三つ編み、化粧ツギゼロに加えてジャージという、明らかな変質者スタイルによって全てを台無しにしている女だった。

俺は躊躇なく、携帯電話を取り出した。

「もしもしおわりさん？」

「つて、いきなりなにしてるデスかああああああああああああああッ！？」

彼女…………ゆいさんの後輩である、わんちゃんは思い切り叫んでいた。

と、いうわけで罰ゲームその2の開幕である。

銀髪美少女、通称わんちゃん。ゆいさんがわんちゃんと呼んでいるので、俺もそのままわんちゃんと呼んでいる。間違いなく美少女……………というか、美女の部類に入る女性なのだが、前述したように壊滅的なセンスの悪さにより、素材の良さの全てを木っ端微塵にしているような女だ。

本人曰く、ハーフでしばらくはアメリカに住んでいて最近両親と共に日本国籍を取得したとのことだが、日本語しか喋れないあたりがすごく怪しい。やたらネガティブだし押しに弱いし、確実に日本に住んでいたと思う。

「で、何の用なんだ？」

昼飯のつけ麺をもちゅもちゅと齧りながら、アホの後輩に問いかける。

ちなみに、昼飯を買ってきた後、ゆいさんとサンはすぐに出かけてしまった。どうやら服の新作やら子供服の安いやつを見に行くそうだ。

俺も行きたかったのだが、丁重に断られてしまった。

安くてもいいから新しいGパンを仕入れたいところだったのだが、罰ゲームをこなさないと、外出禁止とのことなので仕方ない。

「金をくれるんだったら、この口座に振り込んでくれればいいから」「いきなり何の話ですかっ!？」

「あれ、金くれるんじゃないの？ 迷惑料とか、ストーカー犯罪とかそのあたりの示談金みたいな感じで。90万くらいでいいから」

「あげないし金額が生々しいですよ！ 大体、なべっち先輩一人しかいないって分かってれば、最初から躊躇なくインターフォン押してましたよ！ あと、曲りなりにもお客の前で下着姿ってどういうことですかっ!？」

「……裸にYシャツを着るとか、いやらしい」

「どんな曲解解釈ですかっ!？」

まあ、単純に上着を全部洗っちゃったから着るものなくなっただけなんだけども。

それに、基本的にこの後輩のことを客扱いしたことはないの、問題はない。

見られようが見られまいが、そんなことはどちらでも同じことなのだ。

「で、話を最初に戻すけど何の用なんだ？ つまんねー用事なら、さっさと帰れ」

「つままないってことはないですよ。……その、飼っているペットのことで相談が」

「つまんねー用事じゃん」

「つまらなくあるか馬鹿先輩！ こっちは真剣なんですよ!」

おお、本気で怒られちゃった。大人しいこの後輩にしちゃ珍しい。大体、大学で私がレズとか吹聴してるのも先輩でしょうが！ 私

はレズじゃなくて、単にゆい先輩のことを尊敬してるだけです！」

「レズじゃない。俺は真剣に、お前のことを百合だと思っている！」
「同じじゃー！」

怒りのあまり、ちゃぶ台に両手を叩きつける後輩。

ドガツという鈍い音を立てて、ちゃぶ台が少し浮いてつけ麵のつゆがこぼれた。

ををう……さすがに怒らせ過ぎたか。からかうと面白いから、ついつい羽目を外してしまうのが俺の悪い所だ。ここは反省しておこう。

「まあ、冗談はここまでにして……ペットって、なに飼ってるんだ？ 犬とか猫なら獣医に相談した方がいいと思うんだが」

「いえ……その、ゆつくりを」

「……………」

わあ、素敵！ なんてお約束通りなんだろう、死んじゃえないのに！

俺の周囲にやゆつくりを飼う人間が多すぎるんだよ！

「……蒸籠に入れて、ホカホカになるまで蒸せばいいんじゃないかな？」

「それじゃあ死んじゃいますよ！」

「知らないのか？ ゆつくりは森に住む妖精さんだから死なないんだぞ。死んだように見えても、あれはゆつくりのいた世界に帰ってるだけだから」

「……そ、そうなんですか？」

「ンなわきやねーだろ！ なんでちょっと騙されかけてんだよ！ そんなんだから、お前合コンの時に危うく持ち帰られそうになるんだろうが！」

これだからわんこちゃんは目が離せないんだよ！

日本の常識となっているが、合コンとは合同コンパのことを指す。当たり前で大切なことだが、男女共に彼氏彼女を見つけるための行事なので、基本的に高めのテンションで参加しなくてはならない。

しかし、テンションに任せてあれやこれやになると後々後悔することになるので、興味がない人間は、空気読まずにめっちゃ飲み食いすればいい。

ただ、お酒を飲み過ぎると持ち帰られてしまうので、注意が必要だ。

「や……さすがに先輩に言われるのは、ちょっと。男の人の話も聞かずにバクバクお好み焼きをむさぼり、お酒を飲みまくる人たちがいましたと思うんですが」

「俺ア、毒にも薬にもならねえ自慢話には興味ねーんだよ。大体、男の趣味なんて女にしてみりゃクソみたいなもんだろ。そんなもんに傾倒するより、子供好きとか猫好きとか、そういう可愛い面でアピールして欲しいね」

「……さいですか。まあ、それはそれとして、ウチのペットのことなんですけど……」

少し言い淀んでいたが、わんちゃんはやんは意を決して口を開いた。

「先輩……『れみりや』って知ってますか？」

れみりや。ゆつくりの中でも『捕食種』に該当するゆつくりだ。外見はばくさいベビーフードと、絵に描いたような笑顔。そしてゆつくりには極めて珍しい飛行能力。鋭い牙でゆつくりには噛み付き、餡子を吸い上げて中身を捕食する。

他種のゆつくりに比べればコミュニケーション能力には劣る。捕食種だからかあるいは種族的なものなのか、性格はわがまま。素人が躡けるのはそこそ難しいが、コツを掴んでしまえばなんとかならないこともない。

餌についても、生餌用のゆつくりが嫌なら缶詰の餡子でも与えてやればいい。他のゆつくりと同じように贅沢は敵だが、こいつの場合には基本甘いものしか口にしないので、過ぎた贅沢をさせなきゃ食事に関してはさほど心配することはない。

ちなみに、中身はなぜか肉まんの餡。要するに肉まんの中身だ。どういうメカニズムで食べたものを餡に変えているのかは不明。この辺は考えたら負けだと思っている。

分らないことは、えらい学者先生に任せておけばいいのだ。

一応希少種扱いなのだが、他の希少種よりは見つけやすい。

ただ、脱走したれみりやが他の人間が飼っていたゆつくりを食べってしまったために、裁判沙汰にまで発展する例も珍しくはない。

まあ、飼っていたペットを食われたら誰でも激怒するわな。

「……滅茶苦茶詳しいですね」

「で、そのれみりやがどうしたんだ？ 躰の方法なら百八通りくらいあるけど」

「や……躰もそうなんですけど、ちょっと困ったことになりました。とにかく、詳しい話は私の家ですんで、これから出かけませんか？」

「気分が乗らないなあ」

「……分かりましたよ。今度、焼肉奢ります。食べ放題ですけど」

「OK。ただし、クソ面倒なことになったら高い肉に変更な」それと、服が乾くまでちよいと待て。あと十分くらいで乾燥が終わるから」

ゆつくり絡みのトラブルってのは、大抵面倒なことになるケースが多い。さっきも言ったが捕食種を飼うとなると、最悪裁判沙汰も覚悟しなきゃならない。

ま……裁判沙汰じゃなきゃなんともなるだろ。

煙草を取り出して口にくわえ、いつもの調子で火を点ける。

かくて……罰ゲームその2を終わらせるために、俺は後輩の家に向かうことにした。

ゆいさんが所有する一軒家よりも、さらに段違いに高いマンションの高層階に後輩は住んでいる。お家賃も当然馬鹿高い。なんでこ

んなセレブが住むような場所で平気な顔してジャージを着用できるのか、俺には理解できない。

まるで、恐れを知らない戦士のようなものである。アンインストール。

「こういう場所に住んでる奴って、大抵生き血とか吸ってるって本当か？」

「都市伝説ですらないですよねそれ！　っていうか、今思いついただけでしょっ！？」

「だって、普通に働いてたらこんな場所に住むとかありえんし。：

ああ、なるほど。白い粉を栽培して売りさばいてりゃ、そりゃ儲かるか」

「や……小麦粉はあんまり儲かりませんよ？　国に値段管理されますし」

「……チツ、ブルジョワが」

「なんで舌打ちしたんですかつ！？」

突っ込みどころを作ったのに、スルーされた時の悲しみはお前には分かるまい。

まあ、それはそれとして後輩の部屋に到着。指紋認証とカードロックを使用しているあたりがいかにハイテクだ。

玄関を通ると、なんだか柑橘系の香水の匂いがした。

「なあ、なんでわんちゃんはヲタクなのに来客とか意識してるんだ？」

「ヲタクじゃありません！　それに……この香水は兄さんのです」

「ああ、あのぶち抜けて明るいにーちゃんか。ああいう男と一緒にいると退屈しなさそうでいいよな。今度紹介してくれよ」

「嫌です」

それはわんちゃんには珍しく、きっぱりとした拒絶だった。

気持ちは分からないでもない。自分の家族を誰かに紹介するなんて、普通は誰もやらないだろう。俺だって弟を紹介しろと言われたら、断固として断るだろう。

まあ……それはともかく。奥の部屋から響いてくる不協和音に、

俺は口元を引きつらせながら、ゆつくりと溜息を吐いた。

「れみ りゃ う」

「おぜうさまあ！ きょうもつつくしゅうございますうつうつうつうつうつうつう！」

その部屋にいたのはばくさい衣装に身を包んだ、絵に描いたような笑顔を浮かべて間抜けなダンスを踊っている胴体付きのゆつくりと、そのゆつくりを陶醉した目で見つめながらむせび泣く、銀色の髪を持つゆつくりだった。

俺はにつこりと笑って後輩の胸倉を掴み上げ、ゆつくりと玄関まで引きずっていく。

「フイ、わんこちゃんよ。若干話が違うんじゃないのかよ？ んん？」

「や……なんというか、あれが悩みの種というやつでして。れみりやに急に体が生えてきちゃったもんで、にんともかんとどうしたもののやらさっぱりで……」

「はいはい。とりあえず、耳かっぱじってよく聞け」

あの胴体付きのれみりやの姿は、環境適応の一つだ。

ゆつくりは、危険を感じると巣の中に逃げ込んでしまう。巣の中に追い込んだ時点で狩りは終了したようなもんなのだが、巣に入ろうとした瞬間に袋叩きにあったり、羽がつかえて巣に入れないといったことがわりとよくあったりする。

あの間抜けな姿は『ゆつくりを巣から引きずり出す』ために進化したものなのだ。

体がついたために飛行能力と運動能力は落ちるが、手がついたのでゆつくりを巣から容易に引きずり出せる。つまり、飛び回ってゆつくりを見つけないでも、ゆつくりの巣を見つければ狩りを成功させることができるようになったわけだ。

また、ゆつくりの生殖器は人間で言う下あごの部分についており、

妊娠時はその部分が膨らんでしまうので行動の妨げになってしまうが、体付きの場合は妊娠時も自由に行動でき、胎児に負担をかける心配もないというメリットがある。

「……あの、いくらなんでも詳しくすぎませんか？」

「詳しいか詳しくないかはどーでもいい。問題なのは、れみりやの隣にいる『ゆつくりさくや』でな、あいつがいると色々めんどくせーんだよ」

「な、なんかまずかったですか？ あの子は、兄さんがなんかいつの間にか拾ってきちゃったゆつくりなんですけど……」

ゆつくりさくや。分類は希少種。とても珍しいゆつくり。

捕食種ではないが、希少なゆつくりだ。なぜ珍しいかというところ、このゆつくりはどうやって繁殖するか未だに解明されていないゆつくりだからだ。

分かっていることは、れみりやと共生関係にあることくらいだ。

ゆつくりの中では特に脆弱ということもなく、石やら罌やらを使った狩猟方法を実行することから、知能はそこそこ高いとされている。そのため、わがままで御しやすいかつ捕食種であるれみりやの世話をすることにより自身の安全を確保しているという説が有力ではあるが、個体数がそもそも少ないので一概には言えない。

ただ、わがままをある程度自重できるれみりやじゃないと、さくやに依存し寄生状態になった挙句に、双方自滅、あるいはさくやの方が耐えられなくなり『ナイスボート』状態になってしまうケースもあるらしい。

ああ……そういえば、サンの両親を殺した大きなゆつくりもそんな感じだったか。

「まあ、長々と説明しちゃったが……さくやがいると、れみりやのことを全肯定しちゃうもんだから、増長して手がつけれなくなる人が多いんだよ」

「ああ……どうりで最近全然言うこと聞かなくなってきたと思ったら。私、てつきり反抗期になったものかと思ってましたよ」

「……………」

のんびりとした言葉に、俺は思わず溜息を吐く。

さてさて……どうやら随分と甘やかして育てたようだ。ゆっくり
に便利屋、あるいは奴隷扱いされてるのも、本人は恐らく気づい
ちやいないだろう。

……なんかもう、めんどくせーし、放置しちゃおうかな。

「うーうー」 ぶっでいんくれないとたべちやうぞー」 があー

」 があー」

「それはいけません！ そこなにんげん！ はやくおぜうさまのた
めにぶっでいんをよういするのですわ！」

「……………」

俺の右手がドリルだったら、こいつらを確実に打ち抜いていた
らう。

俺の左手がチェーンソーだったら、こいつらを切り裂いていた
らう。

後輩のペットじゃなかったら、今すぐこの場で叩き潰していた
らう。

マンションに管理人がいなかったら、屋上から落としていたに違
いない。

人間、束縛されていきるのは大切なことなのである。

それはゆっくりも同じだろう。こいつらが傲慢に振舞うのは勝手
だが、自然界にも人間が生きる世界にもルールってもんがある。前
述した裁判沙汰にまで発展したケースのように、駄目なものは駄目
だときつく躡けておかなければ、双方困ることになるのだ。

ゆっくりと……大きく溜息を吐きながら、俺はれみりやに近づい
ていく。

「ぐずなにんげんはかりすま れみりやにぶっでいーんよこすどお

」

「……カリスマ？」

「そつだどおー」 れみりやはかりすま おぜうさまなんだどおー

」

「ほうほう。で、どの辺がカリスマなのかな？　ぐずな人間のお姉さんに、詳しく教えてくれないかな？」

「しかたないんだとお　わかりやすくじじいにもおしえてやるんだとお　」

ジー●ブリーカー！　死ねえ！

とかやりそうになったのを、極限の精神力で堪える。

なんでじじいって言ったの？　俺はちゃんとお姉さんって言ったのになんでじじいって言っちゃったのかな、このれみりやは！　あれか、俺の目付きが悪過ぎるとかそういうのが原因なのか？　もつと髪を伸ばせば女の子になれたりしますかねっ！？

俺の内心の葛藤をよそに、れみりやは胸を張って言った。

「しかたないんだとお　　ぐずなにんげんにおぜうさまのかりすま　だんすをみせてれみりやがかりすま　なことをみせつけてやるんだとお　」

「さすがはおぜうさまですわあああああああああああ！　」
なにがどう『さすが』なのか、ぼくにはさっぱり分かりませんでした。

まあ……　犬が馬のう●こ食っちゃう気持ちも、猫が鼠を狩ってきて得意げに見せてくれたりする気持ちも分からないのだから、ゆっくりの気持ちなど分かりようはずもなく。

そんなわけで人間の押し付けではあるが……　エゴではあるが、仕方ない。

後輩のために、このれみりや様にも、押し付けてやることにした。

途中でゆいさんに連絡を入れ、少々遅くなることを伝えた。

「……で？」

「……うっ」

もう　すら出てこないほどに、れみりやは疲労困憊だった。

あれから三時間。俺が養豚場の豚を見る目をする度に、れみりやはカリスマであることを認めさせようと躍起になり、さくやの静止も聞かずに延々と……俺がれみりやを見つめている五時間の間、延々と踊り続けていた。

これだけやっているのだから、もういいだろう。

そんな弱音が心の奥底から響いてくるが、俺はそれを黙殺する。

動物と一緒に暮らすつてのは、並大抵じゃない。

それは当たり前だ。ルールの違う種族が一緒に住むんだから、色々な障害が出てきて当然だ。よく世間で『犬が懐かない』と嘆く父親がいるが、俺に言わせりやそれはゆっくりほど面倒な話じゃない。懐かないなら懐くように仕向けてやればいい。

頭を引っ叩いて、力の差を分かせてやればいい。

後は、散歩に出かけた時に強い口調で命令する。犬は義理堅い生き物なので、たったそれだけのことで群れの中での順位は自分より上なんだと認めてくれる。

言葉が通じないなら、後は暴力や知識に訴えるしかない。

相手のルールに合わせて、自分の方が上だと認めさせてやればいい。

でないと……飼う側と飼われる側。両方が迷惑することになる。

「うつ……うつ……うあ……うあ……」

目はうつろでフラフラではあったが、れみりやは踊り続けていた。さて……そろそろ頃合か。

立ち上がり、あらかじめ買っておいたプリンをれみりやの手に渡す。

「ほら、プリンだ」

「……うあ？」

五時間踊り続けて意識も朦朧としていただろう。れみりやは望みのものが手に入ったことが信じられないように、俺のことは見つめ

ていた。

「これだけよく頑張ったよ。認めてやる。お前はカリスマだ」

「……ほんと、だど？」

「ああ、本当だ。『頑張った』から、お前は今プリンを手に行っているんだよ」

頑張ったの部分を特に強調してやる。

ここが最後の詰めだ。上手くいくかどうかは五分五分だが、これみりやは頭は悪くないようなので、きつと理解してくれるだろう。理解できなきゃ……その時は別の方法を考えておこう。

それでも駄目なら、最終手段しかないだろう。残酷な言い方だが、飼い主のことを認識できず、本気で噛み付いてくるようなペットは……『必要ない』とされている。

「ハ……考えただけで吐きそうだ。冗談でもそりゃねえわな」

「う？」

「それじゃあ、俺は帰る。せいぜい長生きしろよ、おぜうさま」
ゆっくりの寿命は環境に依存する。自然界なら二、三年で長生きした方だ。

この家なら五年以上は生きられるだろうが、いつなにかあるか分からない。

些細なことで、ゆっくりは簡単に死んでしまうのだ。

「終わりましたか？」

台所でカレーを作っていたらしい後輩が顔を出す。ジャージの上に白いエプロンといういでたちだったが、わりと可愛かった。

「ああ。ま、しばらくは経過観察ってところだ。多分上手くいってると思う」

「ありがとうございます。……ホント、お手数かけちゃってすみません」

後輩には、今回の躰がどんなものかあらかじめ説明してある。要求をすればプリンはもらえる。昨日まではそうだった。

今日も要求すればプリンはもらえた。しかし……昨日と違って、

いかにカリスマかを見せ付けねばならなかった。

カリスマであることを見せ付けるためには、延々と踊り続けなくてはならない。

さくやなら無条件でカリスマだと認めてくれるが、人間は認めてくれない。

後輩も『じゃあ、どうカリスマなんですか?』と言い放てば同じ手が使える。

プリンを食べたければ、踊り続けなくてはならない。人間にカリスマだと認めさせるためには、踊り続けなくてはならない。

踊りたくなければプリンを諦めればいい。プリンなどなくても、この家には愉快なにーちゃんと、世話をしてくれる後輩と、れみりやを全肯定してくれるさくやがいるんだから何一つ不足していることなどない。

それでも無理を通したいのなら、己の譲れない部分を譲るしかない。

簡単なことだ……人間をぐず呼ばわりせず、『ぷりんください』と言えればいい。

よこせではなく、きちんと相手の目を見て『ください』と、頭を下げられるようになれば、お互いに気分を害さずに生活することくらいはできるはずだ。

俺がそう言っていると、後輩はなんだか楽しそうに笑った。

「先輩って、意外とゆっくり専門の調教師とか獣医が向いてるかもしれないよ?」

「ぜってー嫌だ。あいつらと一生付き合うくらいなら、お前を殺す」

「私全然関係ありませんよねっ!？」

「どーでもいいけど、最近のガン・ムって曲線が多いっていうか、デザインが洗練され過ぎてて現実味が薄いよな。過去のデザインの流用はいいけど、それで視聴者の反感を買ってたんじゃないもんじゃないーと思うんだ。あと、なんか敵味方ともにキラキラしてる感じのキャラが多いけど、赤鼻とか、黒い三連星とか、ああいうオ

ツサンキャラこそが本当の意味で格好いいキャラだったのを今の人たちはさっぱり分かってないんだと思う」

「本っ当にどーでもいい話ですね！」

モビルスーツ談義はお気に召さなかったのか、後輩は普通に怒っていた。

まあ……なんだ。それくらいテンションが高い方が、この後輩には似合っている。

「じゃ、俺帰るわ。焼肉は後日取立てに行くから」

「送りましょうか？」

「んにゃ……今日は歩いて帰るよ。それじゃあな」

「あ……せんぱ」

わんちゃん言葉を最後まで聞くことなく、俺はさっさと家を出た。

季節は春の半ば。夏はまだ遠く、気温は暖かいくらい。夜道は少しばかり危険だが、この辺は人通りも多いので……まあ大したことはなからう。

帰る前に、家に電話を入れておく。

『誰だ？』

「ああ、その声はサンか。俺だ」

『俺じゃ分からない。最近はおラオラ詐欺に注意しろと家主からの注意があった』

「ゆいさんの言葉は一切信じるな。オラオラ詐欺じゃ次の瞬間にはミンチになってる。そして時は動き出すぞ？」

『ああ、その声はなべっちじゃないか。ずいぶん遅かったな？』

「面倒なことに関わってたせいで遅くなった。今から帰るけど、なにか欲しいものとかあるか？ ジュースとか欲しいなら買って行くけど」

『無事故でいい』

「ずいぶんと謙虚だな……なんかあったか？」

『いや、この数日で学習したただけだ。あたしは、確かに前世は拳法

の達人だったかもしれないが、今は自分の感情を押さえつける術すら知らないクソガキだ。……まくらが変わると寝られない程度には、子供だったということだ』

「……そっか。分かった、すぐに帰る。ああ、それと……庭が乾いてたら、ゆつくりの連中を外に出しておいてくれ」

『ああ、分かった。それくらいならお安い御用だから、すぐに帰って来い』

そんな言葉を残して、電話は切れた。

うん、やっぱり帰る家があるってのはいいもんだ。

「……………ん？」

ふと、違和感を覚える。

サンの奴……枕なんて使ってたか？ 基本的に、いつも俺と一緒に寝てるけど枕なんて使ってる所は見たことないぞ。

まあ、いいか。大したことじゃないだろう。

「やれやれ……それにしても」

空を見上げながら、俺はぽつりと呟いた。

「……………あのれみりゃには、悪いことしちゃったな」

正直、三時間踊らせ続けるとかやりすぎたかもしれない。

俺が嫌いなのは、甘ったるい匂いを放つれいむやまりさといったゆつくりであって、手足がついている捕食種のれみりゃ様は特になんとも思ってたなかったりする。

「ま、むかつくのは変わらないから五十歩百歩かもしれないけど」

今度会った時にちゃんと『ください』と言えるゆつくりになったら、プリンでも奢ってやるとしよう。

ポケットから煙草を取り出して、火を点けてゆつくりと煙を吸う。さて、これにて仕事は終了。今度こそ我が家に帰ってゆつくりしましょうか。

この時、俺は勘違いしていることに気づかなかった。

これは罰でもなんでもなく、ただの人助けであることに気づかなかった。

家に戻った時、そこにはベロンベロンに酔っ払ったゆいさんとお猪口の一杯で酔っ払ってしまったサンと、酒を飲んで体全体を真っ赤に染め上げたゆっくりが二匹。

大宴会をしていた彼女らは、俺を見るなりにやりと笑って言った。

『ゆっくりしていつてね!』

その言葉を聞くまで、俺はのんびりと帰路を急いでいたのだった。

第六話：いけないことはいけません（後書き）

動物の習性は、人間には理解しづらいものらしい。

けど、その行動にはちゃんと意味があつて、分析していくと行動の意味が分かってくるんだそうだ。

……よく考えなくても、自分の家に水流し込まれりゃ誰だって嫌がるに決まってるわなww

と、いうわけで第六話でした。

次回は本編に出番のなさそうな、早苗さん家のお二人が出演予定。
こつこ期待♪

第七話：きれいどころのおねえさん（前書き）

金髪ねーさん登場回。モンハン3が発売するそうなので、カッとなつてやった。あと、よく見ると一ヶ月ほど更新されていないことに絶望した。

ちなみに作者のメイン武器は大剣。苦手な武器はライトボウガン。片手剣とかハンマーとか双剣が上手に使える人に憧れます。

第七話：きれいどころのおねえさん

ヒャッハー！ 美少女だー！

掃除に洗濯にレポート作成にゆっくりの世話と、大学生ってのはわりと大変だ。

もちろん、世間で汗水流して働くお父さんたちとは比べようもないが、一応就職志望ということで資格取得のために勉強もしておかねばならない。

まあ、子供は子供で大変だし、大人は大人で大変だ。生きていくってことはそういうことなのだろう。

「ゆいさん、そういうわけだから膝から頭をどけてくれ」

「どきません。四話ほど出番がないことに絶望したから、今回はなべっちから離れないと決めた。どうしてもいて欲しかったら、このえっちな下着を着るんだ！」

「初っ端からフルパワーじゃねえか！ ちったあ自重してくれ、頼むから！」

黒いスケスケな下着を奪い取って、適当な方向に投げ捨てる。

四話ってなんだろうとか少しだけ疑問に思わなくもなかったが、ゆいさんは時々訳の分からないことを言うので、気にしても仕方ない。

「とりあえず、サンの情操教育に悪いから減点1な。減点10で罰ゲーム」

「やーん」

頭を拳でぐりぐりされてるのに、なぜかゆいさんは嬉しそうだった。

なんつーか……しばらく構ってなかった大型犬みてえ。

ちなみにサンはここにはいない。ちょっといい自転車を買ってや

つたら翌日には補助輪なしで爆走するようになり、今日は『山まで行ってくる』と言ってでかけて行った。

五歳児とは思えないほどの行動力である。

「とーにーかーくー、今日は私と一緒に遊ぶ日と決めました！遊んでくれなきゃなべっちの手足縛り付けてものすごいことしちゃうんだからね！」

「……はいはい」

何をする気だろうとは……まあ、聞かなくても分かりそうなものだ。

言い出したら聞かないゆいさんの頭を撫でて、ゆっくりと溜息を吐いた。

「じゃ、たまには買い物にでも行くか」

「だが断る！家にこもってゲーム三昧がいいな！」

「……………」

はっちゃけてるな！。溜まった鬱憤を晴らすかのようだ。

そのわりにインドア派なのはこういうことかと思わなくもないが。

「まあ、とりあえず遊ぶ前になんか食おうぜ。そろそろ昼時だしさ」

「醤油ラーメン！」

「……あの、ゆいさん？俺の意見も聞かずに醤油ラーメンはねえと思う。それに、俺の記憶が確かなら、ゆいさんって料理が得意って設定じゃなかったっけ？」

「わりと得意だよ！。昨日不二家で買ってきたプリンあったでしょ？」

「……そのプリンがどうしたんだよ？」

「すっかりばらすの忘れてたけど、あれ実は自作のプリンだったのさ！」

「……………」

微妙なドツキリはその場でばらそうや！

不二家で買ってきたにしちゃやたら美味しいと思ってたんだよ！

最近の不二家超クオリティ高けえとか思ってた俺が馬鹿みたいじ

やん！

や、不二家も嫌いではないし、むしろ好きなんだけどねっ！？

「まあ……別にラーメンでもいいか。じゃ、とりあえず出かける準備を……」

ピンポーン。

しようと思うと来客が来るってのは、わりとお約束なんだろうか？

「ったく、どこの勧誘員だよ。ちよつと追っ払ってくる」

「はぎゅっ！？」

ゆいさんの頭をどける前に立ち上がってしまったせいで、ゆいさんの頭をもろに地面に打ち付けることになってしまったが、謝るのはまた後におこう。

俺は仕事や勉強以外の強制力が大嫌いだ。つまり、勧誘員は最高に嫌いだ。

勧誘するなら、せめてゲーム並の話術技能と隙のない論理を展開させて欲しいもんだと強く思っている。

玄関先に立てかけられている金属バットを手に、玄関のドアを開けた。

「……………」

「あの、ゆいの家はこちらで間違いないでしょうか？」

ドアを開けたその先には、まるでキャラクターのような誰かが立っていた。

後輩のわんこもかなりの美女だが、こちらものすごい美女だった。

ウェーブのかかった長い金髪に緑の瞳。顔立ちはもう当然のように整っていて手足は細い。わんこと比べると胸は薄めだが、だがそれがいいという意見もあったり。

水色のワンピースと麦藁帽子が限りなく似合う。

はっはっは……アレらと比べると、まじで俺とか存在価値が芥子粒だNE」

妬ましい、ああ妬ましい妬ましい。

「なべつち、こちらはてんさん。姉さんの知り合いで、見た目は綺麗で可憐な美少女に見えるけど腹の中は真っ黒だからあんまり近寄らないでね？」

「ゆい……その紹介には限りない悪意を感じるんですが」

「だって、てんさんといい姉さんといい、いちいちうるさいんだもん」

「そういう言い方をするから怒られるんでしょうが？ 大体あなたは……」

「あーあー！ 聞こえないーい！ 若さ故の過ちとか認めたくないーい！」

説明しよう、ゆいさんは基本子供なので耳を塞いで相手の言葉を聞かなかったことにすることなど容易に可能にするのだ。

まあ……うん、もうなんにも言わないけどね。

「まったくもう……昔からこうなんだから」

「まあまあ、ゆいさんはこういう人ですから」

「……………」

わんさんはこちらをちらりと見てから、ゆいさんに向き直る。

……あれ？ なんか今、露骨にシカトされた？

「で、わんさん今日は何の用なの？ 私としては口うるさい年上とか、人生的にあんまり要らないからさっさと帰って欲しいな」

「ちよつと緊急でお金が要るので、貸していた五万円を返してください」

「ぐふうっ！？ ちよ……月末に五万円はさすがに重たいよ！」

「借りたお金を返すのは常識です」

「またそんなこと言って！ てんさんのお金の使い道なんて、どーせゲームくらいしかないじゃん！ この前だって七万円もレトロゲ

ームにつき込んでたし！」

「私は節制できてからいいんです」

「ジャージ姿で三日間徹夜でゲームする人は節制できるとは言わないし！ ご飯とか全部彼氏に作ってもらってたじゃん！」

「あの人は別に彼氏でもなんでもありません！ その……なんか色々世話を焼いてくれる人なんで、感謝はしてますけど！」

「色々どころじゃないじゃん！ 下着の洗濯まで任せてたじゃん！ 運動不足で太ったのにダイエットにまで付き合わせて！ あんないい人どこにもいないよっ！？」

「運動不足じゃありません！ 彼の料理が美味しかっただけです！ それは運動不足よりもっとダメだと思う。」

ダメ人間なのにツンデレって……果たして人間としてどうなんだろうか？

可愛い正義という言葉があるが、あれは初対面の時までのような気がするんだ。

「とにかく、今は五万円とかないから！ 来月の給料日後には確実に返せるけど！」

「そんな……今返してもらわないと、予約した各種限定版がオシャカに！」

「通常版買えばいいじゃん」

「……………」

「理解できないって表情はやめて欲しいなっ！」

おお……ゆいさんがツッコミ役に回る日が来ようとは。

しかも、言ってることがわりとまともだ。まるで普通の人のようじゃないか。

口うるさいお姉様のこともあるが、案外年上で苦労しているのかもしれない。

「仕方ないなあ……。なべっち、コンビニで五万円下ろしてくるから、ちよつとこの人とお留守番よろしくね」

「ああ、別にいいけど……って、おイ！？」

そう言つと、ゆいさんは慌てた様子で出て行つた。

俺とてんさんを残して、出て行ってしまった。

「……………」

「……………」

うわぁ……………なんとなく分かつちやいたけど、ものすごく気まずい。なんかよく分からないけど、俺はこの人にいい印象は持たれていないらしい。

視線に敵意というか悪意というか……………嫌悪のようなものが見て取れる。

んー……………この人に嫌われるようなことをした覚えはないんだが。敬愛するゆいさんのお姉さんにも『ゆいをよろしく頼む』のようなことは言われてるから少なくともそっちの方で悪印象が伝わるとも思えないし。

やれやれ……………理由の分からない悪意つてのは、本当に困つたものだ。

と、俺が困り果てていると、てんさんは不意に口を開いた。

「あの……………あなたは、ゆいとは恋人同士なんでしょうか？」

「いえ、ただの同居人ですが」

「……………同棲ではなく？」

「……………」

おやおや？ あれあれ？ なんだか根本的な勘違いがあるような気がするぞ。

ゆつくりと……………本当にゆつくりと溜息を吐いて、俺は頭を抱えた。

「あの……………すみません。俺は、女なんですが」

「……………え？」

失礼なことに、ものすごく驚いていた。

てんさんはしばらく天井を見つめていたが、やがてゆつくりと溜息を吐いた。

「まあ……………百合なら百合で、私的には許容範囲内ですが」

「百合じゃないから！ ゆいさんとは親友だけど、それ以上でも以

下でもねえよ！」

「えー？」

「なんで残念そうなんだよ！」

ゲーム脳ここに極まれり。いくら美少女だろうが、世話を焼いてくれる男がいろいろ、それを全て無に帰すがとき生き様である。

はつきり言えば、宝の持ち腐れもいいところだ。

「あのさ……てんさんって、仕事はなにやってんだ？」

「今は特になにも。数年前に株式でわりと利益が出たので」

「……………」

妬ましい。ああ、妬ましい妬ましい。

神様ってヤツはどうしてこうべらばうなえこひいきが好きなんだろうか？

原価がただとはいえ、こっちは異世界でヒイヒイしながらおでんを売りさばいて利益をあげているのに、この小娘は株式で左団扇ですか？

美少女で、世話焼きの野郎もいて、おまけに金持ちですと？

嫉妬の業火が俺の体を焼き尽くすのも時間の問題だった。

「それにしても、ついさっきまでは親友の妹をたぶらかしてる間男くらいにしか思ってたのに、女性だと分かるとつついっ萌えてしまいますね」

「頼むから普通の会話で『つついっ萌える』とか言うな。ドン引くわ」

「全ての概念は『萌え』で説明可能です。これほど便利な言葉は日本語には他に存在しないと言っても過言ではないでしょう」

「俺が言うのもなんだけど……そーゆーことは黙ってた方がもてると思うぞ？」

「男性は基本嫌いです。姉御肌で蓮っ葉な女の子に萌えます」

「笑顔でとんでもないこと言いやがったよ！」

人生の丸投げ感が半端ねえ。もういいから画面の向こうに帰れ！
「初対面の人にこんなこと言うのもアレだけど……頼むから、真面

目に生きる。ゆいさんにツツコミさせるとか、本気でやばい証拠だと思う」

「私は真面目です。あなただって、ゲームくらいはするでしょう？」

「まあ……モン・ンくらいはやるけどさ」

人間という生き物は、狩猟、収集、成長、後継、恋愛、生死などに共感してしまう生き物で、人気のある漫画やゲームはこの要素のうちいくつかを備えている。

特に、男の子や一部の女の子は狩猟と収集に情熱を傾けてしまう。こういう人が任・堂やカプ・ンの魔の手に落ちてしまうから、困り者だ。

モンスターがタイトルに付くゲームは五歳児を廃人にする程度の能力を有している可能性が高いので、本当に要注意だ。

「モ・ハン……ああ、忌むべきタイトル名ですね。実に残念です。私の愛する双剣がリストラされるなど、断じて許されることではありません」

苦々しく呟く彼女は、心底悔しそうに唇を噛み締めていた。

分かりやすく説明すると、続編のゲームで今まで使っていた愛用の武器が使えなくなってしまう、やる気を失くしてしまった感じなのだ。

プレイヤースキルに依存するゲームなので、愛用の武器が使えないというのはわりと致命傷に近いのだが、このゲームをやっている連中は自分の愛用品以外はクソだと思っている人もいるので、自分の武器が使えりゃぶつちやけどうでもいいのである。

さらに分かりやすく言うと『双剣厨ざまあw』といったところだろうか。

「大人しく片手剣でも使ってりゃいいだろうが」

「片手剣って弱いですもん」

プレイヤースキルに依存しまくる武器ほど、信者とそうでない者の温度差が酷い。

このゲームにおける片手剣という武器は、初心者向けでありなが

ら限りなく玄人向けの武器であり、テクニクに使うならいいが極めようと思うともものすごく難しい武器だ。

どの敵のどんな隙に、どの程度の攻撃を叩き込むべきか。それを把握していないといけない上に、道具の扱いにまで熟知していないとはいけない。

まあ……常識的に考えて、そういう武器を弱いとか言っちゃいかんよね。

「片手剣が弱いとか言うお前が双剣厨。強走薬がないとともに戦えないような連中は、大人しくトレニャーさんに500ポイント払ってろよ」

タフでナイスガイなにゃんこさんに現地通貨で500ポイントほど渡すと、もれなく狩猟で有効なアイテムを持ってくる。

これには双剣使いだけでなく全プレイヤーがお世話になるのだが、特に使用頻度の高いハンマー使いや双剣使いを馬鹿にする時に言っていると、必要以上に神経を逆撫でできる。

ちなみに、俺はハンマーや双剣も嫌いではない。単に苦手なだけだ。

「あらあら……これだから片手剣厨は、ちょっと弱いとか言っただけでお顔が真っ赤でみつともない」今日も大人しく広域付けて寄生してればいいじゃないですか？」

「寄生とかないから。ヘビィボウガンありや大抵のモンスターは狩れるだろ」

「ああ、地味武器の方でしたか。これはとんだご無礼を……」

「ほっほう？ やんのか、双剣厨？」

「ええ、受けて立ちましょう。それに……私のメイン武器は双剣じゃありません。アレはあくまで趣味だと言っておきましょう！」

「よーし、やってやろうじゃねーか！ ……とりあえず、ギルドカードよこせ」

「ほえ面かせてやりますよ！ ……あ、そのアイルーいいですね。ください」

勢いとは裏腹に、なんだか和やかなやり取りを含みながら、なし崩しに、廃人とのゲーム大会は幕を開けたのだった。

「で、りゅーさんはここでなにをやってるのかな？」

「さてな……実は俺にもさっぱり分からん」

彼女と彼は、玄関先で苦笑していた。

彼女は家主で、コンビニ帰りで、手にはアイスの入った袋を持っていた。

彼は金髪の彼女の世話を焼くのが好きな誰かで、その彼女に迎えに呼び出されていた。手にはアイスの入った袋を持っていた。

「尻に敷かれてるねエ？」

「はっはっは、実のところは相手にすらされていないな」

「……相変わらず爽やかな野郎だね、りゅーさんは」

「そう言うお前はどうかんだ？」

「似たようなもんだよ。ま……私たちの関係が関係だから、仕方ないけども」

「それでいいのか？」

「それでいいのさ」

彼女の瞳が、少しだけ細まる。

「平等はないし差別はされるし強い人が得するこのクソみたいな世界で、目を細めて細めすぎて目付きが悪くなっちゃった彼女は、それでも無理矢理痛みを堪えて、激痛に泣き叫びながらも生き続けている。……私にはそれで十分。その有様が十全に好ましい」

「相変わらずだな、お前は」

「てんさんやりゅーさん……それから、わんちゃんたちよりはましかと自負してるよ」

「……かもしれんな」

彼は少しだけ口元を緩めて、彼女にアイスの袋を手渡した。

「彼女に、あっちの角の喫茶店で待っていると伝えておいてくれ」

「別に寄って行っても構わないけど？」

「馬鹿言え。いくら俺でも女同士の会合を邪魔するほど無粋じゃない」

「相変わらずだねえ、りゅーさんは」

「こればかりは性分だな。死んでも直らんよ。……じゃ、後は頼む」

軽やかに笑って、彼はあっさりと背中を向ける。

その背中を見送ってから、彼女はゆっくりと溜息を吐いた。

「……健気だなあ」

見ててちょっと涙ぐんでしまう程度には、健気な男だった。

彼の背中を見送って、彼女は八個に増えたアイスをどう始末したもんかと少しだけ悩みながら、家に戻って行った。

その後、ゲーム大会と化した女たちの饗宴は収まることを知らず、男は夜中まで待ちぼうけを食うことになるのだが……それはまた、別の話。

第七話：きれいどころのおねえさん（後書き）

はい、そういうわけで第七話でしたw

次回の更新は……本編の帰還編完結後。

別に飽きたとかではありませんw

東方LAL本編とは別の意図でこの物語は展開しているわけですが、次回はちよいと特殊な話になりそうなので、タイミングが重要なわけです。

予告をしておく、守矢二神とのお話になります。

と、いうわけでちよいと本編に力を注ぐことになると思いますので、よろしく願いしますw

第八話：きみはいつもそればかり（前書き）

さてさて、そろそろ本題に入ろうか。

この物語は東方LALの外伝として描かれている。

ま、外伝と言えは聞こえはいいが、古今東西どんな所でも、外伝と
いうのはおおむね『別の話』だ。

つまり……本編とはあんまり関係ないし、彼女の末路は酷いもの
になると容易く予測はできるだろう。

それでも良ければ、最後の最後まで、ご覧あれ。

これは、都合のいい物語である。

第八話：きみはいつもそればかり

苦しくない。

辛くない。

寂しくない。

妬まない。

だから、なんにもない。

そう思って、痛かった。

さてさて、なんの因果かめぐり合わせか、それとも運命の悪戯か。今回たどり着いたのは立派な神社で、名前を守矢神社という。

なんでも、外の世界から信仰心を求めて幻想郷までやって来たといういわくつきの神社らしく、今は妖怪から信仰を得るために目下布教中だとか。

「どうして神様ってのはゲームが好きなんだ？ 暇なのか？」

「暇ってことはないけどやるからには本気さ。まさか、神様だからって手を抜いたりはしないだろうね？」

「冗談だろ」

盤上の駒を動かしながら、口元をつり上げる。

「神様はなにもしない。あんたらに比べたら閻魔の方が仕事してるよ」

「確かにね……」

俺と同じように口元を緩めながら、女性は慣れた手つきで駒を動かす。

八坂神奈子。守矢神社が奉ずる神様……らしい。

確かに、神様と言われても違和感がない神々しさを感じるし、威

敵はあるし泰然としており、俺がいきなり現れた時も動じることがなかった。

幻想郷であまり見ないタイプの、大人の女性だったかもしれない。「ふうん……居飛車に穴熊か。ずいぶんと堅い戦をするねえ?」

「そつちこそ、美濃囲いに振り飛車とは、乱戦狙いか?」
適当に牽制しながら、互いの手口を探る。

まあ、神様が相手だから負けて元々の対局だ。所詮こちらは一介の凡人。生きてる長さと頭の回転速度で神様に勝とうとは思っちゃいない。

「そういえば、神様がこんなところでぶらついてていいのかよ? みんなが手を合わせて拝むのを見ながらふんぞり返ってなくていいのか?」

「神様には巫女っていう通訳が必要なんだけどね、その巫女は今、宇宙に行つて留守にしてるんだよ」

「……なるほど、暇してるわけだ」

「そーゆーわけだ。さて……必殺の銀打ちだけど、どう読む?」

「同桂。次の手が角成なら、飛車の頭に銀を叩く」

「はっはっは、それは少し甘いかな。どれ、お手本を見せてやろう」
奪われた桂馬を陣地に打たれる。一見意味がないように見えるが……放つて置くとんでもないことになりそうだ。

手を読むために長考に入るが、退屈させてはいけけないので話題を振っておく。

「なあ、神奈子さん。神様って具体的にどんな仕事してんだ?」

「アンタが言つたことそのままさ。神様はなんにもしない。人や妖怪の話を聞いて、『うむ、そのように取り計らおう』とか言うだけだね」

ま、最近はそれじゃあ立ち行かないから、少しは手を出したりするけども。

神奈子さんはそう言いながら苦笑した。

「昔は……もう少し仕事もあったけどね。雨を降らしたり、風を吹

かしたり、外来の敵と戦ったり、利用されたり利用したり。……ま、信仰する人間もいなくなつて、あつちの世界でお役御免になりそうだったから幻想郷に来たわけだ」

「……………」

長考終了。分かったことは一つ。この桂馬に意味はない。

ブラフというやつだ。読み切れなかった部分があるから一概には言えないし、後々のことも全部読み切った上での桂打ちなら、俺に成す術はない。

だが……それだけはないだろうと思う。

飛車の頭に銀を打つ。神奈子さんはやりと笑つて……両手を上げた。

「投了だ。いや、読み切られるとは思わなかった。ウチの巫女はこういうのに弱くてね、よく引つかかってくれたもんだけど」

「読み切ったわけじゃないさ。ただ……八坂神奈子っていう神様が、俺の想像通りの神様なら、肝心な所でこそハツタリをかますつて、思っただけさ」

「ふうん……想像通りつて、どんな感じだい？」

「昔々の御伽噺に出てくる『お約束』つてやつだよ。……神様はなんにもしないが、時折肝心な所で、いじわるをすることはある」

それは、人間を戒めるためだったり、単純に神様が楽しむためだったりもする。

神様は嘘を吐く。……しかし、そこに悪意はないのだ。

ただの程度を弁えたいたずらでしかなく、悪意なんてこれっぽっちもない。

「圧勝はできたけど、それじゃあお遊びとして面白くないから、意図がよく分からない手を適当に指しながらこっちの困惑を見て楽しんでた。……そんな所かな？」

「おや、最初からばれてたのか。こりゃ、腕が落ちたかねエ」

「んにゃ……嘘を吐くのは人間の方が上手いからな、ある程度は仕方ない」

「……なるほど、ね」

にやりと笑った神奈子さんの目が、不意に鋭くなる。

「アンタ……なんで幻想郷に来たの？」

将棋を指している時とは違う、剣呑な目付き。

もしも不審な点があれば、すぐにこちらを排除してやろうという
気配を放ちながら、神様は真っ直ぐに俺を見据える。

うん、実に俺好み。うっかり結婚してくれと言っちゃいそうな
くらい。

肩をすくめて、口元だけ緩める。

「どうやって……じゃなくて、『なんで』ってあたりが神様っぽい
な」

「来た手段はどうでもいいのよ。私としてはアンタが信仰を集める
邪魔さえしなければ、いい。異変は巫女が解決する。……この世界
は、そういう風に成り立っている」

「……………」

最後の砦。幻想の終着点。鬼も魔も神も妖も、なにかもを受け
入れる世界。

なんでもかんでも受け入れるからこそ、それを調節する存在が必
要とのこと。

もつとも……博麗さんを見る限りでは、お前本当にそれでいい
んか？ と世界に問いかけたい気分でいっぱいだったけども。

まあ、それはともかく……だ。

「信仰を集める邪魔なんかしないさ。俺は自分がゆつくりするのに
精一杯なんでね」

「ゆつくりする？」

「ん、その通り。俺は身勝手な人間だからな。自分だけ良けりゃい
いのさ」

それが命の恩人だったり、命の恩人で幼女だったり、脇丸出しの

強欲な巫女だったり、髪が黒かったり白かったりする少女だったり、あっちこっちがぱつつんぱつつんな薬師さんだったり、赤い髪のチャイナさんだったりこっちをめっちゃ睨んでくる鰻屋だったりメイドだったり吸血鬼幼女だったり、目の前の神様だったりする場合は別だけど。

許容範囲広いとかそんなことはない。

俺は基本的に、可愛いものしか助けたくないだけだ。

「おでん屋台引いてるのも自分の都合だし、幻想郷に来てるのもあつちの世界で高く取引される品があるからだ。ま、居心地が良いのは否定しないけど」

「話を聞く限りじゃ……本当に普通だね」

「明日のおまんまと、今日の寢床と、一年後の未来がありや人間は大体幸せになれる。信仰つてのは、日々を豊かにするものであつてそれ以上でも以下でもないのさ」

神様みたいに命がかかつてなきや、命を張ることもない。

何を信じたつて自由。それが人生つてヤツだ。

どんな宗教も……最終的に言いたいことはたった一つしかない。

汝の隣人を愛せ、だ。

「ゆっくりも『ゆっくりしていつてね!』つて言つてるだろ? あいつらは本能的に分かつてるのさ。結局の所、生き物つてのは『他人』がいないとゆっくりできない。誰かがいて、自分を認めてくれるからこそ、明日もやってやろうつて気になるもんさ」

「……………」

「信仰もいいけど、拜んで祈つて願つてるだけじゃなんにもならん時には神頼みも悪くないが、傾倒したりするのはよくない。あくまで神様つてのは『他人』であるべきだ。助けて欲しい時に『よし、分かった』つて無責任に頷いて頭を撫でってくれる存在がいれば人間はわりと幸せになれる」

求めに応じてくれる存在が、心の中にいるだけで違ふもんだ。神様はいない。でも、どこかには必ずいる。

たとえば……今はちょっと弱っていて、静養とかに出かけているのだ。

こんな風に、幻想郷で、のらりくらりとお酒でも飲みながら、ゆつくりしてるのだ。

「そういうわけで、俺には信仰は必要ない。転じて、アンタらの布教活動の邪魔をする必要もないってわけだ」

「……やれやれ」

神奈子さんはゆつくりと……深々と溜息を吐いて、口元を緩めた。

「そこまで言われちゃ、神様の立つ瀬がないってもんだよ」

「ま、夏とか年末とかには当てにしてるよ。三万円くらいの宝くじが当たってくれば、俺としてはわりと嬉しい」

「三千万円くらい当ててあげようか？」

「や、そんな額が当たったら、後の人生おおむね台無しって気がするからいいわ」

「貧乏性だねえ」

「こちとら、普通の人生歩んでるもんでね」

さりげない嘘を吐きながら、けらけらと楽しそうに笑ってやる。

神奈子さんはフレンドリーに笑いながら、俺の肩にポン、と手を置いた。

「いやいや、なかなか見上げた性根じゃないか。そこまで突き抜けて考えられる人間はそういない。ウチの早苗とは違うタイプだけど、ぜひ巫女に欲しい人材だね」

「あつはつは、おだててもなんも出ないぞ？ アンタの所の早苗ちゃんって巫女は別嬪だって人里でも有名なんだから。野郎のファンも多かったみたいだし」

「いやいや、おだてちゃいけないさ。……そろそろ、巫女の代役くらいは補充しないとまずいかなって思ってた頃合だし」

「……………へ？」

いつの間にか、とんでもない力で肩を掴まれていた。

痛くはないけれど、少しでも逃げる素振りを見せれば握り潰され

そうだ。

「い、いや、ちょっと待て！　ない！　ないから！　まず巫女服とか絶対似合わないし、俺の顔を見ただけで子供が泣きながら逃げ出す始末で、年上のおねーさんにはナンパされるは不良からは因縁つけられるわ、とにかく俺が巫女とかありえないし！」

「はっはっは、そりゃ面白い。是が非にでも着飾りたくなってきたね」

「ぎゃあああああああああああああああああああ！」
ズルズルと神様に引きずられる。

どうやら……今回もなし崩しのようだった。

幻想郷の方々は他人をコスプレさせるのが趣味なんだろうか？

とりあえず、そんな疑問を抱きながら姿鏡の前で俺は口を引きつらせていた。

「チェンジで」

「チェンジとかないから。早苗と同じ服だけど、それなりに似合ってると思うけど？」

「……胸周りと腰周りがきつついんすけど。そもそも体格が違っっぱいし」

「はっはっは、安産型でいいじゃないか」

そう言っつて神奈子さんは朗らかに笑ったが、年下と思われる女の子の巫女服を無理矢理着せられてるこっちの身にもなっつて欲しい。

ま、バイト代は出してくれるそうだし、夕飯はおでんにしてくれるとのことなので、損をするわけじゃないんだが……それでもこれはないと思う。

「で、巫女つてなにすりゃいいんだ？　とりあえず境内でも掃除しようか？」

「んー……バイトとはいえ一応巫女だからね。とりあえず、私に対する口調からなんとかして欲しいねえ。奉ずる神様にタメ口はいか

んでしょ？」

「分かりました、神奈子様。それで、私はなにをすればよろしいでしょうか？」

「……………」

敬語を使うと、神奈子さんは目を見開いて、俺をじっと見つめていた。

「やー……………びっくりしたよ。そういう言葉遣いもできるんだね、アタ」

「二十歳なんだから敬語くらいは使えるつつの。尊敬語と謙譲語の違いは分からないが、そのあたりはどうでもいいだろ。気にしてる人間もほとんどいないし」

「……………そりゃそうか。じゃあ、とりあえず境内の掃除と、参拝客に挨拶の方よろしく。私は挨拶回りとかあるからあとは頼んだよ」

そう言つと、神奈子さんは空を飛んでどこかに行ってしまった。

挨拶回りつてどこを回るんだろつとか、俺が泥棒だったらどうするつもりだったのか、とか色々言いたいことはあったが、神様つてのはそういうもんだと割り切っておく。

博麗の巫女だつて、もうちょっと用心深かったもんだが。

「ま……………いいか」

バイトみたいなもんだし、きつぱりと割り切って働きましょう。

巫女は不在ということで境内はそれなりに汚れている。よく考えと宮司とかもないこの神社は一体どうなってるんだと言いたかったが、博麗神社もこんな感じだったから別に不思議はないのだから。

女の子は可愛い綺麗なのがデフォルトラしいし。

博麗さんも可愛かったし、神奈子さんは綺麗だったし、今まで会ってきた面子も大体可愛かったし、きつと早苗さんとやらも可愛いか綺麗かどちらかに違いない。

ホンマ、幻想郷の懐の深さは半端やないでエ。

「おや……………新しい巫女の人ですか？」

そんな風によからぬことを考えていると、不意に上の方から声が響く。

声につられて空を見上げると、そこには黒い羽の生えた女の子がいた。

彼女はシュタツと格好よく降り立つと、ニコニコと笑顔を浮かべる。

「どうも、私は射命丸文と申します。あなたは、守矢神社の新しい巫女ですか？」

「いえ、アルバイトです。この神社の巫女……早苗さんって人が宇宙旅行に行っちゃったもんだから、人手が足りないとのことだ」

「なるほどなるほど……人手不足は深刻ですねえ」

射命丸さんはコクコクと頷きながら、肩に下げた鞆から紙の束を取り出す。

「ところで、巫女さん。新聞なんかに興味は」

「要りません」

あるとかないとかじゃない。必要ない。

ニコニコ笑顔できっぱり告げると、射命丸さんは露骨に頬を引きつらせた。

「や……えっと、ちょっとお試しに読んでみたりとか」

「要りません」

「幻想郷のニュースを迅速にお届け……」

「要りません」

「て、定期購読なんかもやっておりまして……」

「今すぐ博麗神社に行って『霊夢サンちゃんと仕事してくださいよWWW』って言えたら買ってやんよ」

「……………」

俺のあまりの無茶振りにさすがに驚いたのか、射命丸さんは絶句していた。

ゆつくりと腕を組み、真正面から睨み付けるように彼女を見据える。

「参拝でないのでしたら、お引取りください。新聞は要りません」

「……は、はっはっは、新しい巫女はなかなか凶暴な人ですね。早苗さんもここまで露骨な拒絶はしませんでしたよ？ 笑顔で帰れとは言われましたが」

甘いな、射命丸さん。それは新聞勧誘を断るプロフェッショナルのやり口だ。

ああいう手合いは洗剤だのビール券だの色々とせしめた拳句、『引き取らないなら警察を呼びますよ？』と平気な顔で言っちゃう方々なのだ。

もちろん、洗剤のようなおまけがない場合は即座に切って捨てる。笑顔で帰れはその証明と言ってもいいだろう。

「凶暴というより……外の世界の新聞勧誘が鬼畜なんで、『新聞』って聞くとちよつと警戒しちゃうんですよ。契約におまけをつけるのは当然で、勧誘員の方々もひどいになると、強引に居座って契約させようとしたり……」

「……むう、そうはなりたくないものですね」

「そういうわけなんで、帰ってください。これ以上無理に居座ろうとすれば、射命丸さんもその新聞屋さんみたいに、頭を金属の棒で脅しつけることになっちゃいますよ？」

「確実にアンタの方が酷いでしょっ！？」

射命丸さんはそう叫んでいたが、勧誘員に情けは無用なのである。ちなみに金属バットで殴打しようとしたのは、徹夜三日目のゆいさんであって俺じゃないので、その辺は勘違いしてはいけない。

「でも……新聞なんて、そのうち別の情報媒体に取って代わられますし」

「いや、軽く言ってるけど、それ本気でシャレになってないから」

「独りよがりの誇張が混ざってる新聞とか、誰も必要としてないんですよ？」

「うわあああああああん！ なにこの巫女、霊夢より酷い！」
いや、あの巫女よりはましだよ。俺ちゃんと分別とかあるもん。
さすがに涙目になってる可愛い女の子を放置するのは鬼畜のやる
ことなので、ちよつとばかりフォローをしてやることにする。

「仕方ないですねえ……じゃあ、一部ください」

「やー、ありがとうございます。お代はこのくらいになります」

「大根とこんにやくと卵と……あとは牛筋でいいですね。面白か
ったら竹輪とガンモもサービスします。つまんなかったら無意味に
ビンタしますから」

「……あの、さつきから鬼畜すぎない？」

「恨み言なら、外の世界の新聞屋に言ってください」

俺ごとき小娘が鴉天狗に敵うはずないのだが、それはそれとして
需要と供給というパワーバランスの前では、人間も妖怪も平等なの
だった。

買った新聞を眺めてみるが、一面トップは、山が崩落したという
事件だった。

「あなたは知らないと思いますが、西の方の山の一部がなんの前触
れもなく崩落し、村が一つ巻き込まれました。村は壊滅し、生存者
は現在確認されていません」

「……大変ですねえ」

痛ましいニュースに口元を歪めながら、新聞を読み進める。

トップの記事以外は案外普通で、大きなことから小さなことまで
様々な出来事がきつちりとまとめられている。こうやって見ると、
外の新聞と大差ないかもしれない。

もつとも……トップの記事以外のニュースは、わりと平和なもん
だが。

子供が死んでしまうような痛ましいニュースもなく。

何十人何百人が死ぬといった悲しいニュースもない。

トップの記事さえなければ……俺が考え得る限り、最高の内容だ
った。

「うん、なかなか面白かったです。ただ、一つ足りないものをあげるとすれば……四コマ漫画ですかね」

「……新聞に漫画とかいらなと思うんだけど」

「いえいえ、これが案外馬鹿にならない集客効果があるんですよ？ 外の世界じゃほぼ全部の新聞に四コマ漫画が載っているくらいです。その漫画が好評なら、話数がたまってきた頃に本として出版すれば、儲けはさらに加速します」

「む……そ、そうなの？　なんか腑に落ちないけど……まあ、考えてみるわ」

余計なことだったかもしれないが、漫画くらいはいいだろう。

新聞を折りたたんで、神社に置かせてもらっている屋台に向かう。久しぶりにいい気分だったので、ちよいと色をつけたおでんを盛り付ける。

大根、こんにゃく、卵、牛筋、それから竹輪とガンモとはんぺんをおまけにつけた。

「はい、お待ちどうさまでです。熱いから気をつけてください」

「あ……うん。ありがとう。このおでん、美味しいの？」

「さて、どうでしょう？　食べてみてのお楽しみってことで」

「……アンタ、変な巫女だわ」

「そもそも巫女じゃありません。おでん屋です。今こうしている瞬間も、ヤニが吸いたくてたまらないです」

「訂正する。……アンタ、変な女だわ」

「そこは訂正すんなや！」

敬語を貫こうとしたが、無理だった。

そんなわけで、今日はフランクなブン屋と一緒に楽しくおしゃべりをした。

境内の掃除も終わり、ブン屋も帰って、やることもなくなった。参拝客は来ない。いつもこうなのかたまたま来ないのか、それは

分からなかった。

ビールでも飲もうかと思ったが、それはやめておいた。
焼酎でも飲もうかと思ったが、それは自重した。

日本酒でも飲もうかと思ったが、それはいかんだろうと思った。
最近アルコールの度が過ぎてるので、運動して発散することにした。

運動とはいっても、筋トレをするわけじゃない。サンから学んだ
武術の基本をちょっと思い返すだけ。

イメージトレーニングというやつだ。

『心山拳。それが、あたしが体得した武術の名前。心に重きを置く
武術だ』

心に重きを置く。それは、『道』を志すということ。

サンが学んだ心山拳、あるいは柔道や剣道といった武道は主に精神
修養を目的としている。自らの身を鍛え、相手と競い合うことに
より、己の心を磨き上げる。

ただ……武道とはいえ、根底にあるのは相手を打ち破ることだ。
護身などという生易しいものじゃない。そもそも、どの世界でも
共通する最強の護身は『危ない場所には近寄らない』、『すぐに逃
げられるようにしておく』ということに他ならない。

武道は格闘技で、それ以上でも以下でもないのだ。

「まあ……所詮は人間の小細工だし、な」

サンならなんて言うだろう。小細工ではなく、技術と言い張るだ
ろう。

そもそも、サン＝ジョウゲンは武術の達人だ。恐らくあと十年経
たずに、彼女は並の妖怪を素手で圧倒できるようになるだろう。

俺に言わせりゃ、五歳児があんな技術を習得していること自体が
反則に近い。

力があれば、なんとかあったとも思いたいかのように、思考はぐるぐる回る。

いくら武術の達人だろうと、どうしようもないことがある。いくら空を飛べたとしても、どうしようもないことがある。

例え俺が神様だとしても……きっと、どうしようもなかった。

そうやって自分に言い訳を重ねる。本当にどうしようもないと思っ
ているんだったら、さっきのブン屋になにもかも打ち明けてしま
えば良かった。

なんもかんもぶちまけて、俺は関係ないけどと笑ってやればよか
ったのだ。

「……………おい」

「あ、すみません。参拝客の方ですか？」

心とは裏腹に、体は染み付いたように嘘を吐く。にこにこ虚飾
の笑顔を浮かべて、箒を持って立ち上がっていた。

目の前に立っていたのは、奇妙な形の帽子をかぶった美少女だっ
た。

年齢は十歳から十二歳くらい。小さな手足に大きな瞳。少しだけ
大人びて見えるのは、背伸びをしたい年頃だからだろうか。

彼女はゆっくりと溜息を吐いて、俺の目を覗き込んだ。

「君……………どこのどちら様？」

「代理巫女だそうです。神奈子様に無理矢理巫女服を着せられちゃ
ったんで、仕方なくバイトすることにしました。本業はおでん屋で
す」

「で、その神奈子は？」

「挨拶回りで外出中です」

「……………あんやろ。また、天狗か河童の所に酒飲みに行ったな」

少女らしかぬ口調で毒づくと、女の子はゆっくりと溜息を吐いた。

「私、洩矢諏訪子。神奈子とは顔なじみっていうか、腐れ縁ってい
うか……………まあ、色々ある仲ってところかな。よろしくね」

「あ……はい。よろしく願います」

顔なじみ、腐れ縁ってことは、この子も神様か？

それにしても神々しいオーラとか一切感じないが……いや、待て。神様なんて日本じゃゴロゴロしてる。こんな神様がいても、どこもおかしくはない。

気にしたら負けだ。違和感は違和感のままでいい。

「自分を誤魔化すのは大変だね？」

不意に、少女はそんなことを言った。

こちらの心を見透かすように、あるいは知っているかのように、言い放った。

「君、意外と鋭いって言われない？」

「いえ……別に。ただちよっと、諏訪子様の苗字が少し気になっただけです」

「その違和感は正しいよ。口に出さないのも賢明だ」
につこりと笑いながら諏訪子さんは続ける。

「そう。君の想像通りだ。守矢と洩矢は言葉遊び。この神社は『私』を奉ずる神社なんだよ。外の世界風に言々と神奈子は営業兼総務で、早苗は敏腕秘書で、私が取締役ってところかな？」

「……神奈子さんの方が『神様』って感じはするけどな」

「どーも、神社でふんぞり返るのは向いてなくてね。その辺は神奈子に丸投げなのさ」

ケラケラと楽しそうに笑いながら、少女は俺を真っ直ぐに見据える。

そう……見据えていた。

突き刺すように、真っ直ぐに、俺を見つめて、口元を緩めていた。
「神社の名前と私の苗字で関連性に気づくってのは、案外悪くないね。神奈子の見込み通りってわけじゃないけど、君は案外巫女に向いてるかもね？」

「……向いてるわけねーだろ。煙草を吸う巫女が、世界のどこにいるんだよ」

「じゃ、君は自分がなにに向いてると思うのさ？」

「……………」

その問いに答える術を、俺は知らなかった。

なにに向いているかなんて、今まで一度も考えたことがない。

俺の困惑を見て取ったのか……諏訪子さんはにっこりと笑って口を開いた。

「君は、早苗にちょっとだけ似てるね」

「早苗って……この神社の巫女だろ？」

「そ、東風谷早苗。ウチの神社の自慢の巫女。早苗もね、外の世界にいた頃は、君みたいに自分のやりたいことを考えもしなかった。奇跡を起こす風祝で現人神。それが当たり前に当然だった。こつちに来て少しは変わったみたいだけだね」

外の世界の特別は、幻想郷では当たり前のこと。

世界が違うんだから常識が違うのは当然のこと。

常識は、そこに住まう存在が作る。外の世界では巫女は空を飛ぶことはできないが、幻想郷で巫女が空を飛ぶのは……当然のこと。

「諏訪子様。アンタ、結局なにが言いたいんだ？」

「土砂崩れなんてよくあること。それに、あの付近は石炭が出るつてんで強引に開発が進められた場所ですね、河童もまだ新しい技術に不慣れで、色々と不備も多かった」

「……だから、なんだ？」

「だから、よくあることなんだよ。人間の力じゃどうにもならないことだ」

諏訪子様は、そう言って軽やかに微笑んだ。

環境破壊はよくあること。自然災害もよくあること。今回は二つが重なっただけ。

人が死ぬのもよくあること。よくあることで……どうにもならないこと。

なんでも知っているような訳知り顔で、諏訪子様は笑っていた。

どうにもならないから……なんだ？

「いいよな、神様は」

「ん？」

「そうやって適当にふんぞり返って、こっちのことなんざ考えもしねえんだからよ」

完全に八つ当たり。最悪の逆ギレ。そんなことは分かっていた。煙草を取り出して火を点けて、煙を吐き出したが気分は収まらない。

「よくあることだから？ そんな風に割り切れたらとくにそうしてるさ。そんな言い訳で、俺がやってきたことが消えるのか？ 俺が破滅させた人に償いができるのか？ その『よくあること』に巻き込まれて、死んだ人間が納得するってのか？」

「……………」

「生きる意味？ そんなものが見出せるなら、そいつの人生は上等だったってことじゃないか。生きるのに手一杯で他に頭が回らない奴に対する当てつけもいいところだ。アンタらが大事にしてる早苗ちゃんだって、どうせ明日のおまんまに事欠くようなことはなかったんだろ？ 現代っ子だもんなあ……あるわけないよなア？」

僻み、妬み、恨み、嫉む。

嫌なのに感情は止まらない。

死ねばいい自分はどこまでも醜悪だった。

「その他大勢を救うために自分を諦めたこともないし、生きるためになにかを殺したこともないんだろ？ 早苗ちゃんはいいいよなあ、幸せで。……いいよなあ、アンタらみたいな家族に恵まれてさ。アンタらみたいな神様が側にいてさア」

妬ましい。妬ましい。憎らしい。殺したい。死にたい。

誰か……殺してくれ。後生だから殺してくれ。

汚い言葉を吐く私を殺してください。

知らない人を口汚く罵る自分は滑稽で……どこまでも最悪だった。幻想郷に逃げ込めることが、どれだけ幸せなことか気づきもしていないんだろ？ 逃げ道がない人間の気持ちなんて考えもしないんだろ？ だから、外の世界でも自分は特別だっと思いついて生きてきたんだろ？ ああ……汚くて醜くて見るも無残な生活を営んでる連中なんて、見て見ぬふりが一番いいもんなあ！」

自分が一番見て見ぬふりを貫いた。

そのくせ、自分だけは助けると馬鹿なことを言う。

見捨てられて当然だろう。そんな都合のいいことなどどこにもありはしない。

なのに……言葉は止まらない。

「神様だって本当は家族で手一杯なんだろ？ 本当は他人を助ける余裕なんてこれっぽっちもないんだろ？ 神様なんてどうせ見るだけだもんなあ。俺が何百回願っても、何千回祈っても、助けて欲しいってずっと思ってたのに、ずっとずっと……何年もそう思い続けてきたのに、一回も助けてくれなかったもんなあ！」

見たこともない、諏訪子様や神奈子さんの大切な人に、嫉妬していた。

彼女の苦悩も知らずに嫉妬していた。妬ましかった。

それが醜いことだと分かっていたのに、止まらなかった。

なぜなら……助けて欲しかったから。

ずっとずっと助けて欲しかったのに、誰も助けちゃくれなかったから。

助かりたかったのに、助けてくれる人は誰もいなかった。

早苗さんは、助けるくせに。

「分かってるさ……分かってるよ！ 俺みたいな醜悪な人間には仏様も蜘蛛の糸を垂らしちゃくれないさ。早苗さんみたいに可愛くて

気立てが良くて、人気があつてみんなを幸せにできる子が助かるのが当然なのは分かつてるさ！ 分かつてる……そんなこと、とつくの昔に、全部、全部分かつてるんだよ！ 俺みたいな人間はさつさと死んだ方がいいってことくらい、とつくのとうに分かつて……」

「自分を貶めるのは、その辺にしておきなよ？」

醜悪な言葉は、神様の一言で簡単に止まった。

早苗さんを貶す言葉に反応しなかった諏訪子様は、あっさりと俺の言葉を止めた。

真っ直ぐに、俺を見つめて……不意に手を伸ばした。

「そりゃ、私たちにも意志があるからね。早苗を特別扱いしちゃうのは仕方ない。耳が痛い話だけど、神様ってのは基本的にわがままだからねえ」

「……知ってるよ、そんなこと」

「知ってます。分かつてます。君はそればかりだ。……そんな小理屈で、自分の心が納得できるわけないのも分かつてるんだろぅに？」

殺して欲しいと思っていた。諏訪子様にとって大切な人を貶した報いが欲しかった。

でも、いつも通りに、当然のように、俺の願いが届くことはなく。諏訪子様の手は、俺の頭を撫でていた。

「我慢しなくても大丈夫だから」

「……………」

「ね？」

優しい言葉に、目頭が熱くなる。

頭がぐちゃぐちゃになって考えがまとまらなかったけど、分かったことがあった。

だから……ほんの少しだけ、本音を漏らした。

「見捨てたく……なかったです」

「……………そっか」

諏訪子様は、ほんの少しだけ頷いただけだった。
神様らしくなにも言わず、なにもせず、頷いてくれただけだった。
ただ、神様らしく、頭を撫でてくれただけだった。

少しだけ誰かに優しくなろう。

少しだけゆいさんに厳しくなろう。

なんの根拠もなく、そんなことを決めた。

できるはずもないのに、そんな風に、決めていた。

「ただいま」

「お帰り」

「……なにやってんの？」

「こまったちゃんに膝を貸してあげてるのさ。眠そうだったからね」
「眠そう？」

「化粧で巧妙に隠してたけど、隈はくつきり浮かんでるし、集中力は散漫だし、欠伸はしょっちゅう我慢してるし。……多分、あんまり眠れてなかったんじゃないかな？」

「んー……ごめん、気づかなかったわ」

「仕方ないよ。早苗くらい素直な子ならまだいいんだけど、人間の中には嘘に嘘を重ねて自分をがんじがらめにしないと、生きていけない子もいるから」

「……………」

「困ったもんだよ。……この子は、特に重症だ」

眠ってしまった誰かの髪を指で梳きながら、諏訪子は苦笑いを浮かべる。

「ねえ、神奈子？」

「ん？」

「神様ってさ、なんなんだろうね？」

「……さて、ね。その子は『普段なんにもしないくせに時々悪意のないじわるをする奴』って、言ってたけどね。私としては耳の痛い話さ」

「あはは……ホント、困った子だ」

諏訪子は苦笑いを浮かべて、神奈子もつられるように口元を緩めていた。

そこまで言われちゃ、神様の立つ瀬がない。

そう言いたげに、苦々しく、楽しく、笑っていた。

おでん屋は克己心を取り戻した！

前書きの情報が一部更新された！

Chapter 1が終了した！

当方、おでん屋台あり。

Chapter 1 『Evil of silence』The End

以下がりザルトになります。

信仰心が+3されました。

アライメントが+10されました。

白いざくろ石のカケラを手に入れました。

もりやのおまもりを手に入れました。

属性『克己心』を取り戻しました。

以下のコミュニティを獲得しました。

おでん屋が、各人へ向けている感情は以下の通りです。

ゆいさん（本名不明）：好意。

燦装玄：親愛。

わんちゃん（本名不明）：友情。

てんさん（本名不明）：苦手。

れいむ：同情。

まりさ：憐憫。

紅美鈴：知り合い。

ルーミア：天敵。

小悪魔：貸し1。

レミリア＝スカーレット：貸し1。

フランドール＝スカーレット：綺麗なモノには毒がある。

蓬莱山輝夜：髪が綺麗。

八意永琳：可愛い人。借り1。

藤原妹子：髪が綺麗な案内屋。

博麗霊夢：奇縁。

霧雨魔理沙：魔女。見る目はない。

射命丸文：楽しいブン屋。

八坂神奈子：敬愛。

洩矢諏訪子：尊敬。

また、以下のコミュニティが消滅しました。

ミステリア＝ローレライ：商売敵↓店主死亡により消滅。

Next Chapter 2『Ogre』

Chapter 2で開放されるキー項目は以下の通りです。

黒い瑪瑙のカケラ（香霖堂）の取得。

割れた十字水晶（炭鉱町）の取得。

砕けた青い瑠璃石（風見幽花）の取得。

れいむ及びまりさからの人物評価『信用』以上の獲得。

コミュニティ『■■■■』及び人物評価『信用』以上の獲得。

上記の条件を満たした上で、魂魄妖夢と戦い勝利せよ。

また、上記の戦いで属性『■■』を取り戻すこと。

t o b e c o n t i n u e d . . .

第八話：きみはいつもそればかり（後書き）

まあ、嘘なんだけどね♪

本編にはある程度関係はあるし、彼女の末路がどうなるかなんて現状ではほぼ考えていない。

この物語は、そんな感じで進んでいく。

そういうもんだと思って欲しい。

と、いうわけでチャプター1が終了。

作家的な目的は一つしかなく、それを果たしたら後はまあ蛇足みたいなもんだ。

嘘ばかりの物語。

さてさて、それじゃあチャプター2の開始です♪

第九話：ペットショップに行ってみよう（前書き）

ペットを飼うって行為はわりと残酷だ。

残酷な理由はあるて言うまでもないけど、責任を放棄する人間がいかに浅ましく醜いかはネットで飼い主募集とかそんな感じの言葉で検索すれば一発で分かるだろうし……正直、重過ぎる。

それでも、人はペットを飼う。

自分以外の誰かを求める。

いや、正直なところウチの飼い猫の可愛さはまじ半端ねえから否定とかできるわけもないんだけどねw

第九話：ペットショップに行ってみよう

「ご飯が美味しい季節です。」

始まりは、他愛のないことから始まるものらしい。

我が家で絶賛生殺し中のゆつくり。れいむとまりさの二匹は仲がいい。

ただ、そこに俺が介入すると若干話は違ってくるようで、人間をやたら見下し毛嫌いするまりさと、少しでもゆつくりするために人間の介入を許そうという姿勢のれいむは、意見が衝突することもある。

この前の小屋掃除の後なんて、大声の喧嘩が絶えず、普段は温厚でゆつくりが大好きな隣人にフルパワーで怒られてしまったほどだ。そんなわけで、二匹の喧嘩を増長するような行動は慎むことにした。

特に、れいむをいじる時はまりさが眠っている時にしなければならぬ。

まあ……れいむに触る時は大抵ブラッシングする時なのだが。ゆつくりのブラッシングには多少コツがある（飾りに触れない、毛先が柔らかいブラシを使う等等）ので、こればかりは自分の手でやらねばならない。

まりさは帽子が邪魔だし、非常に嫌がるのでやらないが、れいむは触らせてくれる程度には心を許してくれているので、気が向いた時にブラッシングしているわけだ。

「おねーさん！ れいむはおねがいがあるよ！」

「ん？」

れいむは、ブラッシングもそこそこに俺に向き直ってきた。

「れいむとまりさはくささんだけじゃなくてむしさんやきのこさん

をむーしゃむーしゃしたいよ！ おなじものばかりたべるとえい
ようがかたよっちゃうよ！」

「……………んー」

むう……………とうとう来たか。いつかは言われると思ったが。

ゆっくりはわりと食べ物にこだわる生き物で、栄養バランスが最
高のゆっくり専用のペットフードであつても毎日同じ味のを食
べさせていると苦情を訴える。ましてや、味も素っ気もない草を毎
日食わせてれば、飽きるのも当然だった。

甘やかすのはよくないが、単一の食品ばかり食わせるのも、正直
気が引ける。

「……………まあ、虫なら別にいいか」

「ゆゆっ！ ほんとうっ！？」

「後で庭に虫を放すからさ、自分たちで捕って食べてくれよ。……
俺の手から直接やつたりすると、まりさが嫌がつたり調子に乗つた
りするだろ？」

「ゆう……………」

それを言われると弱いのか、れいむは困つたような表情を浮かべ
ていた。

忘れっぽく、わがままで、調子に乗りやすいゆっくりだが、わり
と肝心なことは覚えていたりする。……………まりさが人間を嫌う理由も
きつとまりさにとつては大切なことなんだろうと思う。

それに頓着する気は無いが……………気に留めておくくらいはいいだろ
う。

れいむのブラッシングを終え、ゆっくりと立ち上がって背伸びを
する。

さて……………ゆいさんが徹夜モードだから今日はわりと暇だし、レポ
ートも書き終わつたし、散歩がてられいむに頼まれた虫を買つてき
てやろうか。

茶の間の机の上に置いてあつた財布を手にとると、退屈そうにテ
レビを見ていたサンが少しだけ目を輝かせて振り向いた。

「出かけるのか？ なべつち」

「ん、ちよつくらペットシヨップにな。ゆつくりどもが虫をご所望だそうだ」

「……ああ、そういえば虫とかきのこを食べるってネットに書いてあったな」

この末恐ろしい五歳児は、既にインターネットを使いこなしているらしい。

本当に元教師だったのか？ ってくらいの順応速度だ。

子供の成長速度が速いだけかもしれないけど。

「で、どんな虫を食べるんだ？ アリとかハエとかか？」

「まあ、アリやハエも食うには食うけど……基本的にはバッタとか体毛のない芋虫とか、蝶とかかな。甲虫とか毛虫は苦手らしい」

「……バッタってペットシヨップで売ってるのか？」

「コウロギとかはフツーに売ってるなあ」

トカゲとかの餌で普通に売ってるし、ゆつくりの餌としても最近は大人気だ。

うっかり、運搬中の車内で逃げ出してファイナルバッタが一匹二匹三匹ファイナル分身みたいなおぞましい事件もあるみたいだし。需要が少ないとは言えないだろう。

「あ、せっかくだし一緒に来るか？」

「ん……いや、あたしはいい。今日はネットゲでGU-YANと約束が……」

「その人、レベルいくつ？」

「GU-YANのレベルは580だな。ちなみにゲーム上でのレベルは60が平均だ」

「……しばらく、ネットゲは禁止な」

「な、なぜだっ！？」

なぜだもクソもない。五歳児でネット廃人はさすがにまずすぎる。あと、GU-YANさんのレベルが普通にキモいんで、フレンドからは外すし、ギルドからも脱退させるし、ぶっちゃけゲームもア

ンインストールします。

ネトゲを廃人クラスでやり込んでいる人には大変申し訳ないんだが、580レベルに到達するまでにかかる時間を考えれば、他の遊びを教えたほうが子供の成長に期待できると思うんだ。

「その代わり、前から欲しがってた携帯ゲーム機を買ってやるからさ」

「ほう？　なるほど……そういうことなら妥協しよう」

「……………」

目の輝きがさつきと全然違いますよ、ジョウゲンさん。

っていうか……もう完璧に現代っ子じゃねーか。

まあ、いいか。サンには昔のゲームならではの怖さを知ってもらおう。

レベルが減ったり、首をはねられたり、畏解除失敗で全滅したり、ちよつと下の階層に行ったら全滅したり、おおっと、テレポーターで石の中にいたり、自分で作ったキャラが消えて失せる怖さを思い知るといい。

似たようなシステムのゲームでも、歩いてるだけでなんの前触れもなく全滅したり（重大なバグ）、氷で滑って壁の中にめりこんだりする（攻略本だと畏扱い）しな！

……仕様が狂ってたのか、テストの費用がなかったのか、テストーの心がイツちゃってたのか……あるいはその全部か、それは分からないがちゃんとして欲しいと思う。

「んじゃ、行くか」

「ん、そうしよう」

当たり前のように手を繋いで、サンのペースに合わせてゆっくり歩き出す。

姉妹のように見えたらいいなあとか……親子に見えたら嫌だなあとか。

そんなことを思いながらも、少しだけ頬は緩んでいた。

『アツチの具合は最高だけどナ！ H A H A H A H A！』

「はっはっは、褒められてるぞ。よかつたな、たつくん。」

「インコと最悪の会話してんじゃねえよ！」

プライドを傷つけられたせいか、たつくんはものすごく嫌そうな表情を浮かべた。

まったく、この程度の嫌がらせで音を上げるとは、将来が不安なお子様だ。

「まあ、たつくんのアツチの具合はともかく、今日はおちよくりに来たんじゃなくて普通に客として来てるから、なんかおすすり商品とかあつたら教えてくれよ」

「……そもそも、おちよくりに来ないでくださいよ」

「遠慮すんなつて。アレだろ、我々の業界じゃご褒美なんだろ？」

「違います。大体、罵られたり馬鹿にされたりして喜ぶ人間がどこにいるんですか？」

「……………」

いや、あえて言わんけど君が考えてるよりはずっと多いですよ？ マラソンや登山。普通の人ならまず間違いなく敬遠するだろうことに挑戦する方々はおおむねマゾと言っても差し支えないだろう。

苦しいけどやり遂げた時に達成感があるとか……その発想がマゾヒストですからね？

まあ、山登りは実はそれほど嫌いではないけどさ。それでも、何日もかけて山を登ろうとは思わないし、草も生えにくい地帯に行くとも思わないわけで。

「ま、それはともかくゆつくり用の餌でおすすりとかない？」

「えっと……じゃあ、こちらの缶詰タイプの餌なんてどうでしょうか？ 甘さ控えめかつヘルシーで、栄養のバランスも優れた一品になっておりますが」

「高い。もつと安いのねーの？」

「じゃあ、こつちの乾物タイプのものはどうでしょうか？ 家で飼ってるゆつくりや、怒りっぱいゆつくりのストレス解消にもちよう

「どいんですし」

「普通に高いな。……スーパーで切干大根買って戻した方が良くないか？」

「値段の苦情はメーカー側をお願いします。あとは、庭に放すタイプの生餌とかですね。これだったらゆっくりが狩猟感覚で食べれますし、芋虫とかバッタとか、それなりの種類が販売されてますしね。……女性にはかなり敬遠されますが」

「ん、じゃあそれ」

「……敬遠されてるって言ったのに迷わず選びましたね？」

「コストパフォーマンスが悪いとか、原価が高いとかそういう理由で買わせたくないのが見え見えだったからな。あえて買わせてもらう」

「……………チツ」

おいおい、客の前で舌打ちしたよ、この小僧。

ホント……無意味にプライドの高いおガキ様はむかつくなあ。

叩いたり殴ったりすると問題になるから、むしろ逆にちゅーでもしてやるうか？

このプライドの高いガキには、さぞかし堪えることだろう。

「なんか、目付きが怖いんですが、不埒なことを考えてませんか？」

「……へっへっへ」

「こええよ！」

と、まあこんな感じで怖がらせるのは楽勝なんだが、その程度では心の折れない子供もいるわけで……躰とかって本当に大変だね」と、いうわけでバッタの清算を済ませ、ゆっくり用のリード（散歩用の紐）やらおやつの営業を断りつつ、せっかくなので店内を見て回ることにした。

狭い店内だがわりと扱っている商品の数は多いので、見ごたえはあるのだった。

「最近は大猫とゆっくりがよく売れますね。鳥やウサギもまあまあです」

「犬猫は分からないでもないんだが、ゆっくりが売れる理由が分からないんだよな。どーせ、一時のペットブームだろ。ブームが過ぎたら捨てられるんじゃないか？」

「かもしれないね。まあ……こっちとしては売ればいいんですがね。飼い主がその後ペットをどうしようがそこまでは知ったことじゃありません」

「……商売人って感じだな。聞いてて反吐が出るぜ」

「軽蔑しますか？」

「んにや、別に。聞いてて反吐は出るが、その程度は普通だろ？」

「……………」

「納得できねえって面だな？ 小学生」

悪人っぽい格好いいことを言っでは見たものの、顔には不満が浮き出していた。

家業でもなければ、こんな腐れ仕事やりたかねえよと言わんばかりだった。

だから……俺はあえてにやりと笑った。

「生きるってのはな、命を食い物にすることなんだよ」

好きなように弄び、好きなように食らい、好きなように潰し、好きなように殺す。

それは……誰でもやっていること。極々普通で当然のこと。

ペットを飼うことも同じようなこと。……同じようで、さらに性悪なこと。

好きなように、支配する。

「売ればいいってのは、売る側としては普通のことだ。商品が売れなきゃおまんまの食い上げだ。このショーケースに陳列されてる連中が売れるからこそお前は十年間生きてこられた。食い物にするってのは、そういうこともあるんだ」

「……………」

「コンビニやデパートなんかまさにそれだろ。金にモノを言わせての大量販売大量消費。やり口が上手いって言えば褒め言葉だが、その便利さに飲み込まれて潰れた商店はどの程度の規模になると思う？　でも、それすらも仕方ないで片のつくことなんだよ。生きるってことは命を食い物にすることで、基本的には金持ってる奴がえらい。……この世界はそういうシステムになっている」

金を持っている奴が、金を持っていない誰かを食い潰してもいい。潰れた奴が悪いで片がついてしまう。

にやりと悪質に笑いながら、俺は言葉を続ける。

「売れりゃいいだけならクレームに対応する必要はない。俺に向けた言葉と同じことを言ってやればいいだけだろ？　そっちの方が簡単で確実だし、面倒がない」

「……そんなこと、言えるわけじゃないですか。店が潰れちゃいますよ」

「じゃあ、店が潰れなかったら言ってもいいのか？」

「……………」

「はっはっは。それ見ろ、見事なカウンターで返した。本当は『売れりゃいい』なんて思ってもいないことを言うからそんなことになるんだよ」

ケラケラと笑いながら、少年の頭を撫でてやる。

まあ……………つまりそういうことだ。

売り物だろうが売った後は心配だし、ゆっくりが捨てられることにも心が痛む。

自分に責任はないにしても、心の痛みに耐えかねて、天邪鬼なことを言ってしまうのもご愛嬌ってなもんだろう。

食らってきた命に対し傲慢でいられるほど、心つてのは強固なものじゃない。

くしゃくしゃと頭を撫でていると、少年は拗ねたような表情を浮かべていた。

「やっぱり……………僕はアンタのことが嫌いだ」

「そーか？ 俺はお前のことはわりと好きだけど」

「……さっきは嫌いつて言つてたじゃないか」

「俺のログにはなにもないな。万が一言つていたとしても、それはツンデレだ」

「あんたのどこにツンデレの要素があるんだよ？」

「べ、別にたつくんのことなんてなんとも思つてないわよ！ ただ、いつか必ず殺してやるって思つてるだけなんだから、勘違いしないでよね！」

「あんたはツンデレでもなんでもない！ いいとこヤクザじゃねーか！」

ツツコミはありがたいのだが、ツンデレを知ってる小学生の将来が心配だった。

うーん……まあ、仕方ないか。ここの店主……たつくんの母親は完璧なヲタクだし。

一時期はプードルにボーカロイドの服とか着せてたくらいだし。

……犬にコスプレをさせるのは、本当にどうかと思うんだ。

「さて、買い物も済んだし、クソガキもおちよくつたし、そろそろ帰るわ」

「頼むからもう来ないでください！」

「いいや……俺はまた来る。ゆっくりがバツタを食い尽くした頃にな！」

「思ったより普通の理由だー！」

といった面白いやり取りをしながら、俺は小学校店員に背を向ける。

ペットショップでの買い物はこれにて終了なので、あとはスーパーに寄つて夕飯の買い物でもしておこうか。

さて……今日の夕飯は。

「ああ、そうだ。ミニブタが可愛かったから、今日の夕飯はトンカツにしよう」

「なべっち……その発想は本当にどうかと思うが」

「お、サン。どこ行ってたんだ？　これから夕飯の……かい、もの」

思考が停止する。

瞳孔が開いて、体が震え始める。

「とりあえず、これはケージの中に戻しておけばいいのか？」

可愛いへびちゃんのコーナー！　絶対に大丈夫だからお手に触れてみてね♪

そんな怪しい見出しの奇天烈なコーナーの一角。

小さくて無害で白くて可愛い蛇と戯れる少女が一人。

「……なべっち？　どうした、なんだか顔色が……」

「やつ……いやあああああああああああああああああああああ
ああ！　こ、来ないでお願いだから！　へび！　へびへびへびへび
へびへびへびへび！」

「……………」

にやりと、サンは悪魔的に笑った。

それは、見る人が見れば背筋が寒くなるような、ドSの笑顔だったという。

「うーん……まあ、来ないでと言われれば考えなくもないんだが、ほら……そこは色々と頼み方つてもものがあるだろう？」

「ひいっ！？　お、お願いだから近づけないで！」

「まあまあ、落ち着くが良い。そして少しか考えよう。……携帯機種はアレとソレの二種類があるだろう？　あと、ソフトはモニターが付くものが望ましいと思うんだ」

「それ汚くねっ！？　こっちの弱みに付け込むとか、汚いにも程があるぞっ！？」

「毎日鍛錬ができない以上、超回復がてらゲームをやるしかないだろう？　あと、子供って無理に体鍛えちゃいけないみたいだから、時間が余るんだよ」

きたないな、さすが老師きたない。

っていうか……真面目に鍛錬してたのかよ。そっちの方にびつくりだよ。

まあ……そりやそうか。ライフワークみたいなもんだし。

「と、いうわけで……ポ・モンとモ・ハンを買ってくれやがりなさい」

「その二つは駄目人間ロード一直線の片道切符になっちゃうから絶対にきやあああああああああああああああああああああああ！

へ、蛇はやだ蛇はだめえ！」

ギリギリと近づいてくるサンに対し、俺はもうパニック寸前だった。

人間というものはどうしようもない恐怖に対すると体が硬直する、もしくは信じられない行動を取るものである。それは思考回路が暴走した末の突発的な行動なのか、あるいは本能的に命を優先した結果突発的な行動に出してしまうのか、そこまでは解明されていないまでも……その時の俺は、藁にもすがりたい気分だった。

「なにやってんですか？ 用が済んだんだったら、さっさと出て行って……」

「うええええええええええええええええええええええん！」

「……………え？」

と、いうわけで……厳密にはその時の記憶はかなり曖昧なのだが、今年で二十歳になる女が、涙目になりながら十歳の少年に抱きつく様は――。

それはそれは……シユールなものであったそうなの。

第九話：ペットショップに行ってみよう（後書き）

はい、そういうわけでツツコミニ号登場回でした。

次回は……多分、やる気のない眼鏡店主の話。

幻想郷でそんな野郎はたった一人しかいないので、誰が登場するかはもうお分かりでしょう。

それでは、次回をお楽しみに♪

第十話：眼鏡と魔女と小悪魔さん（前書き）

と、いうわけで眼鏡と魔女と小悪魔の話。

時系列的には蓬萊編の前くらいに当たりますが……そんなのはどうでもいいことでw

と、いうわけで十話の始まり始まり。

第十話：眼鏡と魔女と小悪魔さん

楽しければ、いいんだぜ？

実は、幻想郷に来てから一ヶ月ほどで資金の当てがなくなった。知り合いの質屋に幻想郷で仕入れた希少な金属や鉱石なんかを換金してもらっていたのだが、毎度毎度そういったものを持ち込むのも限度があつた。

まあ、そりやそうだろう。俺だって毎度得体の知れない金属や鉱石、果ては日本刀を持ち込んで換金してくれと頼む女がいたら、誰だって不審に思う。

とはいえ、金を仕入れなきゃおでんは作れず、おでんがなきゃや商売もできない。ゆいさんが持つてくるのは野菜だけなので、その他の練り物なんかは自分で調達しなきゃならないのだ。

俺にとってのおでん屋というのはあくまで趣味の範疇ではあるが、いきなり趣味をやめるわけにもいかない。色々と考えていたところ……一つの店に辿り着いた。

その店では、外の世界の品を扱っていた。

外の世界の品とはいえ、外の世界では既に廃れているものが多々あるし、鑑定士のような真似ができない俺には価値の有無なんて分かるはずもない。

たった一つ分かるモノがあるとすれば……それは、二千円の価値を秘める……銀行には山ほどあるが流通的には幻想になったアレくらいなものだろう。

幻想郷に流れてきたのは、ジュラルミンケースにして三個分の紙幣。

わりと生々しい額な上にどういう経緯で燃やされもせず処分されもせず幻想郷に辿り着いてしまったかは分からないが……使えるも

のは使っておこう。

仮に闇献金だったとしても、ンなこたあ俺の知ったこつちやないのであった。

「それじゃあ、これが今回換金したお金になるよ」

「ん、ありがとな。ひのふの……あれ、ちよつと足りくないか？」

「手間賃。外の世界じゃ手数料とも言づらいね」

「……………せこ」

「嫌なら別にいいんだよ？ 僕としては君と取引ができなくなっても、一向に問題はないからね」

「……はっはっは、独占禁止法のありがたみがよく分かるなあ」

まあ、手間をかけているのは事実なので、言い値通りの金額で換金してもらった。

せこいと言ったものの利益の方はあがっているので特に問題はなかったりする。

何事も、がつつくだけが商売じゃないのだ。

「しかし……相変わらず、りんちゃんの店は混沌とした佇まいだな」

「りんちゃん言うな。……それでも、掃除はした方だよ」

りんちゃん。森近霖之助。魔法の森近くにある古道具屋「香霖堂」の店主。

人間と妖怪のハーフだそうで、年齢はそれなりに高いらしい。眼鏡をかけたつり目気味の美青年といった感じの風貌をしているが、若干天然が入っている上に色々なことに含蓄があるせいか、話がやたら長い。

そっち系の人には『フラグブレイカー』と言えば彼がどの程度の天然なのか大体察してくれることだろう。

今はヤボ用で人里にある店舗を借りており、換金はもっぱらそちらで行われる。

支店……というわけではなく、物置をちよつと掃除しただけの店だとのこと。

「毎度毎度思うけど、霖之助って生活力が欠如してるよな」

「君には関係ない。それに、ちゃんと生活はできてるんだから問題はないよ」

「……………ふうん？」

ちゃんと生活できている……………ねえ。

まあ、なんとなく分かっちゃいたんだ。そんな感じの兆候はあった。

わりと馴染みになりつつある客に言わないところを見ると、表立って言うのが恥ずかしいかあるいは言うまでもないことだと思っているのか……………それはどっちでもいい。

「なるほど、女だな？」

霖之助は思い切り口元を引きつらせる。若干眼鏡もずり落ちていた。

眼鏡の位置を直しながら、霖之助は溜息を吐いた。

「……………一体どこからそんな発想が出てくるのか聞いてもいいかな？」

「カーテンの色が変わった。それから、さつき暇してた時にこつそりと霖之助の部屋の冷蔵庫を覗いてみたが、煮物だのなんだの、女の子らしい作り置きが目立った。それから洗いものもばっちりだ。根拠としては他にも色々あるが……………聞きたいか？」

「……………ったく、これだから女の子ってのは……………」

今回のこと以外で心当たりがあるのか、霖之助は深く息を吐いた。「で……………仮に、あくまでも仮にはあるけど、この店を出入りしてる女性がいるとしてもそれは君には一切関係のないことだろう？」

「面白そうじゃん」

「……………いや、あの？」

「例えば、だ。人里でのお前はわりと人気がある。性格は腐ってるけど外見はまあまあというかわりと美青年に入からな。そんな男の店に女性がいるとなれば、なにもなくとも新聞の取材は殺到。この

ことをタレ込んだ俺の懐も若干暖かくなる」

「色々言いたいことはあるけど、そもそもブン屋にタレ込むな！」

「なんにもないなら別にいいじゃん。……それとも、なんかあんの？」

「ないけどやめろって言ってるんだ！　そもそも、一部のマスメディア（幻想郷最速）が騒ぎ立てるぶんには真偽なんてわりとどうでもいいんだからな！」

「そんなことは分かっている！　俺はただ……困ってるお前を是非にでも見たいと思ったただけだ！　他の意図は一切ない！」

「ある意味最悪じゃないか！　大体、この店がなくなったら君も困るんだぞっ！？」

「この店はなくならない。……まあ、お前の顔目当ての女性客は減るだろうが、霖之助ってそもそも商売する気とかなさそうだから別にいいよな？」

「あるよ！」

商売する気があるんだったら、ちゃんと接客してくださいと思うのは俺だけか。

しかし……この男、実に面白い。長生きしてるとは言っても、女関係には弱そうだと思っただけだがここまで取り乱すとは。

……困らせたい。ものすごく困らせたい。

「あと……一応言っておくけど、女性客とかあんまり来ないから」
「嘔吐け眼鏡。博麗の巫女とか魔女とか隙間妖怪とか、その他諸々色々な美少女やら美女がこの店を訪れてるって小耳に挟んだぞ？」

「いや、彼女たちは基本客じゃないから。最近来た女性客なんて君と、常連客の紅魔館のメイドくらいなものだし」

「……………」

常連客相手にメイドとか。……せめて、名前で呼んでやれよ。

コイツは、こんな調子でフラグをブチ折っていくのだろう。

まあ、本人としてはここでたらたら店をやっているふりをしていれば満足なのだからにも言うことはないんだが。

こういう馬鹿騒ぎは慣れていないのか、霖之助は疲れたように溜息を吐いて、話題を変えてきた。

「それより、例のものはちゃんと持ってきてくれたかい？」

「白くてみんなが虜になっちゃう例の粉だろ。ちゃんと持ってきてるよ」

「……また紛らわしい言い方を」

霖之助に白い粉……もとい食塩を渡し、いくばくかの金銭を受け取る。

幻想郷には海がない。最初はそれに目をつけて塩を大量に仕入れて大儲けつてのを目論んだものだったが、現実はそのなにごくはない。外から来た人間が科学的に合成する方法を既に普及させていたし、岩塩つてのが採れる場所もあるので、塩にはそれほど不自由はしていないのだ。

ただ、塩や胡椒などの調味料に関しては、歴史を紐解けば分かるように独占やらなにやらをされると争いに発展する可能性があるのので、厳密に取引がされているのが現状だ。

ちなみに、この眼鏡はただの調味料マニアで色々な塩を試したいとのこと。

……自分じゃあんまり料理作らないくせに。

「うん、やっぱり岩塩と君の言う海って場所から抽出した塩は違うね。それに、調味料もバリエーションがある。先日の柚子胡椒は重宝してるよ」

「そりゃ良かった」

おまけとしてジョロキユアの粉末もつけておいたが、いつ試食してくれるだろうか？

……次に会った時が楽しみだ。

「じゃあ、そろそろお暇させてもらうとしようかな」

「僕としては、もう二度と来るなと言いたい所だけどね」

「ああ、『か、勘違いするんじゃない！ お前なんてお金になるから相手してるだけで、べ、別になんとも思っていないんだからな！』」

……か。なるほど、よく分かった」

「わざわざ僕をからかうために曲解解釈するな！」

「じゃー好きな女のタイプとか教えるよ。それで許してやる」

「……いや、別にそういうのなしし」

「おいおいそりやねーだろ眼鏡にーちゃんよ。『そういうのなしし』は種族的な意味でどうよ？ 捏造でもなんでもいいからちゃんと言わないとガチホモかロリ貧乳好みってことでブン屋にタレ込むぞ？」

「うぐっ……じゃあ、えっと……元気な子かな」

「5点。無難すぎて面白くない」

「どうしろっていうんだよ！」

素直に可愛い女とかそんな感じに開き直って答えるのがベストアンサーです。

こっちは『捏造でも何でもいいから』と条件を加えているので、ここでなにを言おうが冗談で済まされるというのに。

そもそも、俺はブン屋の住処なぞ知らないし。

まあ……元気な子ってのはあながち間違いじゃないかもしれないが。

少なくとも、この引きこもり根暗眼鏡にはその程度の女の子がちょうどいい。

「じゃ、今度こそ帰るわ。次はスパイスでも持ってきてやるよ」

「そりやありがとう。……もう二度と来るな！」

「いいや、帰って来るさ。お前をからかうためなら何度でもな！」

そんな下らないやり取りをしながら、俺は店の出口に向かう。

と、その時だった。

「まったくもう……パチュリー様ってば本当に人使いが荒いんだから」

いつかどこかで、見知った顔が扉を開けて店の中に入ってきた。司書みたいになかつちりした服装に、蝙蝠の羽。まるで悪魔みたい

に見えないこともないが……まあ、悪魔なんだろう。幻想郷だし。戦闘能力は俺が見てきた美少女の中でもそれなりに高い。薬師さんとか神奈子様には負けるかもしれないが、少なくとも見積もっても博麗の巫女よりは上だろう。

その司書さんは大小様々な鉄の塊……ガラクタを机に降ろして、一息吐いた。

「ふう……とりあえず、こんなものですかね」
「なにこれ？」

「ロボットの部品ですよ。この鉄を再度加工し直して、パチュリー様が魔法で紋様を刻むことによって、幻想郷の科学程度じゃ及びもつかないほどの高強度と軽量の魔法金属を生み出すって寸法……で？」

少しずつ……彼女の口元が引きつっていく。

そして、恐る恐る口を開いた。

「えっと……あなたは、確か……あの時のおでん屋サン、でしょうか？」

「久しぶりだな、司書さん。その節はどうも」

「ははははははは……いえ、その……どうも」

「で、司書さんよ。……テメエ、最初からツケを踏み倒すつもりでテキトーな住所書きやがったろ？ 支払いはまた会った時でいいとは言ったが……さすがに嘘を吐かれるとは思ってなかったから、おねーさんはちよつと傷ついちゃったゾ？」

「えっと……その、すみません。酔った勢いってヤツでして」

「ふむふむ、じゃあとりあえず……ツケを払ってもらおうか？」

「えっと……実は、今持ち合わせがないので」

「はっはっはっは……」

あまりにも笑えない事態に、俺の忍耐力がマッハで限界に到達した。

口元だけで笑いながら、司書さんの腕をがっちり掴んだ。

「分かった。それじゃあ体で返してもらおう。道行く男性にその胸

部パーツを差し出せばわりとすぐにお金が溜まるんじゃないかと思つたのでそれ急げやれ急げ」

「ちょ……いやいやいやいや！ さすがにそれはちよつと！」

「じゃあ、仕方ないな。……眼鏡にその胸部パーツを差し出すか、道行く殿方に胸部パーツを差し出すか、選択肢は二つに一つだ！」

「なんで僕を巻き込むんだっ！？」

「ほう？ りんちゃんは女性の胸部パーツは嫌いか？」

「その話題から今すぐ離れろ！ 答えは言うまでもなく明白だ！」

「つか、この司書さん霖之助の彼女じゃねえの？」

「違う！ 彼女は、ここの地下室を借りてる魔女の使い魔だよ」

「っていう設定なんだろ？ こんなコスプレまでさせて………いやらしい」

「確実に君の発想の方がいやらしいよ！」

霖之助の叫びを華麗にスルーしながら、少しだけ考える。

地下室。地下基地。秘密基地。巨大ロボット。部品のパーツ。

ふむ……それはまた、一見の価値がありそうなモノのようで。

「な、なんか目が輝いてますけど、駄目ですよ？ パチユリー様には『試作段階の兵器もあるから、まだ誰も入れないように』って言われてますし！」

「……あのさあ、司書さん。さっきの冗談、本当に実行しちゃってもいいのかな？」

「じゃ、こちらが地下室になります。暗いから気をつけてくださいね」

あつさりと主人を裏切る女がそこにいた。

いや……俺が言えたことじゃないんだけど、それは使い魔としてどうなのか。

ちらりと霖之助の方を見ると、少しばかり疲れた顔で溜息を吐いていた。

「心配すんなよ。危ないモノは触りやしねえさ」

「別に心配はしてない。君は言うことは滅茶苦茶だけど、やること

は道理が通ってる。……それでも、商売相手を見る目は確かなんだよ」

「……………さよか」

見透かされていたのは、どうやら俺の方だったようで。

亀の甲より年の功か。あるいは……単に霖之助が聡いだけか。

「さて……………」

階段を一步步慎重に降りていく。

それじゃあ、人生初の秘密基地ってヤツを拝ませてもらおうとしましょうか。

ライトアップされたロボットは……………なんつか、ダサかった。

ゴテゴテの紫色。間抜けな威容に大きな瞳。腕のドリルとレトロアームに、不釣り合いなほどに展開された背中ของ ブースター。

そう……………昭和を彷彿とさせるそのデザインはまさしく……………。

「うん、すごいな。完璧だ」

「や……………なにがどう完璧なのか私にはよく分かりませんが」

資材を運び入れながら、司書さんは苦笑いしていた。

恐らく、外装は完成しているが中身が完成していないのだろう。積み上げられた資材の横に、組み立て中と思われる各部品が置いてあった。

「正直……………なんでパチュリー様がいきなりこんなものを作ろうと思ったのか、よく分からないんです」

「作りたかったからでいいんじゃないの？」

知識人や識者といった人間は、時折自分の知識を世に知らしめたいくなる。

外の世界で例えると、大学教授とか研究員がそれだ。

知識の披露。作りたかったから作る。自己満足だがそれがいい。

このロボットも、そういう感じで作られたんじゃないだろうか？
「それならいいんですけど……………なんか、とても必死なんですよね」

「必死？」

「あんまり言葉にはできないんですけど。……いつもならもつと余裕を持って製作に入るのに、今回は切羽詰った様子で……動力となるエネルギーのことを考慮していなかったとか、設計上のミスも目立ちますし」

「……………」

設計図を描いてから製作するのではなく。

製作しながら設計図を描いているような行き当たりばったり。

確かにそれは知識人としては、ちよいとまずい。

まずはまずいが……悪くはないと思う。

「好きなようにやらせておけばいいんじゃないの？ よつぽどまずいことになりそうだったら、アンタが止めてやりやいいだけの話だ」

「……私もそうしたいですけど、主人に逆らう使い魔はいません」

「主人のことが好きなら、諫めてやる必要もあるだろ？」

「……………」

反論しようがない正論に、司書さんは思わず口を閉ざす。

まあ、彼女としちや正論に従ってばかりもいられないんだろう。

主の望みを叶えたいという気持ちもあれば、主を心配する気持ちもあるんだから。

それでも……俺は部外者だから、虚実織り交ぜた正論を口にする。

「巨大ロボットの……意志だ」

「……意志？」

「どうしようもない敵が目の前にいて、そいつに打ち勝つために力要る。……巨大ロボットの……そういう時に造られる。漫画や小説にアニメーション。ただの虚構の創作ではあるが……巨大ロボットってのは、いつもいつでも敵を打ち倒すために存在する」

善悪も正邪も関係ない。

ただ、打ち勝ちたいという意志。それが巨大ロボットの根源だ。

「でも……パチュリー様はどんなものに打ち勝ちたいんでしょうか？」

「そいつは俺の知ったことじゃない。疑問があるなら直接本人に聞けばいい。聞けないんだったら、なにも言わずに最大限のお節介を焼いてやればいいさ」

「……そうですね」

「ああ、それから……」

振り向いて、資材の中から気になっていたモノを取り出す。

明らかに他のガラクタとは一線を画したモノ。

それは、黒い瑪瑙のカケラだった。

「拾い物を使うのは、感心しないぞ？ 使ったったら、外装みに完全に作り変えて使うべきだ。拾い物をそのまま使っと、下手すると幻想郷どころか世界のなにもかもが吹っ飛んだりしてダークパワーどころの話じゃなくなったりする」

「……………」

イデとかなんとかそんな感じ。拾い物には口クなものがない。

司書さんがその石のことを知っていたかどうか、それは分からない。

その石にはもう力はない。見た目はただのクズ石だ。

ただ、一度触れれば他の石と見分けがつくくらいの『凄味』がある。

しかし、隙間妖怪の言葉を借りるなら……この石には力があつた。ならばなんらかの方法で、この石の力を取り戻すことができれば主の役に立つのではないか。そんな風に考えたとしても、なんら不思議はない。

「アンタには悪いが、こいつはツケの支払いとして没収します」

「……………はあ」

司書さんは少しだけ溜息を吐いて、それからにつこりと笑った。

「見つけた時は……掘り出し物だと思っただんですけどねえ」

「はっはっは、自分の金遣いの荒さを恨むんだな」

石をポケットにしまって、顔を上げる。

さて、巨大ロボットも拝んだしそろそろ帰ろう。ここの主人とや

らに見つかつても面倒だし、秘密基地気分も堪能した。
そう思いながら顔を上げる。

「小悪魔。この人は一体どこのどちら様かしら？」

ともすれば聞き逃しかねない……そんな小声が響いた。

印象としては色白で垂れ目の美少女。病院で本とか読みながら気だるげに『また来たの？ まあ……いいけど』とか言ってくれるとものすごくいいと思う。

服装は全体的に紫。目の下に浮かんだ隈は、疲れまくつてゐる証拠だと思う。

幻想郷には珍しい……不健康そうな美少女だった。

「パチュリー様っ！？ お、お早いお帰りで……」

「そんなことはどうでもいいのよ。……この人はどこのどちら様？」

「えっと……この人は」

「通りすがりのおでん屋サンだ」

司書さんに喋らせるとガンガンぼろが出そうなので、ここはしゃり出しておく。

しゃしゃり出つつ、司書さんに迷惑がかからないように立ち回る。確かに、司書さんには色々と貸しがあるが、それとこれとはまた別の話。魔法使いの作っているモノを覗こうなんて野次馬根性出した俺が悪いのだ。

秘密基地は、まあ……悪くはなかったけども。

「俺が、勝手に司書さんの後についてきただけだ」

「……分かりやすい嘘ね」

どうやら、賢者は呆れたようだった。

七曜の魔女……パチュリー！ ノーレッジは溜息混じりに俺を見据える。

値踏みするように、見つめていた。

「この人……とは言ったけど、人かどうかも怪しいものね。あなた、

本当に何者？」

「ただの人間だよ。で、どうする？ 俺を殺すのか？」

「警戒しなくてもそんなことはしないわよ。……これも、見られて困るものでもない」

「……………」

「こんなモノを作っても使う場所もないし、ね」

自嘲気味に呟いて、パチユリーは苦笑した。

自慢げな所など一つもなく、ただただ自分の行為に呆れているだけのようだった。

「なあ、魔法使い。一つ聞いていいか？」

「なにかしら？」

「アンタ……なにを考えてこのロボットを作った？」

「……下らないことよ」

「なるほど……ねえ」

口元を緩める。目を細める。心を鋭くする。

さて、これで準備完了。いつも通りに俺らしく、つまらない嘘を吐きましょう。

本音という虚構で、偽りましょう。

本当に、あの人はなんだったんだろう？

そんな疑問と共に、残されたのは数十枚のディスク。

『このロボットには足りないモノが一つある』

外の世界ではDVDと呼ばれるもの。情報記憶媒体。

『それは魂だ。なにかを成し遂げようとする意志と心。ロボットに必要なのは動力でもエネルギーでもシステムでもない。人機一体たらんとする魂だ』

外装しか出来上がっていないロボットを見上げながら、彼女は言った。

『ロボットは意志を体现するものだ。ブースターも、ドリルも、レ

トロアームですら全ては敵を打ち倒すために作られるものだ。……しかし、その意志を貫くために必要なのは、造り手たるアンタの魂だ。アンタの魂こそが、敵を打ち倒すんだよ』

ロボットはただの手段であり。

全ては……私の心と魂の在り方次第だと、彼女は語った。

『ロボットに限らねえ。……漫画だろうが小説だろうが、ゲームだろうがなんだろうが、そんなもん関係ねえ。魂のこもってない創作物になんの価値がある？』

作りかけのロボットを指差しながら、そんなことを言った。

なんにも事情を知らないくせに、あまりにも馬鹿げたことを平気な顔で言い放つ。

それでも……私には、それを否定することができなかった。

馬鹿げた理屈だったけど、私には……否定できなかった。

魔法使いにあるまじきことだけだ。

『細けえこたあいんだよ。小理屈なんざ笑って捨てる。心のままに、覚悟のままに、己の意志でアンタはコイツを作ること始めたんだ。下らなくても、取るに足らなくても、その意志を否定できる奴なんざ、天地のどこにもいやしねえ』

そう言いながら、彼女はきびすを返した。

戻ってきたのは五分後。何十枚ものDVDを私に押し付けて、彼女は笑った。

『念のために貸しておく。魂つてもんを理解できたら返してくれ』

笑いながらたったそれだけを言い残して、彼女は立ち去った。

森近霖之助にDVDの再生装置を借りて……彼女に借りたDVDを再生してみる。

そこに映っていたのは、陳腐な映像だった。

世界の危機がどうか、そういうありきたりな物語だった。

参考にすらならない馬鹿さ加減。終末論を多々見てきたけど、彼

女が持ってきた物語はその全てが……馬鹿馬鹿しいくらいに末期的だった。

登場人物は陳腐で。

ロボットは最後にしか登場しなくて。

それでも……誰も彼もが必死だった。

「……小悪魔」

「はい、なんでしょう？」

「食事の用意を。……食事が済んだら少し眠るわ」

「分かりました。では、そのように」

小悪魔が階段を上がっていったことを確認してから、こっそりと溜息を吐く。

疲れたように吐息を吐いて、ソファに横になった。

登場人物は陳腐で。

ロボットは最後にしか登場しなくて。

それでも……誰も彼もが必死。

そんなDVDの映像はそれなりに長かった。

忘れていた疲労を思い出させてくれる程度には、長くて面白かった。

「……はめられたわね」

魔法使いをはめるとは、とんでもない嘘吐きだった。

ロボット談義も彼女にとっては本音を交えた虚飾。曖昧と茫洋と不明と偽り。本当の目的を達成するための手段に過ぎない。

本当の目的。……それは、多分……小悪魔が困っていることを、解決しようとした。

疲れている私を、休ませようとした。

長い動画を見た時間は、張り詰めた緊張の糸を切るには十分すぎる時間だった。

『人間には時々あんな感じの、ものすごくお節介な人がいるんです

よ」

小悪魔はそんな風に迷懷していた。

迷惑をかけられてなお……その迷惑を迷惑とすら思わない人間。損得で動かない。私にとっては理解しがたい人間。

「やれやれ……だわ」

自嘲気味に溜息を吐きながら、結局睡魔に負けて目を閉じる。

口うるさい誰かの声が聞こえたような気がしたけど、きっと幻聴なので無視した。

「……あの、なにしてんですか？」

「見ての通り甘酒とおじやを製作中だ。疲れた体にはこれが効く」

「いや……帰ったんじゃ？」

「帰るよ。テメエの借金を清算してからな」

「……………へ？」

「使い魔の不始末は主の不始末。利息もまとめてきつちりと取立てさせてもらう」

「い、いやいやいや！ 話が違いますよっ！？ ロボを見せたらチヤラしてくれるはずじゃなかったでしたっけっ！？ あと、あの石とか！」

「胸部パーツを野郎に触らせるのはやめるとは言ったが、誰も借金をチャラにするとは言ってねえぞ。そんな上手い話があるわけねえだろうが。あと、念のために言っておくが、あんなクズ石ごときで借金を返済できると思ったら大間違いだぞ？」

「……………あう」

「一応、司書さんが酒に酔った時の愚痴とか、そのあたりも言質もレコーダーに取ってあるから、パチュリーちゃんから最大レベルのおしおきを食らいなくなったら大人しく借金があることを白状するんだな」

「げ、言質ですと？」

「うん、こんな感じ」

『あの全身紫、小声のくせに早口だから聞き取りづらいし、ミスするとネチネチ怒るし、生きてるんだか死んでるんだか良く分からないくせに可愛いし！ あんまりストレスが溜まってるせいで食事は喉を通らないし、なんかちよつと頭も薄くなってる気がしまうええええええええええええん！』

「……………あ、あう」

「そついうわけだ。覚悟を決めろよ？」

「ひにゃあああああああああああああああああああ
つ！？」

そんなやり取りが厨房で繰り広げられている頃。

森近霖之助は、ぼんやりと今日の夕飯を見つめていた。

おでん各種、おにぎり、焼き魚、山菜の天ぷら、菜の花のおひたし。

自分じゃ作れそうもないメニューが、食卓を彩っていた。

「…………ブン屋に見られたら確実に誤解されそうなメニューだね」
そんなことを呟きながら、深々と溜息を吐いたのだった。

第十話：眼鏡と魔女と小悪魔さん（後書き）

以下、ちよつとした補足（2009/09/23 加筆。……補足に
加筆つてのもアレだけど）。

パチューリロボの建造場所は掃除した物置の地下……と言ってはい
ますがそれは一般人（おでん屋）向けの説明で、実際にどうい
うことになっているかは不明です。

物語上では省きましたが、おでん屋が訪れている『物置』とゲーム
上で妹紅たちが訪れている『香霖堂』は地理的には別々の場所に存
在しています。

どちらを訪れても店主はいつも在宅な不思議。

河童の次になんでもできる魔女が関わっていることなので、メイド
の真似で空間を歪めて香霖堂と繋げるくらいやってのけそうな気も
しますし、人里の地下にドでかいスペースを確保して、色々な拠点
に通路を繋げているのかもしれませんが。

そんなことをしている理由は……人里に近いほうが買出しが楽だか
らw

まあ、物語的にあんまり関係はありませんが、こういう『隙間』を
妄想するのも一つの醍醐味だったりw

と、いうわけで第十話でした。

次回は、エビフライの話かひまわり畑の話。
では、お楽しみに♪

第十一話：綺麗な花には毒がある（前書き）

みすっかすダラダラタイム。

書いてて楽しいけど、読者が望むのはそういう話じゃないよねという感じの話。読み飛ばしても一向に問題はない一話。
花畑を見ながら弁当を食べる話。

第十一話：綺麗な花には毒がある

日ごろの行いとか。

善人とか悪人とか。

あんまり関係ないんです。

ビニールシートを敷いて、弁当を広げる。

商売柄おでんは食い飽きたどころの話ではないので、今日の昼食は梅干のおにぎりと魔法瓶に入れた味噌汁と、家から持ってきた唐揚げと漬物である。

「……いい天気だなあ」

幻想郷では道端で食事をするといつ妖怪に襲われてもおかしくはないのだが、ここは妙に静かだ。

周囲は一面花畑。季節感に沿った色とりどりの花が咲き乱れている。

当然のごとく蜂やら蝶やらも飛んでいて、蜜の採取に必死になっている。

いつも通りに迷い込み、いつも通りにふらふらと、いつも通りにお昼ご飯。

本当は博麗神社を目指していたのだが、簡単に辿り着けそうにはないらしい。

風が吹く。葉が擦れる音が静かで……心は穏やかだった。

まあ、穏やかな時間ってのには大抵ケチが付くんですがね？

不意に、ドス黒い殺意のこもった視線を感じる。

振り向いた瞬間に首が飛ぶ。覚悟を決めるどころじゃない。道端を歩いていたら上からロードローラーが降ってきた……そういう、

どうしようもないこと。

ゆっくりと振り向いて、俺は彼女を見た。

「さて……一つだけ聞かせてくれない？」

緑色の髪。質素な服にちよいと羨ましくなるスタイル。えらい人は日傘を差してはいなくてはいけないという法律でもあるのか、綺麗な日傘を差している。

その人は……思わず惚れそうな笑顔を浮かべて、花畑の一部を指差した。

「あれをやったのは、あなたかしら？」

食い散らかされた花畑の一部。

花や葉、ご丁寧に球根までばらばらにされている。

もぎゅもぎゅとおにぎりを頬張って、お茶で流し込んでから一息。「いや、他人の花畑を荒らすほど腐ってねえから。……まあ、アンタのテリトリーに好んで踏み込んでくるのは、博麗の巫女が、身の程知らずの誰かか、花が好物のゆっくりくらいなもんだろ」

「へえ……私が誰か知ってるの？」

「まあ、噂くらいは。……幻想郷で一番凶暴で凶悪な妖怪で、幻想郷で随一の花好きってことくらいか」

「……ふうん」

彼女は、無遠慮に俺の横に腰を下ろした。

それから、日傘の先端で人の腕をちくちくやりながら、にやりと笑う。

「あなたはここでなにをしてるのかしら？」

「花畑を眺めながら昼飯つてところだな。眺めがいいと飯も美味しい。……ああ、一応言っておくけどゴミは持ち帰るから安心しろ」

「ふむふむ、最近の人間にしては感心ね」

にやにやと笑いながら、なぜか俺の腕をつねる花好きの女。

いや……ちょっと待って欲しい。さっきから普通に痛いんだけど。

「ところで、人の血を吸った花って綺麗に咲くらしいんだけど、知ってる？」

「そんな伝説は知らないな。花が綺麗なのは花が綺麗だからだし、花が元気なのはミミズとかアリとか、土を肥沃にしてくれる分解者のおかげだ。まあ、痩せた土地で綺麗に咲く花つてのもあるから、一概には言えんけどな」

「……そんなことより、私はお腹が空いちゃったの」

「おにぎりが余ったけど食うか？」

「……………」

花好きの彼女は、少しだけ顔をしかめておにぎりを受け取った。それから、ゆっくりと……毒が入っているかどうかを確認するよ
うに、恐る恐る食べ始める。

「あなた……『空気が読めない』とか言われたことない？」

「空気を呼んだら、俺が食べられちゃうだろうが」

「……………はあ」

ゆっくりと溜息を吐いて、花好きの彼女は俺の顔を見る。

「あなた……私が怖くないの？」

「怖いに決まってるだろ」

「じゃあ、どうして逃げないの？」

「一つ、アンタに見つかった時点で逃げても無意味だから。一つ、話を通じるんだったら話してみれば見逃してもらえるんじゃないかと甘い考えを持った。一つ……まあ、これが一番大きな理由なんだが……………」

食事が終わって、お茶を飲んで、ゆっくりと息を吐いて。

ぼんやりと花畑を見ながらポツリと呟いた。

「花が綺麗だからさ……わりと、どうでも良くなった」

それはそれは見事な花畑で、外の世界じゃそれこそ見れそうになり。
い。

草原に一面の花畑。少しばかり荒らされちゃいるが、本当に綺麗だった。

小さい頃……本当に小さい頃は花壇に咲く花もこんな風に見えていた。

小さい頃の夢はお父さんのお嫁さんか花屋というありきたりにも程度つてもんがあるものに憧れて、ほんの少しだけ本気になったこともある。

結局……全部挫折したけど。

最近育てた菜園は、ゆいさんに根こそぎにされちゃったりもしたけど。

俺はわりと花が好きなんだなあと……ちょっとだけ再認識した。ぼーっとして……気づいた時には遅かった。そういうわけだ。

「ま、そーゆーわけだから、食いたかったら殺してからお好きにどうぞ。食あたり起こして後悔することになっても、クーリングオフはできません」

「……そこで食べたなら、私が空気読めない奴みたいじゃない」

思い切り溜息を吐いて、拗ねたように俺の腕を抓る。

いや……あの、滅茶苦茶痛いんですが。

食っちゃ駄目な空気にすることはできたけど、よく考えると腕をもぎ取られたりしたら結局死んじゃう上にもものすごく痛いんだよねー……やれやれ、困った困った。

「そんなに心配しなくても殺したりしないわよ。……私のテリトリに侵入して、花を荒らすような奴だったら、容赦なく消してたけどね」

「じゃ、あの一角を食い散らかした連中も殺すのか？」

「殺すじゃなくて、『消す』よ」

わア……おっかねエ。

顔は笑っているのに眼がまるで笑っていないあたりがものすごく怖い。

まあ、『侵入者は抹殺する』というのは発想としては実に妖怪ら

しいかもしれない。

人間はもとより、妖怪だって縄張り意識は強い。

強い妖怪は、大抵徒党を組んで縄張りを形成しているものだし。

「よく考えると……アンタみたいな強力な妖怪が徒党を組まないのも珍しいんだな」

「どういうこと？」

「強いヤツは、大抵楽をしたがるもんだろ。幻想郷だと特に顕著だ」
認めてくれる相手がいるから、実力を顕示する必要はない。

自分は強いんだと言い張る必要もないから、余裕がある。

余裕があるから異変を起こし、博麗の巫女と弾幕ごっこに興じたりするわけで。

「たとえば、紅魔館の吸血鬼。あの子は吸血鬼という種族に欠点を内包する。微量とはいえ血液を必要とし、日光に弱く、流水や雨にも弱い。だからこそメイドや魔女の手助けを必要とする。……手助けがなくても生きてはいけるが、誰かが側にいた方が楽ができるし面白い。そんな感じなんだろ」

「永遠亭の薬師は？」

「人間だろうが妖怪だろうが、退屈と孤独で心が死ぬこともある。蓬莱人は死ねないらしいが、逆を返せば死ねないだけ終わりが無いから地獄なのさ。……竹林のお姫様は薬師にとっちゃ妹でもあるし娘でもあるし、同時に命綱でもある」

「白玉楼の亡霊は？」

「亡霊に関しちゃ詳しくはないが、たぶん未練でもあるんだろ。あとは……今が楽しくて仕方がないとか、そんな理由じゃないか？」

「隙間妖怪は？」

「本人にちらつと聞いたが、『いくら私でも一人じゃ手に余ることもある』そうだ。いつの世も優秀な存在の隣には助手とかパートナーが必要なんだろ」

「閻魔は？」

「裁判制度つてのは外の世界でも徒党を組まないとやってられない

ほど面倒なんだよ。実際、幻想郷じゃ閻魔の数が足りてないって聞いたぞ」

「新参の神は？」

「太古の昔になにがあったのかは分からないけど、今じゃもう一緒にいるのが当然みたいだったし、そっちの方が効率的に信仰を集められるからだろ。まあ……俺は基本的に神様とかどーでもいいけど、あそこの神様はディ・モールト可愛いと思う」

「地底の嫌われ者たちは？」

「んー……そこまでは知らないな」

「博麗神社に入り浸ってる鬼は？」

「鬼ってのは基本的に人懐っこいんだよ。あと、力のある奴が好きだ」

「色々詳しいのね？」

「七割くらいは想像だから詳しいっていうよりは『妄想たくましい』が正解だよ。なるべく怪我はしたくないから、情報収集は欠かしてないけどさ」

「ふむふむ、なるほど」

咲き誇る花を一つ一つ丁寧に眺めながら、彼女は口元を緩める。

その笑顔は、さっき俺の腕をつねっていた時とほぼ同じような感じだったのだが……まあ、あえてなにも言うまい。

花の検分は終わったのか、今度は荒らされた一角に向かう。

丁寧に荒らされた草花を片付けて、地面を撫でて、それから種を植えて水をまく。

その様子をぼーっと眺めながら、ゆっくりと息を吸って吐いた。

「……それ、楽しいか？」

「弾幕ごっこよりは楽しいかもしれないわね。……あなたは退屈？」

「そーかもな」

「じゃあ……面白くない話でもしましょうか？」

水を撒き終えた彼女は、にっこりと笑いながら日傘を差す。

ちなみにその目は当然のごとく笑っておらず、かなり不快そうだ

った。

んー……やっぱり、水撒きやら掃除やらを手伝うべきだったか。でも、俺が花をいじると肥料やら花の配置やら雑草の除去やらやら懲りたくなっちゃうから、余計な手出しはしない方がいいかなと思っただが……。

「とりあえず、話を聞く前に土下座とかした方がいいかな？」

「なんでよっ!？」

「いや、なんかすげえ不機嫌そうだし……俺としては綺麗なお姉さんや可愛い女の子が不愉快そうにしてるのは精神的に非常によろしくないといふかなんというか……」

「今にも死にそうな顔しながら言うことじゃないでしょっ!？ 大体、なんで女の子限定なのよ？ あなたまさか……そういう趣味？」

「んにゃ、俺は単に『可愛いモノ』が幸せじゃないと我慢ができないだけだ。女の子つてのは中身はともかく外見は最高だからな。特にアンタは俺好みだ」

「……………」

俺としてはごく自然のことで、いつものように当たり前のことを言っただけだったけど、なぜか彼女は顔を真っ赤にして頭をがしがしとかいた。

照れているのか……あるいは死ぬほど呆れているのか、それは微妙な所だった。

ちなみにその『可愛い』のカテゴリズは完全に俺の趣味なので、犬や猫、ナイスガイA、素直になれない小学生、お節介焼きのオッサンなども含んでいる。

「まあ、不機嫌なのは否定しないわ。……本当に面白くない話だから」

「そこまで言われると、どんだけ面白くないのかちよつと気になるな」

「……あなたは趣味が悪いと思うわ」

言いながら、彼女は俺に向かってなにかを放り投げる。

反射的に受け取ったそれは……青い瑠璃石。

元々は美しい宝石だったのかもしれないそれは、見事に砕けていた。

「これは……」

「昔、幻想郷に化物が現れたの。妖怪でも人間でも神でもない。ましてや幻想郷のどの存在にも当てはまらない。……八雲紫はそういうことを『喰らう者』って呼んでた。その名の通り、大地だろうがエネルギーだろうが、光だろうが闇だろうが境界から引きずり出した化物だろうが、あらゆる物を喰らって大きくなる化物だった」

「……………」

「そいつを倒すために当代の博麗の巫女は幻想郷の強者に協力を申し出た。……隙間妖怪八雲紫とその式、西行寺家の初代庭師、面白半分でついてきた疎雨の百鬼夜行、博麗神社に眠る悪霊、あとはまあなんか亀とか、巻き添え食った私とか」

「おーい、後半おざなりだぞ？ 亀は知らないけど、自分の紹介くらいはちゃんとしようや？ U・S・C（アルティメット・サディスティック・クリーチャー）とか、そんな感じで」

「誰が究極加虐生物よ？ まあ……拷問とかは嫌いじゃないけど」「頬を赤らめて照れたりするのはとても可愛いけど、『拷問』って言葉が出てきたら可愛いもへったくれもないよなあ！」

「冗談よ」

にやにやと……こちらの反応を見て楽しむ究極嗜虐生物な彼女。

確実にSですね分かります。

それはともかく、にやにや顔の彼女を見て可愛いとか思っちゃう俺は、もう末期症状なんだろうか。まあ可愛いからどうでもいいんだけど。

「ま、結局結界に閉じ込めて全員でボコボコにしたんだけど、最後の最後にバラバラになって飛んで行っちゃったのよね。……詰めが甘かったというかなんというか。そいつの破片のせいで瘴気が発生して数十年は大地が荒れた。今はほぼ無害だけど、それでも花が咲

きにくかったり、変な植物が生えたり……私にとっちゃいい迷惑だった」

やれやれと溜息を吐いて、彼女は俺を見つめる。

正直、そこまで語ってくれば話のオチは見えている。

「……あんな化物でも、被害はたった数十年よ」

つまり……そういうことだ。

このあたりはまだいいが、人里の道はアスファルトで舗装されている場所もあったりして、花が咲く余地などありはしない。

瘴気で大地が汚れることなど、それに比べれば大したことはない。そう……今のこの状況に比べれば、数十年単位で大地が汚染されたことすら……問題ではないのだ。

「外の世界の技術つてのは……甘い猛毒だ」

「え？」

「妖怪のあなたには実感がないかもしれないが、人間つてのは総じて弱い。単体じゃ草食動物にも劣る力しか持たない。それでも幸せになりたかった。お腹が減るのは嫌だ。誰かを病気で失うのが嫌だ。遠い距離を歩くのが嫌だ。重い道具を担いで作業するのが嫌だ。もっと楽に、もっと効率良く、もっともっともっと……その積み重ねが技術であり、進歩であり……一握りの幸福が周囲に害をもたらす、今の惨状なんだろう」

「……………」

「それでも、工夫も進歩も発展も止まらない。生み出すのが甘い甘い猛毒だろうと、止めることは死を意味する。工夫も進歩も発展も発達も全ては『善くあれ』という意志の中から生み出される……人間として、それを否定することはできないさ」

言いながら、口元を緩める。

化物のように口を緩めて……彼女を見つめた。

「根底からその流れを止めたいんだったら、飼い殺しにすればいい」

八雲紫と俺の能力は似ている……なんてことはないが、それでも八雲紫が理解していることを、俺が理解できてしまうこともある。

そう……例えば、この幻想郷の成り立ち……構成された『仕組み』について。

人間がいないと妖怪は存在できず、博麗の巫女がいなければ幻想郷は存在できない。

そして、博麗の巫女は幻想郷にいる限りは究極で無敵。

その力の根源がどういうものかは分からないが、要は博麗の巫女さえなんとかしてしまえば、なんともなるということでもある。

「たとえば……ちゃんばらんな博麗さんでも、あと数年もすりや色気ついて恋だの愛だのに首を突っ込むようになる。恋人か子供か……とにかく弱みを握っちまえば、あとはアンタら妖怪の力で人減らしと技術の抑制をすればいい」

「……それは、人間の発想じゃないわ」

「知ってる。……しかし、俺としちゃ隙間妖怪やアンタの気持ちは分からないでもないんだ。一種族としては人間はちよいと数が多すぎる。そいつらが全員幸福を望むから外の世界の技術が必要になる。しかし、一度導入した技術を捨てるのは難しい。それなら『妖怪の手で人間の数を調整してやればいい』って考えるのは自然な発想だろ？ 少人数で運用するぶんには外の世界の技術は無害なものが多いいし、……要は、妖怪が生存できるだけの人間が残っていればいいだけなんだから」

「……………」

「言っただろ？ 俺は妄想たくましいんだよ。考えるだけならただで口に出さなきゃ誰の気分も害することはない。頭の中でなにを考えていたとしても、実行しなきゃそれはただの空想に過ぎない。……つまり、今俺の頭の中でアンタが照れ顔の裸＼シャツだったとしても、それはただの……ひはいっふ。ほうひはいほへはひへふはは

い」

「やかましい！」

気持ちには分かるけど、喋っている途中で両の頬をつねるのは反則だと思う。

本気でつねられたら捻り切られてしまうのは目に見えているので手加減してくれたのだろうが、それでもひりひりと痛んだ。

まあ、ただの冗談をそこまで真に受けられても困るのだが。

文字通り、人間の発想じゃない……短絡的な発想なわけだし。

「ったく……ちよつと真面目に聞いちゃった私がアホみたいじゃない」

「人間の言うことを真に受けちゃいかんよ。基本的に嘔吐きなんだから」

「殺していい？」

「優しくしてね？」

「大丈夫。……一瞬で消し炭にしてあげるから」

「あああああいやいやいやいや！ ごめんなさい、冗談です！ おやつのクッキーを奢るから許して！」

「……ふむ、まあいいわ。それで手打ちにしましょう」

別に怒ってはいなかったのか、彼女はにやにやとSらしく笑った。なんとというか……クッキーで許してくれるあたり、わりと現金な人なのかもしれないかと思ったりするわけで。

屋台に備え付けてある冷蔵庫からクッキーを取り出して彼女に渡す。

一口齧って、彼女は不意に口を開いた。

「そつえば、あなたなんでここにいるの？」

「博麗神社を目指してたら迷子になったんだよ」

「博麗神社は逆方向だし、今から歩いたんじゃない？ 日が暮れるわよ？」

「んー……まあ、別に今日中じゃなくてもいいんだけどな。確かに、急ぎといえば急ぎの用事ではあるけど、直接的には博麗さんには関係ないし」

「どういうこと？」

「ちよつとした罪滅ぼしさ。……ま、罪は滅びないし罰もいつか下るだろうけどな」

立ち上がって背伸びをする。

屋台のCDラックから数枚のDVDを取り出し、苦笑する。

こんなことをしても意味は無い。そんなことは分かっている。

それでも……伝えられることがあるんだったら、伝えておくべきだと思った。

関係ないと口を閉ざすのではなく、できることをやるべきだ。

そう思った。

それだけのことだった。

人間の成長は早い。

瞬きしている間に成長し、老い、死んでいく。

たとえ、仲良くなったとしても……しばらく会わないうちにいなくなる。

そういうモノだと割り切って、そういうものだと思っていた。

『でも、友達であることに妖怪とか人間なんて関係ないでしょ？』

何年か前……あるいは何十年前に、友達と呼べる存在がいた。

今思うと、物静かなわりに押しの強い子だった気がする。

彼女は病弱なのに快活で、花粉に弱くて、それなのに花が好きで、この場所が危険だと分かっているながら遊びに来るような命知らずだった。

『じゃあ、私の一番大事なものを預けておくわ。私の人生の節目……結婚とか子供産んだりとか、そういう時に聞きに来るから、絶対に捨てないでね？ まあ、死に目は無理かもしれないけど……あ、そうか。最後は幽香に見取ってもらうのも悪くないかもね』

考えておく、とおざなりに返したけど、彼女は大切なものを置いていった。

置いていったまま、二度とここに来ることはなかった。

何年か前、何十年前か前……あるいは、何百年か前の話かもしれない。

時間なんてどうでもいい。

あの子がいなくなってしまうってから、時間を数えたことはない。彼女が置いていったものは、今も変わらず私の側にある。

傷は癒えず、心は戻らず、割り切っていたことが割り切れなくなり。

今もこうして……昔となんら変わることなく、私は花を育て続けている。

「……………ねえ」

「ん？」

「もう知ってると思うけど……私は、風見幽香っていうの」

「ああ、知ってるよ」

「あなたは？」

「んーっと……まあ、幽香さんになら、いいかな」

目つきの悪い彼女は、少しだけ考える素振りを見せた後、口元を緩めて笑った。

笑いながら……自分の名前を名乗った。

これが、彼女と私の出会い。

友達というわけでもなく、知り合いというわけでもなかった。宇宙に旅立った虫よりも薄弱で、希薄な関係だった。

彼女は時たま、気まぐれのように花畑を訪れて。

私は時たま、偶然のように彼女と話す。

たったそれだけの……それだけしかない、小さな関係の始まりだった。

第十一話：綺麗な花には毒がある（後書き）

USCことゆかりんが彼女を滅殺しなかった理由はどこかで書く予定……かもしれないし書かないかもしれないし、まあどうでもいいことだ。

次回は未定。そろそろいい頃合なので、本編の方をちよいと進める予定。

お楽しみに♪

第十二話：調子の悪い時もある（前書き）

全国の中・高校生がドン引きする話。

または、幼女のお説教の話。

今回はほんの少し趣向を凝らして語り部を変更してあります。
ではでは、十二話の始まり始まり♪

第十二話：調子の悪い時もある

程度の差はあれど、あなたと私の見ている世界は違う。
それが価値観というもののよ。

徹夜の後の睡眠は、とにかく深い。

目を開けたら翌日の昼なんてことはざらで、今日もそんな感じだった。

「ふああああ」

女の子としてははしたないけど、大口の欠伸をしてから背伸びをする。

うん、頭は少しぼんやりするけど調子はわりと快調。

徹夜の後になにも食べていないせいか、お腹がぐうと大きな音を鳴らす。

さてさて……それじゃあ、とりあえず朝食でも作りましょうか。

お腹を満たしたらお風呂に入って、また死んだように眠るのがいいと思う。

むにり。

身を乗り出した瞬間、掌になにか柔らかい感触が伝わる。

まあ、もちもちもちを思いっきり驚掴みしているんだから柔らかいのも当然のことなんだけど……はっはっはっはっは。

「……これ、なんてギャルゲ？」

私が男だったら間違いなくギャルゲーだっただろう。

しかし、残念ながら私はギャルゲーの主人公でもないし、ましてや男でもない。

つまり……この可愛い生物にほお擦りしまくったり、むにむにも

にやもにやしたり、あまつさえあんなことやこんなことをしてもセクハラはおろか犯罪にすらならないということなのだ！

同性でもやりすぎればセクハラとか、細かいこたあいんだよ！私は今飢えている！可愛いものとか柔らかいものとか暖かくていい匂いがするものとか、まあぶっちゃけ人肌なんだけどそれはあえていいことなしてことで！

「……ゆいさん。朝っぱらからなにガッツポーズしてんだ？死ぬの？」

「やだなあ、死ぬわけないじゃん、むしろなべっちがこれから死んだような目にあうんじゃないかなあと思うわけだね」

「……ふーん」

「……」

いや……あの？今の淡泊な反応はどういうこと？

いつもの軽快なツツコミは？

容赦なく私にツツコミを入れてくれる、いつものなべっちはどこにつー？

「た……確かに私は年甲斐もなくはしゃぎまくる、ちょっと痛い女だけど、ちゃんとなべっちに飽きられないように毎回パターンを変えて演出しているのにつー？」

「……痛い女だつて自覚はあつたんだな」

「なべっちも、人のことは言えくない？」

「……そーだな」

そう言つて、なべっちは深く深く溜息を吐いた。

いつもより大人しいどころじゃない。少し思い当たる節があつて、私はなべっちの顔を覗き込む。

うーん……三日前くらいに、てんさんがこんな表情を浮かべていたなあ。

「なべっちさん」

「……なんでしょうか？」

「たまには素直になつた方がいいと思うのは、私の気のせいでしょ

うか？」

「……おなかいたい。うごきたくない」

「はい、よくできました」

くしゃりとなべっちの頭を撫でて、私はさくつと起き上がる。

さてさて、今日の天気は快晴。とりあえず、同居人のために温かいスープとお腹を暖めるためのゆたんぽでも作ってあげましょうか。

まあ、ぶっちゃけ『あの日』なのだった。

あの日に関してはぐれでも保険の教科書でも好きな媒体から、好きなだけ情報を得ればいいと思う今日この頃。

さすがにちよつと恥ずかしいことなので、おおっぴらに口にできることでもないけれど、文字通り生理現象なので我慢していても仕方がないというのが私の持論だ。

これに関しては致し方ない部分が多々あるわけだし、気持ちは分からなくもない。

ま、私も一応女ですからね。

「ん？ ゆいさんが昼飯を作ってるなんて珍しいな。槍でも降るのか？」

「……いや、サンちゃん。こう見えてもわりとそれなりに作ってますよ？」

「昼飯を作ってくれるのは月に一回くらいだろう。おかげで、なべつちがない時のあたしは欠食児童に近い状態だ」

普通にあんまんとか手作りしてたくせになにを抜かすか、この五歳児。

おまけに、明らかに食い過ぎなのに近所のガキどもに比べても血色がいいし。

とても現代っ子とは思えません。

「よく食って、よく動いて、よく眠ればいいだけだ。難しいことじゃない」

「それができないから現代っ子なんだけどねー」

「まあ、あんまり動き過ぎると体を壊すからある程度自重はしてるよ。……で、話は変わるけどなべっちはどうしたんだ？」

「ちよつと調子がよろしくないからね、私が朝食を作っているというわけだね」

「ふうん……なるほど、月のものか」
ずっこけた。

私としては珍しいことに、思い切りずっこけた。

半端ねえ……半端ねえよ、現代っ子！

五歳児にしてその知識量はちよつといかんと思う！

これがゆとり世代の弊害か！ 情報が氾濫する世界に私は絶望した！

「別におかしくもないだろう。文字通り生理現象なんだから」

「……いや、あのね？ その知識は、小学校高学年の保健体育の授業あたりで習得する程度のもので、少なくともサンちゃんくらいの歳の子が学んでいいものじゃありません」

「本当の覚悟とは、未知に怯えることではない！ 未知と戦うことなのだ！」

「あのね、ＪＯＪＯっぽい格好いいポーズ取ってもおねーさんは納得しませんから」

「納得できないんだったら、月に三回ほどに朝食を作る頻度を増やさべきだな。……さすがに、なべっちがダウンするまで絶対に作らないという姿勢はいかがなもんだと思う」

「……あっはっはっは」

空笑いで誤魔化しつつ、私は調理に向かった。

おっかない。おっかないよ、現代っ子。行動パターンまでお見通しだよ。

っていつか、この子は本当に子供なんだろうかと思うことがたまにある。

と、そうこうしているうちに根野菜と練り物（大根、にんじん、

ごぼう、しいたけ、がんもどき、竹輪の煮物、ほうれん草の胡麻和え、豆腐とわかめの味噌汁が完成。

煮物のがんもどきとちくわ、それと胡麻和えに関しては賛否両論あるかもしれないけど私はこれが好きだからそれでいいのだ。

ちようどいい具合でご飯も炊けたので、さっそくいただきましよう。

「あ、サンちゃん。なべっち呼んできて」
「ん」

二つ返事で了承して、サンちゃんはテクテクと二階に向かった。十分後……不機嫌というか、今にも死にそうな顔でなべっちが降りてきた。

「わあ、なんで重い日に限って美味しそうなもの出すんだろ。死ねばいいのに」

「はいはい、不機嫌なのは分かったから食べちゃってくださいな」

「いやホントごめん。……なんかもう、世界が憎い」

重々しい笑顔を浮かべながらも、なべっちは席に着く。

遊ぶ予定のない私たちは、ご飯を食べつつ昼間のバラエティからドラマまで舐めるように見た後には三人でだらけるのがいつものことなのだが、なべっちの顔はまあ……わりと露骨に引きつっていたりいなかったり。

同じ女性でも痛みとか色々差があるわけで……この辺は色々ややこしい。

「なべっち、本当に大丈夫？」

「大丈夫じゃないが……耐えられないこともないリベラ」

「……その語尾にだけは萌えられないなあ」

「まあ、表情に出てるほどきつくはねーよ。体を冷やさないようにしてりや問題ない」

そう言い放つなべっちの服装は、『どてら』だったりするあたり、抜かりがないというかなんというか。

可愛いといえば可愛いけど……少々野暮ったいのがたまにきずっ

てところか。

お腹一杯になって眠くなってきたのか、サンちゃんは欠伸をしていた。

「んー……やることがないと退屈だな」

「じゃ、サンちゃん。せつかくだからゆっくりの散歩にでも行こうか？」

「そうだな。なべっちはどうする？」

「部屋で寝てる。昨日からちょっと血が足りてないから休んでるさ」

「養生しろよ？」

「そっちこそ、ゆいさんとはしゃいで事故んじゃねーぞ？」

口元を柔らかく緩めて、なべっちは二階へ上がっていった。

うーん……いつ見てもなべっちは可愛いなあ。凌辱したい。

「その性犯罪者。さっさと行くぞ」

「あれ、なんか今ものすごく酷いこと言わなかった？ 私は別に性犯罪的な要素は一つもないと思うんだけど？」

「ゆいさんは存在が性犯罪だ」

「そこまですかつ！？」

やたらと厳しい現代っ子にお尻を蹴られながら、私は渋々立ち上がる。

そんなわけで……ペットもとい実験動物の散歩に行くことにした。

なべっちは色々とこだわりが過ぎると思う、今日この頃。

大体、ゆっくりなんて不思議生物なんてテキストに飼ってしまえばいいのだ。散歩紐がないとすぐに繁殖するから注意とか、ゆっくりにあげるおやつは企業が作ったゆっくり用のクッキーじゃないと虫歯になるだとか、詳しくすぎるだろうとか思わなくもない。

公園一周競争に圧勝した私は、にやにや笑いながら高らかに叫んだ。

「はっはっは、今日はお姉さんの勝ちと言ってもいいよね！」

「そ、そんなのかんけないんだぜ！ くつきーさんをよこせなんだぜ！」

「仕方ないなあ。ほーら……アンパン・ーン、新しい顔よー！」

「ゆあああああああああああ！ まってね！ くつきーさんはまりさにゆっくりたべられてね！」

ボールを投げられた犬のように、まりさはクッキーを追いかけて走って行った。

まあ、当然のことながらクッキーを啜えてもってくるようなことはなく、その場でもしやもしやと涙を流しながら食べてしまうわけだが、それは問題ない。

ペットシヨップから飼ってきたゆっくり用のクッキーで、甘さ控えめかつお煎餅程度には固いので、ゆっくりのストレス解消にもばっちりだ。

あと、最初はむかついてたけど、最近はああいう態度にも慣れてきた。

「いや……むしろお馬鹿な子ほど可愛いというか、なんというか」

「甘やかすのは構わないが、後でなべっちに怒られても知らないぞ？」

あんまり可愛くないジャージ姿のサンちゃんは、少し呆れながら言った。

ちなみに、彼女は五歳児なのに私よりも多く走っている。そのくせ息すら切らしていない。

五歳児はもつと可愛げがあっついと思うんだ。

サンちゃんは私を見つめて、ゆっくりと溜息を吐いて……口を開いた。

「で……結局、ゆいさんはどう思ってるんだ？」

「どうって？」

「最近、なべっちの帰りが遅かったりするだろ。どんなことに巻き込まれてるんだか、時折泥だらけになっただけで帰ってくることもあるし、一回なんて三日も帰らなかった。……それに関して、どう思って

るんだ？」

「どうって言われてもね……」

頭を掻きながら、私は口元を緩める。

「別に、私となべっちはただの親友だからね」

「友達と言っには行き過ぎた行為が多々あるような気がするが……」

「あれは、私の一方的なセクシャルハラスメントです」

「……………」

五歳児に蔑みの目で睨まれた。

体は小さいけど視線は一人前。いやん、もっと見て！ 罵倒して！

まあ、我々の業界ではご褒美なわけですが、それはとりあえず言わないでおく。

「んー……まあ、ものすごく心配はしてるけどね。なべっちって尽くす女だし、下手な男にでも引っかけたらもう大変。あつという間にヤンデレの完成だよ？」

「……そーなのか？ 端から見ると『ヤンキー母さん』という感じがしないでもないが」

「そうなんだよ。端からは分かりづらいけどね」

目を細める。口元をつり上げる。にっこりと笑って、私は続けた。

「で、サンちゃんはどんなのかな？」

自分でも、恐ろしく冷たい声になっていったと思う。

五歳児に向ける言葉じゃないけど、彼女がただの五歳児じゃないことは明白だ。

少なくとも……こちらの言いたいことは伝わるだろう。

サンちゃんは少しだけ驚いたように私を見つめて、それから口元を緩めた。

「その『どんなのかな？』には、どういう意図があるんだ？」

「ご自由に想像して、サンちゃんなりの返答をしてくれればいいよ」
「なるほど……そりゃ、ずいぶんと優しいことだ」

私と同じように、サンちゃんにはやりと笑った。

「あいつはあたしの恩人だ。恩には恩で、義には義で返答するのが流儀だ。つまり、なべっちを傷つける奴はどこの誰であろうが許さん」

「なべっちを傷つけたのが……サンちゃん自身だったら？」

「自害するさ」

その言葉に……正直、恥ずかしいことだが、面食らった。

五歳児が自害とか言っちゃいけないでしょう。普通に考えて。

しかし——彼女は。五歳児とは思えないような冷たい目で、言い放った。

「それこそが、あたしにとっての『唯一無二の最悪』だ。他の事は関係ない。遠くで誰が死のうが知ったことか。あたしはあたしのために生きて死ぬ。前もそうだったしこれからもそうする。そもそもあたしはそれしか知らない。……そして、今のあたしはあの子を好んでいる。傷つけたくないと思っている」

「……………」

「あの子の心がどう在ろうが、あたしはあいつの味方だ。あの子のためならどんな嘘も吐くし、なんだってする。人も殺せば自分だって殺してやるさ」

それは……ただの覚悟だった。

こちらに手札を晒すように挑発されたから、彼女は全ての手札を晒した。

私が思った以上の手札を、私に突きつけた。

誰よりも鋭く鋭い目で……己のジョーカーを切った。

「で、ゆいさんはどうなんだ？」

見る、見事なカウンターで返した。

お前はなべっちを傷つけるのか？

傷つけていないのか？

だらだらともたれかかるだけか？

心配しながらにも言わないのか？

彼女がどういう状態にあるのか、分かっているから生きているのか？

そんな風にも……聞こえた。

分かっている。サンちゃんにはそこまでの考えがないことは分かっている。

だから……その疑問は、私が常に抱いていることだ。

それにも関わらず、言い訳に慣れてしまった心は、卑劣にも……本音は吐かずに普段から思っていることしか、口にしなかった

「私は、なべっちのことを傷つけないと思ってるよ」

「……後ろ暗いことがないんだったら、目を合わせて話した方がいいと思うぞ？」

ぐっ……ご、五歳児のくせに生意気な所に目をつけおつて！

っていうか……この子、絶対に五歳児じゃないでしょ！

呆れたように頬を引きつらせて、サンちゃんは大きく……深く溜息を吐いた。

「まあ……あたしが色々と重く考えるのは性分だが、ゆいさんの場合は色々考えてるくせに面倒になって放置して、後々後悔してるみたいだからな。一応、忠告だ」

「ぐっ……」

おーっと！ カウンターからさらにボディブロー！ これは痛い！ サンちゃんの目の付け所は、もうおばあちゃんレベルと言っても差し支えない。

どんだけ人間関係の機微に精通してるんだ、この子は。

「機微というより……ゆいさんの場合は思っていることが滅茶苦茶顔に出るからなあ」

「な、なんですとっ！？」

「その様子だと、トランプでババ抜きとかする時も、なべっちがわざと負けてることに気づいてなかったっばいな……」

「まじでっ！？　じゃ、じゃあサンちゃんが毎回トップ通過してたのは……」

「なべっちが気を利かせてくれたに決まってるだろうが」

「今明かされる衝撃の事実！　私は思っていることが超顔に出る！　トランプとかわりと得意だと思ってたのに！　ものすごいショックだ！」

「あと、たまには可愛い服を着せて外に連れ出すくらいはした方がいいと思うが」

「サンちゃんを？」

「たわけ、なべっちに決まってるだろうが」

「へ？　でも、なべっちは……なんていうか、ジーンズとかＴシャツとかそういう服を好む人ですよ？　この前おしゃれな下着を薦めたらとても嫌がってたし」

「……でっかい声で真っ黒くてスケスケな下着を薦められればそりや嫌がるだろ」

「的確な指摘だったけど、あの時はテンションが上がってたせいで気にもしませんでした本当にごめんなさい。」

徹夜明けのお酒って本当に怖いよね！

「ゆいさん。……あたしはわりと真面目に話してるんだが？」

「今のままでいいじゃない？　どーせ、なるようにしかならないし」

「かといって、今の状態が望ましいとは言えないな。……あたしが言ってることは、ゆいさんなら分かるだろ？」

「……別に、分かりたくもないし」

「分かりたくないんだったら、一生そうして拗ねてりゃいい。……言っておくが、あたしはゆいさんのことは嫌いじゃないが、基本的にはなべっちの味方だ。あの子は一生懸命に生きている。邪魔するんだったらゆいさんでも殺すぞ」

「おお、怖い怖い。これだから小二病（うん・野郎とかちん・野郎とか言ったり、殺す殺す連呼し出す病気的一种）のお子様は困ります……ひひやぎうっ!？」

パンツと音が響くと同時に、右足の甲に激痛が走る。

あまりの痛みに涙目になって蹲ると同時に、目の前をサンちゃんの手が通り過ぎる。

まつ毛を掠める程度の距離を……抜き手が通り過ぎた。

「分かってると思うが、手加減した。本気になれば眼球くらいは引っっこ抜くが」

「……あの、サンちゃん？ 君って本気で何者？」

「なべっちの味方で、ゆいさんの将来を本気で心配している五歳児だ」

「……………」

五歳児に本気で心配されるほど、私は駄目人間なのかもしれなかった。

うーん……我ながらちよつとショック。

私がショックを受けている間に、サンちゃんは言葉を続ける。

「そのままの関係でも悪いとは言わないさ。それが人間関係ってやつだろう。ただ、社会常識として化粧とかは普通に身につけてるみたいだけど、服飾とか、着こなしってやつをゆいさんが教えてやるのも悪くないだろ？」

「んー……まあ、そりゃそうだけでも。可愛い服とか着てくれるかなあ？」

「着てくれるだろ。なべっちは押しに弱い。いつも通りのKYさでガンガン切り込んでやれば簡単に折れるさ」

「あの……さりげなく私をKYにするのはやめてくれないかな？」

「KYじゃないとでも？」

「む……………」

改めて、指摘されると、わりと傷つく。

サンちゃんは苦笑を浮かべながら、呆れたように言った。

「傷つくのは分かるが、ゆいさんの場合は言わなきゃ判らないだろ。鈍いんだから」

「……………」

「それに、心も体も使えば傷つく。傷を恐れるのは当然のことだが、時には一步踏み出さないとなんにもならん。なべっちは傷だらけで見えないが……それでも、ちゃんと踏み止まっている。ゆいさんはもうちょっと頑張れ。怖いのは分かるけどな」

分かりまくった上での説教だったらしい。

んー……なんだろう、この子は。

とても腹が立つけど……正論には反論もできやしない。

仕方なく、肩をすくめて私は口元を緩めた。

「つたく、子供のくせに弁が立つんだから。そこまで言われたら嫌とは言えないよ」

「悪いな、無茶を言って」

「無茶ってわけでもないし、確かにサンちゃんが正しいよ。ついでに言えば、私が怖がりなのも正解。……正解で腹も立つけど、引けない時が大人にはありますもの」

サンちゃんには、なべっちと私以外に頼れる人がいない。

いくら私が怖がりだろうが、五歳の子供の必死のお願いを聞き届けないほど……私は人間は捨てちゃいけないつもりだ。

「いいでしょう、私にも意地があります。なべっちを可愛くコーディネートしたついでに、なべっちが忙しい時はご飯を作るくらいはしますとも。ただ、基本的に私の方が忙しいので、一ヶ月に一回ペースは変えられないかもしれないけど、努力はしましょう」

「材料を切るくらいだったら、私も手伝えるぞ」

「お子様は黙って皿でも出してなさい。包丁には七歳になるまで触らせません」

「……ゆいさん」

「なにさ？」

「普段はそうでもないが、開き直ると格好良いな。結婚してくれ」

「十年早い」

中指を立てて、私はにやりと笑う。

サンちゃんはなぜか、楽しそうに笑っていた。

他の飼いゆつくりには誘惑されかけていたまりさを連れて、家に戻る。

昼はちよつと手の込んだものを作ったので、夜は少し手を抜こう。なべっちも体調があんまりよろしくないみたいだし、とりあえず手打ちうどんでいいだろうか。

「ばあが来なかったらもつとゆつくりできたのだぜ！　ばあはひどいのだぜ！」

「はいはい、ゆっくりゆっくり。あんよを拭くからちよつと我慢してね」

「まりさのおぼしいい！」

帽子を取る。ひっくり返す。濡れ雑巾で底を拭く。ひっくり返す。

帽子をかぶせる。

この間、二分。わりと成長したもんだと思う。

「ぶんぶん！いきなりおぼしをとるなんてばあはひどいやつなのだぜ！」

「あんよが土まみれじゃれいむに嫌われちゃうぞ?」

「
…
ゆう
」

「あと、まりさが綺麗なありすに誘惑されかけてたのはれいむに言っちゃってもいいのかなのだぜ？　だぜ？」

「だ、だめなんだぜ！ あれはほんのじょうだなんだぜ！」

「はいはい、別にチクリやしませんとも」

狼狽するまりさを庭に戻して、私はゆっくりと息を吐く。

うーん……我ながら心が弱すぎる。サンちゃんに言われたことが
今になってボディブローのようにじわじわと効きはじめているわけ
で。

「やっぱり、私は痛い女でおまけにKYだったのか。」

……普通に凹むなあ。

まあ、今は凹んでいても仕方がない。ここは体調の思わしくない

なべっちの顔でも見て、軽口の一つや二つ挟んでから夕食作りに取りかかりましょう。

階段を上がって二階に向かう。

ノックをしたが返事はなかったなので、勝手にドアを開けた。

なべっちは、いつものように眠っていた。

さすがに起こすのは気が引けたので、なべっちの隣に腰を下ろす。頭を撫でて、寝顔を見つめる。

昔……実家のばーさまにこうやって頭を撫でられたことがある。両親はとても多忙で、見栄っ張りで、私たちを着飾って他人に見せびらかすことしか考えていないような人たちだった。

姉さんはとても優秀で、気持ちを分かち合うことはできたけど、あの人の清廉潔白な生き方にはとてもついていけなかった。理解はできるけど共感ではできなかった。

ばーちゃんは……まあ、私にもよく分からないばーちゃんだった。世界は下らなかった。面白くもなんともなかった。全てが等しく無価値で等価。誰がいなくなっても構わない。

特別はなく、代替品は腐るほどある。

そんな世界に絶望していた頃、彼女と出会った。

「……なんのことは、なかったんだけどね」

なべっちの頬を指で撫でながら、口元を緩める。

「ホント……サンちゃんの言う通りなんだよね」

私は弱くて怖がりで、両親から姉貴からも逃げることしかできなかった。

かまってちゃんだっただけ。誰かに認められたかっただけ。それだけあれば十分で、彼女はそれを満たしてくれた。

私たちを繋いでいるのは百合のような愛情じゃない。ただの共感

で……言ってしまうえば傷の舐め合い。人間の生き方としては無様にも程がある。

それでも……私は、この関係を壊す奴がいたら、そいつを殺すだろう。

なべっちを奪う誰かがいたらきつと殺してしまうだろう。

もちろん、サンちゃんとは別だ。あれだけ可愛い幼女は私たちと一緒に暮らしてしまえばいいとなべっちも言っていたし、それには私も同意なのだ。

痛い愛情だと自覚はあるけど、それは愛情欠如の家庭で育った私の落ち度だ。

「まあ……なんにしろ」

他の人がどう思うかは知ったことじゃない。

これは、私の主観で、私の思いで、私の想いで、私個人の勝手な感想だ。

つまり……これは私の意志だ。

「友情でも愛情でも共感でも傷の舐め合いでも、ラブなのは変わらないのだった」

口元を緩める。

胸の痛みが少しだけ和らいだところで、私は夕食を作ることにした。

「じゃ、そろそろ取りかかりますか」

前々から、ちょっと思っていたことがある。

なべっちはだしの作り方とお酒の選定が少し甘い。

今日は、ちよっくら本気を出して……おでんの欠点を指摘してあげましょうか。

その夜のおでんは、我ながらとても上手に出来たと思う。

ただ、なべつちが拗ねてしまいそれから三日ほど口を聞いてくれなかった。

なにを間違えたのかとサンちゃんに聞いてみると『いや、ただでさえ不機嫌なのに自分の得意分野でぶつち切られたら誰だって怒るだろ』とのこと。

ちなみに、三日間口を聞かなかった後は二日間ほど家に戻らなかった。

付け加えるなら、サンちゃんも三日目からは口を聞いてくれなくなつた。

その間、私はとても寒々しい日々を送ったことは言うまでもない。

第十二話：調子の悪い時もある（後書き）

と、いうわけではなかったでしょうか？

作者的にも『風邪かなんかでよかったんじゃない？』とか思わなくもないけど、まあ書いちゃったものは仕方がない。

ちなみに、女友達に聞いてみたが『別に悶絶とかはしないから、野郎の股間にぶら下がってるものをゴツンとやられるほどには痛くないけど、股間のそれをすごく痛い程度に握り締めて、捻って上に押し上げられてる……みたいなイメージ？』とのこと。

どっちにしてもイテエよ、と突っ込めなかった僕は多分負け組です。次回は……多分三妖精の話……かもしれない。

全然考えてなかったとか、そんなことはないんだぜ！

第十三話：今日も一日お疲れさん（前書き）

三妖精が好きな人はごめんなんだけ！

やっぱり、どう考えても一番怖いのは人間なんだけという話。

第十三話：今日も一日お疲れさん

うかつでござった。

こんなに走ったのはいつ以来だろうか？

ああ、それは多分いつ以来っていうより24時間ぶりってところだろう。

年甲斐もなくサンと競争をして、大人の力を使って思いつきり圧勝した時が大体こんな感じだったような気がする。

「ゲホッゲホッゲホッ……げふうつぶつ……あのいたずら妖精どもめ、今度会ったらあんなこといいなできたらしいなことをやってやる……けぶっ」

吐きそう。死ぬ。誰か俺に水をくれ。ゆいさんとテキーラ早飲み競争なんてしなきゃよかった。イチゴ牛乳でも相殺しきれぬアルコールなんて飲まなきゃよかった。

おまけに道に迷う始末。ここは一体どこなんだろうか？

「うーん……困ったなあ」

森の中ということは分かる。それ以外はさっぱり分からない。

この幻想郷では迷子＝食べられるというのはわりと日常茶飯事のような気がしないでもないので、つまり俺の命は今大ピンチと言えなくもないだろう。

そーなのかー。

「違うよ？　ここはあいつの縄張りじゃないからね？　幻聴だからね？」

恐怖のあまり膝がガクガク震えているが、気にしない方がいいだろう。

うーん……屋台がないと家に帰れない。ここがどこだかも分からない。星を見たところで方角なんて分かりはしない。水はないし喉

が渴いた。屋台は妖精に持つていかれたし、護身用のバットじゃ、武装としては物足りないにも程がある。

そーなのかー。

いや、だから幻聴だし。いい加減にしろよ幻聴。ホント勘弁してください。

這い寄る死の恐怖に、俺の寿命がマツハになった。

と、その時だった。

「……………ん？」

周囲の木が避けているような、開けた空間。

その空間に、他の木を押しつけるように巨木が立っていた。

俺の住んでいる街は都会とは言えないまでも、田舎とも言い難い。そんなわけで、樹齡が何十年とか何百年単位の巨木を見るのは初めてだった。

しかし……周囲の木はこの巨木の半分程度の大きさなのに、コイツだけ空気を読まずにうつかり成長したように見えなくもないのは、俺の気のせいかな。

さて、それはそれとして。

慧音さんに紹介してもらった育ちが良くて病弱そうな少女、キュンちゃん（腹黒だがそれがいい）によると、妖精つてのは木に住み着くこともあるんだとか何とか。

これだけの巨木なら、人が住み着いてもおかしくはないが。

「さて……と」

木登りの経験はあまりないが、背に腹は変えられない。

幸いなことに、なぜか用意してある丈夫そうなのはしごとか、手がかけられるでっぱりだとか、なぜか設置してあるハンモックなどなど、便利なものがたくさんある。

木登りはそれなりに重労働だったが、木の中腹まで登ると……ようやく自分がどこに居るのか把握できた。

「うわ……神社近けえし」

思いつきり走ったつもりだったが、どうやらそれほどでもなかつ

たらしい。

博麗神社は実はすぐ近くにあった。

これほど間抜けな話もないが、まあ、人生も含めて大体そんなもんだろう。

「さてさて、帰り道の心配もなくなったところで、突撃妖精のお宅訪問と参りますか」

巨木に不自然に取り付けられた木製の扉に手をかける。

小賢しいことに鍵がかかっているのか、押しても引いてもびくともしなかった。

仕方ないので、常備しているポシエットからガムテープを取り出し、窓に貼り付けた上で、ハンマーで窓ガラスを叩き割る。

こうするとガラスが落ちないので音が響かないのだ。

ガムテープを剥がし、ガラスの割れた部分から手を差し入れ、鍵を開ける。

そんなこんなでお宅訪問完了。所要時間は約三分。

確実に犯罪なので、良い子は決して真似をしちゃいけないよ」

「……と、まあ非合法な手段で侵入したんだが……あの妖精ども、意外と可愛いお宅に住んでやがるじゃねーか」

シル・ニアファミリーというか、森のお友達のお家というか。

ゆっくりはおろか人間も喜びそうな、実にゆったりとしたお宅である。

光の差し込む二階と、風通しのいい一階にはキッチン、ついでに酒樽や色々なものがごちゃごちゃと置いてある地下室。

不法侵入のくせにアレだが……ちょっと羨ましくなってきた。

いい家に住んでやがるじゃねーか。

「……へっへっへ」

残虐な笑顔を浮かべて、部屋の中を見回す。

さてさて、それじゃあ目には目を。齒には齒を。いたずらにはいたずらを。

自分の所有物を土足で踏みにじられる屈辱を……たっぷり味わ

わせてやる！

赤いリボンにオレンジの髪。背中に生えた昆虫のような薄い羽。
黒いリボンのついた白い帽子に金髪のくるくるロール。カゲロウ
のような薄い羽。

青いリボンに腰まで届く長い黒髪。背中に生えたアゲハチョウの
ような薄い羽。

上から順番にサニーミルク、ルナチャイルド、スターサファイア
という名前の妖精で、幻想郷の象徴とも言える博麗神社にちよつか
いをかけては、巫女に砂（私刑とかいてリンチと読む行為）にされ
ている三妖精。

好きなことはいたずら。妖精らしく好奇心旺盛で、懲りるという
ことはあんまり知らない、かしまし娘たちである。

「いや、大漁大漁！ あんなにからかいがいのある人間も珍しい
わね」

「確かに大漁なんだけど……やりすぎじゃない？」

金髪の少女、ルナは引っ張っているおでん屋台を見つめて溜息を
吐く。

対して、同じようにおでん屋台を引いているサニーはにこにこ
笑っていた。

「まあ、いいじゃない。これでしばらくは美味しいものが食べられ
るし。あ……地下に眠らせてあるとおきを開けてもいいかもし
れないわ！」

「サニーは能天気だねエ……」

スターは屋台の後ろを押しながら、口元を少しでも引きつらせて
いた。

自分達を追ってきた、屋台の主の形相はしばらく夢に出てきそう
なほど凄惨なもので、ついでに言えば金属の棒を容赦なく振り回す
人間だった。

自分の機転がなければ、今頃はどうなっていたことか……。

(……あれ、一回休みになってもおかしくなかったわよね)

ちなみに、妖精にとって一回休みとは人間にとっての『死』と大差ないのだが、妖精は死んでも同じ存在に生まれ変わる。

正確には……人間とは命の定義が違うので『生死』という感覚があまりない。

まあ、妖精自体が自然現象そのものなので、そもそも人間と比較するのが間違っではいるのだが。

「……………ん？」

と、その時。ルナはほんの少し眉をしかめた。

「ルナ、どうしたの？」

「んつと……なんか、私達の家の方角からたくさんの生き物の気配が……………」

「げ、またゆつくり？ 鍵もかけたし、窓に鍵もかけておいたのに」

「だから、あれほど窓じゃなくて木の扉にすればいいって言うておいたのに。……もう、今度ランプが割れてたらサニーのせいだからね！」

「むう…………でも、窓があるのって二階だよ？ なんかおかしくない？」

「まあ、その辺は否定しないけど…………とにかく、急いで行ってみようよ！」

ガラガラと、おでん屋台を引きながら三妖精は自宅へと急ぎ足で向かう。

ゆつくりという生き物はわりと賢い。窓を石で割って侵入することとするし、その割れた窓ガラスが危険だということも知っている。ただ、三妖精たちの自宅の窓ガラスは大抵高い位置にあるので、これまでに鍵のかけ忘れ以外でゆつくりに侵入されたことはないのだが……。

「ルナ、どう？」

「うん。…………大体、五匹くらいかな？」

「それなら大丈夫よ。一気に踏み込んで、全部追い出しちゃおうよ！」

「あ、こら、サニー！」

妖精にとつても、ゆつくりはさほど害のある生き物ではない。

ゆつくり自体は野生動物にしては賢い生き物だが、指を噛まれたりしない限りはさほど危険はない生き物である。

ただ……もしも、もしもの仮定ではあるが。

もしも、この家があのおでん屋の主に見つかっていたら。

もしも……おでん屋の主が、自分達のことを人里で聞いていたら……。

「ここは私達のお家だからね！ ゆつくりしないで出てふぎゅっ！？」

家の扉を開け放ったサニーの体が宙に浮き上がる。

襟首を誰かに掴まれているのだが……その顔を見る勇氣は、ルナにはなかった。

「……え、えっと」

「私達のお家なんだろ？ 遠慮すんなよ。それじゃあ……ゆつくりしていつてね！」

サニーが家に引き込まれると同時に、ボタンとドアが閉まった。後には、啞然としたルナとスターが残されたのだった。

とりあえず、一人捕獲完了。

ガムテープで適当に手足を縛って拘束し、床に転がすと痛がるといけないので近くにあったクッションの上に座らせた。

「ちよっと、いきなりなにすんのよー！」

わあ、これはまた小生意気な妖精だ。超可愛い。

可愛さのレベルで言えば、氷精と大妖精タツグには劣るかもしれ

ないが、これはこれでありなんじゃないかと思わせるところがいい。
まあ……それはそれとして。

「いきなりなにすんのは、こっちのセリフだばか妖精。最初に俺の屋台をパクッたのはお前らだろーが？」

「う……い、いやまあ……その、最近寒いじゃない？」

「それは分かるが、人のモノを盗っちゃいかんだろうが。そういうことをやっていると、今酷い目に遭ったりするんだぞ？」

「ちょ、さりげなく『今酷い目に遭う』って言ったっ！？」

「自業自得だ。ま、ちょいとしたゲームにお前らが勝ったら解放してやる。もちろんおでん屋台は返してもらっけどな」

「ゲーム？」

「うむ、名付けて『三妖精救出大作戦』。仲間がお前を助けられたら、俺は屋台を返してもらっただけにする。ついでにお前らにおでんを奢ってやろう。で……仲間がお前を助けられなかったら、あれらの素敵な品々は全部いただくし、鳥の羽で泣くまでくすぐった上に熱々はんぺんの刑に処す。拒否権は認めない。被害者が加害者になることなんて、わりとよくあるケースだからね？」

「あれらとか適当に言っちゃってるけど、私達のお気に入りほとんど全部じゃない！」

「はにーさんたちは、ゆっくりさくしゅされていつてね♪」

「ぬわああああああああああああ！ 楽しそうなのが妙に腹立つうううううううう！ あと、私の名前はサニー！ サニーミルクだから！」

うん、知ってる。わざとに決まってるだろ。

ちなみに、ハニーミルクってのは暖めたミルクに蜂蜜を入れた飲み物で、寒い日なんかには呑むととても癒される。

世界は牛乳で回ってる。牛乳さえ飲んでればなんでもできるんだよ。

別の卑猥なモノを連想した人は、とりあえず謝ってください。

「ふっ……でも、そういうことなら心配ないわね！ ルナとスター

は私と同等かそれ以上の猛者よ。人間なんかに負けるはずがないんだから！」

「見捨てられなきゃいいけどなー？ あ、ちなみに二人が助けに来なかったら三人分の罰を、一人で受けてもらうことになるけど……別にいいよな？」

「助けて二人ともおおおおおおおおおおおおおおお！」

まあ、当然助けに来るに決まっているのだが、精神的な責めには慣れていないのかサニーちゃんは涙目になりながら叫んでいた。かくして、極めて一方的な『ゲーム』は幕を開けたのだった。

実際の所、捕まったのがルナかスターだったらまだ良かったかもしれない。

サニーの能力は『光を屈折させる程度の能力』である。

人間の認識能力は視覚に依る部分が非常に大きい。『光の反射』によって人間は色彩や形を認識しており、それを操れるサニーの能力はいたずらにおいて非常に大きな役割を果たす。

まあ、ありていに言えば姿を消したりとか、そういうことだ。

ルナとスターには知る由もないことだが、その能力があればこの『助け鬼』は終わったも同然だっただろう。

だからこそ、いの一番にサニーが狙われたというのもあるのだが……。

「ど、どうしよう……サニーが捕まっちゃった！」

「落ち着いて、ルナ。とりあえず、サニーを助けるのが先決よ」

スターも落ち着いてはいなかったが、とりあえず呼吸を整えて能力を使う。

家の中には動くものの気配が七つ。一つはものすごく活発に活動しているが、恐らくこれは捕まったサニーが暴れているせいだろう。五つはキッチン回りでなにやら積極的に動き回っている。そして……

…問題の一つは。

「出てくるわ」

「え？」

「サニーを捕まえた人が出てくる」

スターの言葉通りに扉が開き……中から、目付きの悪い女が姿を現した。

そして、煙草に火を点けて紫煙を吐き出し、口を開く。

「えっと……ルナチャイルドに、スターサファイアだったっけ？」

「あなたはその屋台の店主さんですか？」

「質問に質問を返しちゃいけない。とりあえず、人質を握ってる方がイニシアチブを握れるってのは、幻想郷に限らず世界の常識だろ別に呪ったりはしないから、名前くらいは確認させて欲しいな」

「はい、その通りです。……それで、私の方は答えてもらえるんですか？」

「答えは『はい』だ。その屋台がなくなっちまうと商売上がったりなんでね、返してもらえないかな？」

「サニーを返してくれば、この屋台も返します」

「おいおい、馬鹿言っちゃいけないな。屋台と食ったおでん代と飲んだ酒代と、それから俺への迷惑料とかその辺りもきっちり払ってくれないと」

「……………」

スターはお酒を飲んだルナを少し睨みつけたが、彼女は光速で顔を逸らした。

（参ったなあ……納得はいかないけど、間違いなく向こうの方が正しいよね）

無銭飲食の上に屋台の泥棒。よく考えなくてもやり過ぎた。

サニーが酷い目に遭わされなかっただけでも僥倖だったのかもしれない。

それを見透かしたのか、おでん屋台の主はにやりと笑った。

「払えないんだったら交渉は決裂だ。君ら全員をとっ捕まえて、巫

女に引き渡す。……あと、迷惑な妖精が神社の近くに住み着いてる
つてのも教えてやらないとな」

「脅迫ですか？」

「交渉だよ、スターちゃん。こちらの要求が呑めないんだったら、
然るべき制裁が下る。当然の理屈だろ？ まあ……これは人間の理
屈だから君らにや分らないだろうが、あいにく泥棒に容赦するよ
うな謙虚な心は持ち合わせていないんでな。権利も理屈も押し付け
るし、交渉の余地もないし暴力も行使する。いたずらにしろ、悪行
は悪行。その屋台が俺にとってどんなものなのか考えずに奪った君
らも悪いんだよ」

大丈夫よ。ちょっと借りるだけだから。

そんなことを言っていたサニーと、連帯責任という言葉考えた
人間を恨みつつ、スターは少しだけ溜息を吐いた。

「すみませんが、人間が使う金銭は持ち合わせていないんです」

「別に金で払えとは言っていないよ。そうだな……二階にあったお洒
落なランプと、地下に置いてあった果実酒と、ダンスの中にあった
可愛い服とリボンで手打ちにしてやろう」

「ちょ、それは私のふぐつ！」

叫びそうになったルナの口を反射的に押さえて、スターは店主を
見つめる。

「分かりました。ちょっとルナと相談したいんで、お時間をくださ
い」

「了解。話がついたら教えてくれ。……逃げようなんて考えるなよ
？」

釘を刺してから、店主は再び家の中に引っ込んだ。

それを見届けてから、スターはルナの口を離す。

かなり強く抑えつけていたためか……ルナは思い切り咳き込んで
いた。

「ごふっけふっ……げほっげほっ……あの、ルナ。とりあえず色々
言いたいことはあるけど、息を吐いた所で呼吸を止められるのはい

くらなんでも死んじゃうからね？」

「あー……ごめん」

「で、どうするの？ おでん屋台を返せば、サニーは戻ってくるのよね？」

「そう思いたいけど、あんまり樂觀しない方がいいかも」

「どういうこと？」

「例えば、ここで私達がサニーを見捨てたら、あの人は容赦なくサニーを酷い目に遭わせると思うの。爪の間に針を差し込んだりとか」「ひいっ！？ なにそれ！ どう考えても普通の発想じゃないわよ！」

「まあ、それはいくらなんでも極端すぎるけど……とりあえず、屋台を返しても無事には済まないと思う」

「じゃあ……どうするの？」

「とりあえず、二手に分かれてサニーを救出しましょう。私は正面から、ルナは二階からお願い。サニーを首尾よく救出できたら、家は一旦諦めてほとぼりが冷めるまでどこかに身を隠した方がいいと思うの」

「うう……サニーの口車に乗らなきゃこんなことには……」

ちよつと涙目のルナは、それでもすぐに行動を開始していた。

ルナに目配せしながら……スターは玄関の方を見る。

（さて……どうなるんだろ）

のほほんと、しかし、真剣に友達のことを考えながらスターも動き出した。

妖精つてのは少しばかり考えが足りない。

そういう種族だと割り切ってしまうえばそれまでだが、少なくとも部屋の中に俺とサニーちゃん以外のなにかを見つけたんだったら、それがなにかを考えてみたほうがいい。

結論から言えば、そいつらはゆっくりの親子。

綺麗なものが好きなありすと好奇心旺盛なまりさのつがいで、子供は四匹。

話を聞いたところそれなりに大きな群れに属しているらしい。さて、恐らくスターちゃんは五匹の生き物を感知したはずだ。

そう……五匹だと一匹足りない。親がつがいで二匹で子供が四匹なのだから、親が一匹足りない計算になる。

もちろん、俺が潰したわけではない。

「ゆゆくん！ ものすごくゆつくりできそうなおうちだよ！」

「さすがまりさね！ きょうからこのおうちはみんなのゆつくりぶれいすよ！」

「そうだね、ぱちゅりー！ このおうちならふゆさんもこわくないよ！」

まあ、考えれば単純なことだ。

三妖精が家に帰ってくる前に、『素晴らしいゆつくりぶれいすを見つけた』と、ゆつくりの親子に話を持ちかける。親まりさは群れを呼びに行き、親ありすは子供と一緒に自家の検分をする、といったゆつくりにしては華麗なコンビネーションを発揮しただけ。

ゆつくりの群れが押しかけた頃に妖精の家を出てしまえば、三妖精は俺を追うことすらできなくなるという寸法だ。

再び屋台が被害に遭うことも考えられるが、その時はその時だ。

今夜から防犯対策はしっかりしようと思う。

「ま、盗人はどっちかつつと俺かもしれないけど……これも自業自得ってことで」

綺麗なランプと地下に置いてあった果実酒、それからサンに似合いそうな妖精の服を数着拝借しつつ、俺は屋台を引っ張る。

森を抜けると、そこはいつか見た神社の境内。

神社の境内に屋台を止め、いくつかの防犯対策を施してから階段を上がる。

「よう、博麗さん。久しぶりだな」

「……………誰？」

忘れられてとは思ったが、やっぱり忘れられていた。

久しぶりに会った彼女は、相変わらずとぼけていた。

とぼけてはいたが……久しぶりに見た彼女は、少し痩せているようだった。

「異変解決の依頼なら後にしてくれない？ ……今日は疲れたの」

「疲れてるなら好都合。いい酒を持ってきたんだ。一杯やろうぜ」

「何が目的なの？」

「話を聞いてくれるだけでいい。手間は取らせないし、なにより最近妙な異変が頻発してお疲れな様子の博麗の巫女に無茶はさせられんよ」

「……あ」

そこでようやく思い出したか、博麗さんは苦々しく口元を歪めた。

「お酒、美味しいんでしょね？」

「保証はするよ。なにせ、俺の家に住む魔女の推薦だ」

「話したいこともそんなにないし、あなたが話したいんだっただけ聞いてあげる。……その代わり、一発殴らせる。それからあの時のことはきっちり説明してもらおうから」

「ああ……分かってるよ。ちゃんと話す」

「……なんか、素直ね？」

「色々あったってわけじゃないけど、神様に会ってちょっと改心したのさ」

言いながら、神様と同じことを博麗さんにもしてやることにする。博麗さんの頭にボンと手を乗せて、くしゃくしゃと撫でる。

博麗さんは、少しだけ頬を赤らめて不機嫌そうな表情を浮かべた。

「……………なによ？」

「毎日お疲れさん。今日はゆっくりしていいからな？」

「……………ふん」

そつぽを向きながら、博麗さんは俺のことを見ずに本殿へと歩き出す。

口元を緩めながら……俺もその後続いた。

業は業のまま。

得は得のまま。

借りと貸しを清算しながら異世界を歩いてみる。

なにができるのかは分からない。

なんにもできないかもしれない。

いつか報いを受けて、最悪の末路を辿ることになろうとも。

それでも……なにかをやるうとここで決めた。

ちなみに、ゆっくりと妖精のお家戦争は三日三晩続いた挙句、妖精がこの家よりも住み心地が良さそうなゆっくりぷれいすを紹介するという結果に落ち着いたそうだが。

決着が付いた頃、俺はすっかり妖精たちのことを忘れていたのだった。

第十三話：今日も一日お疲れさん（後書き）

はい、そういうわけで最新話でした♪

社会人の方は分かると思うけど、この辺から12月の進行が開始するんで若干更新が停滞する予定。まあ、見てる人なんてそんなに多くないけどね！

だからこそ、見てくれてる読者の方には超感謝！ 本当にありがとう！

終わりの引きだけでもまだまだ続くよ！

次回は、生まれ変わったれみりや編。お楽しみに♪

第十四話：私はあなたを怒れない（前書き）

一か月ぶりの更新。なんで一カ月かかったかというところ、仕事が多忙だったから。

年末進行など減らしてしまえー！

本当はれみりや編の予定でしたが、ちょいと気が変わった＋リハビリに

おでん屋更新。次は本編に取りかかる予定。

今回は、LALで最も嫌われている彼女が登場。

ゲームには登場しないそうだから、こちらの方で補完してみた。

実際のところ、自分は彼女のことをあんまり嫌っていない。

行為自体は最低最悪。むしろ、嫌わない理由がない。

それでも……どうしてもいくつか疑問が残る。

普通の人間ならどう考えてもあの局面であんな行動を取ることはできない。

じゃあ、どうして彼女はあんな行動に走ったのか？

自分なりの理由づけを、ちょっとだけ探してみた。

まあ、回答としては『そもそも普通じゃなかった』ってことなんだけど。

そもそも、既に終わったことだから理由づけにも意味はない。

それでも、こういう末路があってもいいと思う。

別に書く必要はない、そんな感じの話。

それでは第十四話、はじまりはじまり♪

第十四話：私はあなたを怒れない

女は上書き。

男はコピー。

意味は察してください。

時折、おかしい夢を見ることがある。

明晰夢というやつだろうか。妙にはつきりしていて、内容もすっかりと覚えている奇妙な夢なのだが、なぜか幻想郷でしか見ることができない夢だ。

俺は丘の上にいる。ぼんやりと、下の景色を見下ろしている。

隣に座っているのは……とてもとても綺麗な、ドレス姿のお姫様。

「なあ……あんた、ここで一体なにをしているんだ？」

「……………」

そう言うと、彼女は困ったように笑った。

綺麗なお姫様は、目を伏せて下の景色を見つめていた。

俺たちが幻想郷と呼んでいた世界を、ただただ見つめていた。

「私は昔、過ちを犯しました」

「過ちを犯さない人間なんていない。過ちを犯さない人間がいたとしたら、そいつは前世でなにかとんでもない悪行をやらかしたってことだろう」

「……ええ、まさに私がそうなのでしょう」

彼女は空を見つめながら、ぼつりと……憎々しげに呟いた。

「それは、私の無知が招いた悪行です」

世間知らずのお姫様がいた。

彼女は『お姫様』というシステムに組み込まれた、自覚はないけ

どかわいそうな女の子で、国の中で一番強い男と結婚することを義務付けられた少女だった。

けれど、彼女はそれを異常だとも思わず、お姫様として生き続けた。

国という大きな存在の寵愛を受け、されど恋を知らずに生き続けた。

そして、とうとう運命の日が訪れた。

彼女と結婚する男は、とても高潔な騎士様で国の中じゃ最強の戦士だった。

彼女はそれを受け入れた。

当たり前だ。彼女はのために生まれ、そのために生きてきた。

彼と結婚するのが己の役割だと、なんの疑問も挟むことなく……

いや、そもそもなんにも知らないから彼を受け入れた。

しかし、運命はおかしな方向に転がっていく。

なぜ彼女だったのか、どうして彼女だったのか、それを知る術は存在しないが、彼女は『魔王』と呼ばれる存在にさらわれた。

さらわれて……どうなっただろう。

酷いことをされたわけじゃない。

待遇は悪くなかったように思う。

異形の魔王はそれでも優しくったし、よく話をしてくれた。

この世界は狂っていると、悲しそうに語っていた。

彼女をさらった魔王はそもそも魔王ですらなく。

ただ、婚約者に裏切られ、友人と国に裏切られた、その辺にいる普通の男だった。

絶望したまま山に迷い込み、気が付いたら異形の姿になっていたそう。

お姫様をさらったのも、自分を裏切った婚約者と、国に対する復讐だった。

しかし、彼は普通の人間だった。内心では己の不徳を自覚していた。

彼女が話を聞いてくれたことで……だいぶ、心の闇も晴れたそう

だ。

けれど、もうこの時には手遅れだった。

勇者が魔王を倒しにやってきた。

詳しいことはよく分からないが……本当は普通の男であるはずの魔王は殺され、年老いた勇者は力尽き、一行は一人の魔法使いを残して山を下った。

魔法使いは彼女の話をちゃんと聞いてくれたそう。

魔王ではなかった青年の死を悼んで泣き叫び、石を投げつけた彼女の話を……一から十まで、しっかり聞いてくれた。

魔王だった男へ墓にもならない墓を作り、魔法使いとお姫様は話し合った。

なにが間違っているのか？

どうしてこうなったのか？

自覚のなかったお姫様は、外の情報を得て自分の異常を知った。

自覚のなかった魔法使いは、お姫様の話から全ての異常を知った。

この世界は狂っていると、知ってしまった。

そもそも、なぜ魔王は存在するのか？

そもそも、なぜ勇者は存在するのか？

魔法使いは魔王の居城となる山を徹底的に調べ上げた。そもそも

……なぜこの山が存在しているのかという『原点』に立ち返って調査を始めた。

どこが狂っていて、なにがおかしくて、どこが悪いのか調べ始めた。

その山には魔法がかかっていたらしい。とんでもなく大規模で、何人もの魔法使いを犠牲にして初めて完成する魔法。国一番の魔法

の使い手と言われた彼でも断片しか調べ上げることはできなかったが……一つの結論に到達することはできた。

それは——どうしようもなく、最悪な結論だった。

魔法使いとお姫様にとって……その結論は、破滅を意味していた。

この国は『敵』を欲している。

ルクレチアという国の周囲には外敵がない。国の成り立ちがどうか、移民がなんたらだとか、様々な理由はあるがとにかく敵がない。隣国すらない。

だから敵を欲した。絶対悪を欲しがった。

人間は余裕があると余計なことを考える。自分のしていること、自分自身の存在意義、才能の有無、仕事の向き不向き……あるいは国の在り方そのもの。

小さな傷からダムが決壊するように、そんな些細な思考が最終的に国をひっくり返す事態に発展することがあることは、歴史を紐解いてみれば分かることだ。

そうでなくても、悪政を敷いた国の末路は大抵の場合自滅の末路を辿る。

しかし……いくら国の政治が悪かろうが、国の外に『敵』が存在していれば誰もがそちらに目を向ける。

敵を倒すために税を寄こせ。勇者様のために税を寄こせ。

そんなお題目を掲げたところで、誰も気にはしないだろう。

これは、そういう茶番だった。

姫も魔王も勇者も、そのために存在していた。

人心の安定。みんなのために用意された、都合のいい茶番劇の主人公。

あるいは……みんなのための『生贄』。

もしかしたら、それは魔法使いの狂言だったのかもしれない。

もしかしたら、狂った心が作りだした都合のいい解釈だったのか

もしれない。

しかし……姫も魔法使いも、それを唯一の現実だと信じ込んだ。彼女は口元を薄く緩める。

酷薄に、乾いた目で、丘の下景色を見つめて、吐き捨てるように言った。

私はなにもかも間違っていました。

けれど——あの憎しみだけは間違っていないと、今でも思います。

国を憎んだ。勇者を憎んだ。魔王を憎んだ。

自分を歪に育てた全てを憎んで、その破滅を願った。

それは、当たり前のことだったのかもしれない。

擁護も弁護もする気はないが、もしも自分の生が誰かによって作れたもので、しかもそれが狂っているもので、自分がその歪さを自覚してしまったら。

きつと——我慢はできないと思う。

魔法使いは王を殺し、全ての罪を勇者の仲間たちに着せた。

それでも彼は……勇者から剣を受け継ぎ、新しい勇者となった彼は……彼女の婚約者と認められた彼は、国から追われる身となっても戦い続けた。

彼女を信じて戦い続けた。

あの人を憎みました。お門違いと分かっていましたが、憎みました。

だって——あの人は私たちが得られなかったものを全て持っていたから。

あるいは、あの憎悪の中でそれだけは間違っていたのかもしれない

い。

それでも憎んだ。全てが憎かったから彼も憎んだ。ただ純粹に努力を積み重ねてきた青年を憎んだ。自分たちの醜さを棚上げて、純真な彼に憎悪を向けた。だから裏切った。最後の最後の仕上げとして、自分たちの死すらも復讐の糧とすることを選んで、最悪の方法で彼を裏切った。

そして、彼は——本当の魔王になってしまった。

胸糞悪い話だった。

正直、聞いて損したと言えなくもない。

誰かが誰かを恨んだり憎んだりする話なんて、酒の肴としても面白くない。

第一、我慢している人間の前でそうやって憎悪を吐きだすのはよくないと思う。

「それはやつちやったな。やつちやったもの。そういう男は裏切っちゃいかんよ」

「……ですよね。好きではありませんでしたけど」

むしろ、初対面から気に食わないと思ってました。

今なら自覚できることを語りながら、彼女は苦笑する。

「いえ……きつと、私は誰も好きじゃなかった。魔王の人も、魔法使いさんも、勇者の彼も、みんな私を好いてくれたけど……なぜ好かれているのか分からなかった」

「まあ、それってアイドルに告白するようなもんだからな」

「あいどる？」

「可愛い女の子に歌ったり踊ったりさせて、それを見世物にして野郎から金を取るんだ。お姫様とは立ち位置がちよいと違うが。……野郎が手の届かない『希少性』に価値を見出すのはいつの世も変わ

らないってことさ」

「……それって、私個人のことは見てくれてないってことですよ？」

「当たり前じゃん。遠くから見てる分には綺麗な花の、内面やらドロドロした毒の部分なんざ、見たくもないし知りたくもない。思い出は綺麗なままにしておきたいだろ」

「……………」

「ただ、一つだけ言えるのは……みんな真剣だったってことくらいだよ」

「え？」

彼女に向けて、にやりと口元を緩めてやる。

「みんな、真剣にあんたのことが好きだった」

真剣に愛を語る。告白する。

そんな真似は相当の覚悟がなきゃできるんじゃない。

「それは、お姫様だったあんたに向けたものだったかもしれないが……真剣にあんたのことを想っていたことは、評価してやってもいいと俺は思うがね」

「……でも、誰も『私』のことは見てくれなかった」

「そつだな」

衣装、立場、肩書き、財産などなど、巨大なものの前では個人など無視される。

それは高きに立つ者の義務で、彼女は知らない間にそれを背負わされた。

憎しみや狂気を知った今……それを不満に思うのは当然のことだろう。

自分を見てくれる人はどこにもいない。

それを不満に思うことは、人間として当然のことだろうと、俺は思う。

「じゃ、質問だ。あんたの好きな食べ物は何？」

「え？ えっと……その、ばあやの焼いたチェリーパイが一番好きでした」

「好きな飲み物は？」

「エリスの煎れてくれた紅茶です。あ、ワインも香りは好きです。

……はしたない真似をされると困るからって、あんまり飲ませてもらえませんでしたけど」

「趣味は？」

「庭師の方が整えてくれた、お庭を散歩することでした」

「動物とかは飼ってた？」

「いえ……本当は、子犬とか飼ってみたかったですけど」

「お、犬は俺も好きだな。猫も好きだ」

「はい！ 触るとふわふわしてて、とても可愛くて……ずっと飼ってみたかったですけど、汚いとか規律とか言われて……それがずっと不満で」

「あー……それは分かる。俺もずっと犬とか猫とか飼っちゃ駄目って言われてたよ」

「どうしてですか？」

「実家が和菓子屋でな、動物は不衛生なんだと」

「わがしや？」

「和菓子ってのは、あんたが食ったことのないお菓子で、和菓子屋ってのはそれを売る店のことだ。あんたが食ったことのあるお菓子は洋菓子と呼ばれる」

「どう違うんですか？」

「洋菓子は生地をクリームで包む。和菓子は餡子を生地で包む。食えば分かるよ」

「へえ……ぜひ食べてみたいです！」

「機会があつたらな」

言いながら、口元を緩めて彼女を見つめる。

「ほら、できたじゃん」

「え？」

「自分を見てくれないなら、積極的に『見せて』やればよかったんだよ。……まあ、それをお姫様だった頃のあんたに望むのは酷かもしれんが、今ならもうできるだろ？」

「……………えっと」

「当たり前障りのない話題でいいんだよ。好きなこと、嫌いなこと、今日の天気、家族構成やらその他諸々。……自分を見せ合うつてのは、わりと大事なことからしいからさ」

「……………」

「周囲の連中も男をからかう術くらいは教えておいてくれてもいいのにな？ ほら、あんたが言つてた勇者や魔法使いとかもうガッチガちな頭してそうじゃん。そういう男はからかいまくつて、顔を赤らめさせたり照れさせたりするのが楽しい。……必死になるのはいいけど、こつちがガチガチだと相手も緊張しちゃうしな」

「……………後の祭りですけどね」

「まあ、それも仕方ねえよ。悪行は悪行だ。どう足掻いても過去は覆らない。……だったら、これからを後悔しながら生きていくしかねーだろ」

「……………」

彼女は少しだけ啞然として、不意に苦笑した。

「……………あなたみたいな人が傍にいてくれたら……………少しは変わったんでしょか？」

「人生つてのは『たれば』を言い出したらきりがねーぞ」

「知ってます。……でも、私にはそれしかないから」

悲しそうな顔で、彼女は丘の下を見つめる。

「私は、この世界を見えています」

それは最初の疑問の回答。

要領を得ない回答だったが……………言いたいことはなんとなく分かつ

た。

「無知の知を知れ、だそうです。だからここで、転生せずに世界を見えています」

「……うつわ、最悪だろそれ。やっぱり俺は閻魔嫌いだ。ホント最悪だな、閻魔。情状酌量の余地とかなさずるでしょう？」

見てるだけ。

世界を見て、己の無知を知れ。

生まれてから死ぬまで世界を見続ける。

あるいは……死んでからも世界を見続ける。

それがどれだけの拷問かは、手塚治・作『火の鳥』を見れば分かることだ。

「仕方ありませんよ。……私はそれだけのことをしたんです」

「いや、認めないね。閻魔はともかく俺は認めない。大体、世界を憎んだりとかそんなもん、あんたの境遇を考えれば当然のことだろう」

「憎悪のままに、裏切ってはいけない人を……裏切りました」
「……………」

ああ、クソ閻魔のことだからここまで計算づくなのかもしれない。罰とは反省を促すものでなくては意味がない。

己の罪業を、悪行を認識させなければ意味がない。

ないんだけどさ……ないけどもね。ないのは分かってるが！

あるいは、俺以外の誰かだったら『当然の末路』だと言いそうな気がするが！

彼女が受け入れているとしても、部外者の俺は納得いきません！

「あの……えっと、私は大丈夫ですから」

「ハッ、そんな気遣いには負けないぞ！ 大体、さっきから聞いてりやどうしようもないことのオンパレードじゃん！ あんたのことを盲信した勇者とかそういう奴が悪いんじゃない！ 箱入りのお姫様にその期待はちょっと酷つてもんだよ！ 状況判断能力とかそういうことも考慮に入れてほしいと思ったりするわけだ！」

「でも、子供が剣で人を切り殺したりしたら、やっぱり罰は必要でしょう?」

「……………」

たとえば的確でグロいのは……突っ込んでいいところなんだろうか?

まあ、俺も分かっちゃいる。ただ腑に落ちないだけだ。

もちろん、裏切りは最悪だがロクに話をしたこともないお姫様をそこまで信じ込んで、裏切られたからって逆ギレするのは、いかなと思う。

いかんと思うが……もう終わったことなので、考えても意味はない。

彼女の話だけじゃ、どうしても彼女寄りの意見になっちまうし。

「まあ……あんたが納得してるんだったらいいけどさ……」

「それに、今はわりと充実してますよ。犬も飼ってますし、お庭も自分で作ってますし、最近は野生の鶏を家畜化したり……」

と、元お姫様は元気いっぱい、自分の近況を語り始める。

それはわりと自分勝手な話で、聞いてて少しだけ面白くて、自分のことを話すことにあまり慣れてないのが見え見えの語り口だったけど。

それでも……後悔しながら世界を見る彼女は、とても楽しそうだった。

「あ、そうだ。ゆいさんにもらった練り飴があったな。……食う?」

「ねりあめ? えっと、じゃあ、いただきま……ひひやうっ!」

あまりの甘さに目を丸くしていたのか、あるいは変な食感にびっくりしたのか。

それはともかく……亡霊のまま、彼女は今を楽しく生きていた。

裏切られた勇者様へ。

共感していた魔法使い様へ。

本当にごめんなさい。

基本的に、女って生き物は思い出すと精神的にきつっついことに対して心理的なガードを固めるために、思い出を『切り捨てる』ことが多々あります。

彼氏との思い出の写真とか躊躇なく捨てる人もいます。

もちろん、個人差はあります。引きずる女性もたくさんいます。

あるいは……野郎のように、思い出を抱えて生きていけるほど、女は強くないのかもしれませんが。

言葉で片付けられるほど甘くはないと思いますが、本当にごめんなさい。

彼女のことは許さなくてもいいと思います。

でも、今の彼女の幸せそうな笑顔を見て……当事者でもないくせに過去の悪行を責める勇氣は、俺にはありませんでした。

だから、ごめんなさい。

でも、正直お姫様だからってあんまり話したこともない女の子に心酔するのはどうかと本気で思うが……まあそれも仕方のないことなんだろう。

お姫様はアイドルで、国民含めて全員が心酔するような女の子だったんだから。

そういう風に、国が仕組んでいたんだから。仕方のないことだったんだろう。

もちろん……そう言われて、勇者様と魔法使い様が納得するわけもない。

ないのだが、もうそれは彼らにも彼女にも関係ないことだ。

過去は過去。今は今。

自分なりに楽しく過ごした方がいいと、俺は思う。

「ふひゃふひ？」

「慌てて食べない。ほら、口元がべたべたじゃねーかよ。これはも

「ちょっとこういう風に、練り練りして食べるのが正解だ」
駄菓子を食べ方指導なんぞをしながら、俺は心の中で手を合わせ
る。

彼女に真剣だった彼らが、ちゃんと来世で楽しくやれてるように、
祈っておこう。

柄にもなく……そんなことを思っていた。

願いは叶わない。

祈りは届かない。

裏切られるのが当たり前。

狂って憎んで絶望する。

そんなことは……分かり切っていたけども、祈ることにした。

第十四話：私はあなたを怒れない（後書き）

だがヨヨ、テメーは駄目だ。

と、いうわけで無知であることはそのものが罪であるという一話でした。

彼女に必要なだったのは、勇者でも姫でも魔王でもなく、退屈せずに充実した

日々だったと、ただそれだけが書きたかったわけですが。

……彼女と彼のことを引きずりまくっている、幻想編に出てくる彼のことを

思うと非常に心が痛いです。

ヤツのエピソードは最後の最後にしか描けないので、なお痛い。

まあ、それまでは我慢してもらおう。

と、いうわけで十四話でした。次回は本編を更新する予定。お楽しみに。

第十五話：たまには肉でも食べたいさ（前書き）

色々ありました。まあ、色々の内容はとりあえず置いておくとして、かなり久しぶりの更新になっちまいました。楽しみにしてた人には申し訳ないっす（謝）

かなり時間が経っちゃいましたけど、まあ……前回は読まなくても大丈夫……だと思う。たぶん！
と、いうわけで第十五話の始まり始まり♪

第十五話：たまには肉でも食べたいさ

色黒。アウトドア派。好青年。日本語がおかしい。

女好き。伊達眼鏡。パン作りが滅茶苦茶うまい。剣術サークル所属。

唐突に遊びに行こうと誘ってくる。放浪癖あり。ゆいさんの天敵その3くらい。

俺と同じ大学に所属している。

以上、後輩のわんこのにーちゃんのプロフィールである。

「YO、なべっち！ 遊ぼうZE！」

「うー！」

「……………」

唐突に家に押しかけて来たのは、れみりやを頭に乘せた色黒眼鏡。俺と同じ大学の同級生ではあるが、後輩のわんこのにーちゃんということもあり、俺もにーちゃんと呼んでいる。

そんな彼の趣味は旅行なのだが、ふらつとどこかに出かけてはふらつと帰ってくる。

大学の単位とかどうしてるんだろうとか思わなくもないが、色々人には言えない方法でなんとかしているとかいないとか。

久しぶりに見る顔になんとなく口元を緩めて、ついでに溜息を吐いた。

「なんつーか……相変わらず唐突だな、にーちゃんよ」

「HAHAHA！ 唐突なのはいつものことだろ、マイハニー」

「アンタのことはわりと好きだけど、少なくともハニーにはなりたくねえな。わんこはともかく他の女に背後から刺されそうだ。もしくは、ゆいさんを怒らせた時みたいに紅蓮の炎で焼かれそうだ」

ちなみにこの男、とんでもなく女癖が悪い。

ゆいさんに手を出そうとして、家ごと燃やされそうになったのもいい思い出。

「ちよつと胸を触っただけであそこまで怒るとはなア……」

「意外とゆいさんは身持ちが固いんだよ。……むしろ、セクハラし
として生きてたのが不思議なくらいだ」

「なるほど…… ツンデレってヤツだNA?」

「なんでもかんでもその言葉で片付けようとすんな」

どちらかと言うと、ヤンデレです。

まあ……化物よりはましだと思うけど。

「と、いうわけで遊ぼうZE! バイト先から肉もパク……もらっ
てきたし、ゲーム機もわんこの奴を黙ってこっそり……借りてきた
しな!」

「まあ……犯罪っぽい言葉が聞こえたのはスルーしておくけどさ……

…肉はともかく、ゲーム機くらい普通に借りてくればいいだろうが」

「れみりやがオレに懐いてから、あんまり口聞いてくれねーんだY
O」

「うー れみりやはおにーさんのおよめさんなんだぞ!」

「……そりゃ、なんつーか……ご愁傷様」

恋の力か、あるいはダイエットの成果か、以前見た時よりかなり
ほっそりしているれみりやは、恋する少女のように顔を紅潮させて
ちよつと幸せそうだった。

いや……相手がこのにーちゃんじゃなかったら素直に祝福できて
たと思うけど。

誠氏ね。氏ねじゃなくて死ね。という言葉に代表されるように、
女性関係にだらしない男に惚れてしまう女には同情を禁じ得ない。

それを考えると、まりさとれいむはわりと良い伴侶を見つけてい
るのかもしれない。

まあ、それはそれとして。

「肉はいいんだけどよ……どう見ても俺とにーちゃんじゃ食い切れ
ないだろ、これ」

にーちゃんが片手で軽々と持っているように見えるが、実際にはかなり大きなビニール袋の限界まで、肉がギッチギチに詰め込まれている。

「少なくとも見積もっても……二十キロは軽くある。」

「まあまあ、そこはなべっちの友達を総動員すりゃなんとかなるだろう?」

「ゆいさんと一緒に暮らしてる時点で、あんまり友達いねーってのは予想がつきそうなもんだろうが? どっちかつーと、にーちゃんの友達に連絡すべきじゃねーの?」

「いや……実は携帯をさくやに壊されちまってNA。連絡しようにもできねーんだ。『このどろぼうねこ!』ってゆっくりに怒鳴られたのは初めてだったな。H A H A H A!」

わりと洒落にならないことを笑いごとにできるのが、このにーちゃんのいい所だ。

「少しだけ、その笑顔が羨ましい。」

「ないものねだりはいつものことだけど……最近は少しばかりしんどい。」

「んん? なんか元気がねーNA? いつもだったらもうちょいキレのあるツツコミが入るところなのに」

「色々あつてな、ちよつと落ち込んでるんだよ」

「ふむ……なるほど。とりあえず、その男の住所と名前と電話番号を教えてくれ。この世の地獄つてものを魂に刻みつけてやるから」

「男じゃねえから! っていうか、顔がマジ過ぎて普通に引くわ!」

「と、まあその程度にやなべっちは大切に思われてる。なべっちが男で酷い目にあつたらゆいさんとかわんこも、似たり寄つたりなこと思うぞ?」

「……別に男で酷い目にあつたりはしねーよ。まず、相手にされねーもん」

「H A H A H A。ま、こういうのは縁だから急ぐことはない。……それにな、なべっちみたいなの女が好みって男は世界に腐るほどいる

んだぞ？」

「……………」

確かに、にーちゃんの言うことは正しいのかもしれない。

ゆいさんが好みの男もいれば、わんこが好みの男もいるだろう。千差万別に十人十色。男も女も貴賤なく、好みの幅は数多に存在する。

それでも……嘘付きの化物を好いてくれる男がいるかと言えば……きつと、そんな男はどこにもいないだろうけど。

俺がそんな風に思っていると、にーちゃんは人懐っこい笑顔を浮かべた。

「ま、それはそれとして遊ぼうZE」 せつかく音ゲーとか持ってきたことだし」

「うー！ れみりやはだんすがとつてもじょうずなんだぞー」
「……………」

まあ、退屈してたのは確かだし、いつまでも気落ちしているわけにもいかないし、気分転換もかねて気心の知れた友達と遊ぶのも悪くはない。

悪くはないんだが……。

「じゃ、私も混ぜてもらおうかな」

そんな殺意を振りまきながら、俺の同居人ことゆいさんはひよっこりと顔を出した。

さっきまで……具体的には今日の朝三時くらいまで多忙を極めていたのだが、ようやく仕事の方も一段落ついたらしい。

にーちゃんを見るまではとてもご機嫌だったのだが、今は不機嫌そうだ。

その目には、激烈な殺意が浮かんでいた。

「ねえ、下半身さん。前にちゃんと『セクハラがうつるからなべつちには近づかないでね』って言ったよね？ 死にたいのかな？」

かな？」

「なべっち。こーゆーネチネチした陰湿な女にはなっちゃんかぞ？」

「下半身さんには分からないかもしれないけど、女性は大体ネチネチしてるよ」

「いや、ネチネチしててもいいんだが、お前さんの場合は子供っぽい独占欲が強くていつか嫌われるんじゃないかと心配なんだYO。アレだぞ、人間関係で一番大切なのは相手を尊重し、愛する以上に今の自分をちゃんと認めてやることだからな？　あと、誰が下半身さんだこのクソアマ。オレは甘い言葉は吐くが手は出さん男だぞ」

「体臭のきつい男の人って、説教が長いから嫌だよねえ」

「きつくねーよ。ちゃんと氣イ使ってるわ。……っていつか、お前さんから洗ってない犬の匂いがするんだが、気のせいかな？」

「三日三晩の徹夜のせいだよコンチクショウ。これから風呂入って抱き枕と一緒に寝ようと思ったのに、邪魔が入ったので私はとても不機嫌です帰れ」

「む、それは悪かった。お詫びに肉と酒を奢ってやろう」

「発泡酒じゃ駄目だからね？」

「安心しろ。ちゃんとしたビアだからNA」

ゆいさんが一方的に嫌っているにしろ、なんだか妙な感じで仲良くなってしまうのもまたいつものことで。

まあ……喧嘩するほど仲がいいとも言っわけだし。

愛情の反対は憎悪じゃない。方向性が違うだけで、相手に関心を持っているという事実においては、実は同じ感情だったりする。

愛情や憎悪の反対は、無関心。

そういう意味では、ゆいさんとにーちゃんはわりといいコンビなのかもしれない。

「そーいえば、わんこちゃんどうしてる？　彼氏でもできた？」

「できる気配がねーNA。アンタ、誰かい男紹介してくれよ」

「姉貴の職場の若いツバメなら紹介できるよ」

小学校教師の職場にいる若いツバメなんて、当然ランドセルを担いだあれやこれやしかいるわけもなく。

悪意たっぷりのゆいさんの言葉に突っ込む余裕もなく、俺はこっそり溜息を吐いたのだった。

最近、なべっちの様子がおかしい。

なにかといえば溜息ばかり吐いているし、一日中ぼーっとしながらおでん屋台を見つめては溜息を吐いているし、ゆっきりの世話をする時間も増えた。

色々な国の料理を試しては失敗して、成功すると素直に喜んだりもする。

溜息を吐く時間も増えたけど、笑う時間もそれなりに増えた。

なべっちがそんな感じなので……どうすればいいのか私は悩んでいる。

サクサクとじゃがいもの皮を剥きながら、私はゆっくりと溜息を吐いた。

「あの……ゆいさん。皮を剥いたじゃがいもがそろそろ八個目なんだが、それ全部食うつもりか？」

五歳児のくせに慣れた手つきで皮剥きを手伝ってくれているサンちゃんは、口元を引きつらせながら私の手元を見ていた。

おっと……どうやら、またやってしまったらしい。

私は考え事をするについつい料理を作り過ぎてしまう。

「ま、いいか。いざとなったらあの色黒に生のまま夕食として出せばいいし」

「いや……さすがにそれはまずいと思う」

「いいのよ。あのニーサンは金にだらしないし女にだらしないし、おまけに妹を独り家に待たせては世界中のあっちこっちを放浪してるところじゃない野郎なんだから」

「……………ふむ」

サンちゃんは少し首をかしげてから、ほんの少しだけ溜息を吐いた。

「なんというか……ゆいさんは結局、なべっちのことが心配なだけなんだよな？」

「うん、そうだよ」

「あたしはその『にーちゃん』って男のことは知らないけど、なべっちの友達なんだから少しは信用してやってもいいんじゃないか？」

「信用できないから、こうして愚痴ってるんじゃない。……それに、なべっちって男運がちょっと微妙だし」

「……男運に関してはゆいさんも似たり寄ったりだと思う」

「大丈夫よ。私はなべっちとサンちゃんと一緒にこの家で一生幸せに暮らすから！」

「いや、なべっちはともかく、あたしはあと十五年くらいしか付き合えないから」

「な……なんですって！？ 男？ もうその歳で男ができたと言うの？ 許せん！」

「違うから。二十歳になったら旅に出る。世界中を回る予定だし、現地で結婚とかしちゃうかもしれないから、二度と戻らないかもしれないな」

「……あのさ、五歳でその人生設計はどうかと思うよ？ もっと夢は大きく健やかに子供らしく生きた方が後々楽しいってばーちゃんも言ってた」

「海賊王に俺はなる！」

「アウトアウトアウトー！ そこまで大きい夢じゃなくていいから！」

「安心しな。世界中の空をあたしのモノにしてくるよ！」

「それ絶対に死亡フラグでしょ！」

「止めてくれるなよ。……あたしには倒さなきゃいけない奴がいるんだ」

「うわ、ものすごく格好いいけど保護者としてそれは見過ごせない

かな！」

なべつちがいなくて、お子様じゃなかったら本当に惚れていたかもしれない。

サンちゃんはじゃがいもの皮を剥く手を休めて、にやりと口元を緩めた。

「ま、ゆいさんの人生だからあたしは何も言わないけど……いつかどこか、近い将来かあるいは遠い未来に、大人として覚悟を決めなきゃいけない時は来ると思うぞ」

「……私って大人なのかな……」

「大人だよ」

きつぱりと断言して、サンちゃんは私を見つめた。

「だから、なべつちのことを見守るのも……大人の仕事だろうさ」
まるで子供らしくないことを言いながら、サンちゃんは笑う。
いや、彼女も多分大人なのだろう。

どんな人間が大人なのかは人によって違うと思うけど、少なくとも……今ここで私の手伝いをしている自称五歳児は、間違いなく大人だと断言できる。

そして……付け加えるなら。

「ライライ、芋ばっかそんなに剥いちまってどうすんだYO？」

私の後ろで私たちを見つめていたこの色黒の男も、間違いなく大人なのだろう。

私はゆっくりと溜息を吐き、じゃがいもをバーベキューの串に刺して、自称女にだらしのない男に向かって差し出した。

「はい、あんたの分。お腹一杯食べていってね」

「……さすがに、これはひどくねーか？」

「じゃがいもを馬鹿にするの？ ドイツ国民全員を敵に回すとは……
…勇氣あるわね」

「ドイツの方々も生じゃ食わんだろ！」

「日本人がお米を生で食べないからって、そう思い込むのは偏見じゃないかしら？ それとも、女性ならなんでも食べちゃうニーサン

には関係ないかな」

「食わねーよ。オレは気に入った女にしか声はかけない主義だ。…
…そういう意味では、ゆいさんは全くさっぱりこれっぽっちも氣に入っていない。あと、ニーサン言うな」

「あつはつはつは… 私たち大人だけど、そろそろ決着付けようとか思わない？」

「H A H A H A …… 奇遇だな。オレもそう思っていたところだ」

私は包丁を抜き放つ。

ニーサンはおたまにボウルを持ち、私に向かって振り上げた。

「いざ……」

「尋常に——！」

かくて、大人の大人による大人げない戦いは幕を開けたのだった。

もつきゅもつきゅと焼き肉を食べつつ、俺は大人げない争いを見つめていた。

「と、いうわけでポテトグラタン完成！ ハフハフしながら食べる
がいい！」

「ハッ！ そんなメニューがオレのあつあつポテトもちに敵うはず
がないだろう！」

「ならば定番！ 自然の味をフルに使ったじゃがバターでどうっ！
？」

「それならばこちらは変化球。じゃがいものニョッキDA！」

「じゃがいもと帆立の炊き込みご飯！」

「卵とじコロツケ！」

カードバトル並にポンポン出てくる料理の数々。

もちろん、今日の夕飯は焼き肉であり、もう既にそれなりの量を
焼いちゃっているのだが……二人はそんなことは忘れ去っているら
しい。

「なあ、なべっち……これ、どーすんだ？」

「どうするって言われても、どうしようもねえな」

二人はわりと似た者同士で意地っ張り。相手が負けを認めるまで、あるいは自分のレシビが尽きるまで、やめようとは思わないだろう。

サンと二人でもきゅもきゅと焼き肉を頬張って、俺だけはビールを飲む。

ん、やっぱり焼き肉にはビールだ。人によって好みが分かれるところだが、俺はビールの味はわりと嫌いじゃない。

煙草は……サンがいるのでやめておこう。

「ま、肉はもう焼いちゃってるから仕方ないとして、じゃがいも料理の方はテキストに屋台で売ることもできるしな。日持ちしないのは食べちゃえばいいし」

「……そんな呑気なこと言ってられる量じゃないと思うが……」

「なに、『みんな』で食べればなんとか食べ切れないこともないだろう」

携帯電話を取り出して、とりあえず見知った顔に電話をかける。

『……はい、もしもし?』

「ああ、もしもしわんこか? いきなりで悪いんだけどさ、肉食う?」

『先輩の奢りですか? 電話もそうですけど……珍しいですね』

「ま、そんなこともあるさ。食うならウチまで来てくれ。今焼いてるから」

『はい。それじゃあ三十分ほどお待ちください』

そう言い残して、電話は切れた。

というか……あのにーちゃん、実の妹に肉を分けてやらんとはどういうことか。

アレか。兄妹だから気恥ずかしいとか、あるいは妹を太らせたくないとかそういう理由なのか。どちらにしるシスコンなのは変わらないわけだが。

まあ……それはともかく。

後輩の次は、美少女二ートに電話をかけることにする。

ゲームの途中、打ち解けてきた頃合で地が出てちよつとミスツたりすると舌うちしちやつたりする駄目大人ではあるが、人間性は肉を食う量には関係ないので、きつと戦力になってくれることだろう。

『はい』

「あ、てんさん？ 今暇か？」

『暇じゃないわ。私は今レアドロップを狙うのに必死で……』

「んー……じゃあ仕方ないか。肉でも奢ろうかと思っただけど、それは次の機会に……」

『待ちなさい。そういうことなら話は別よ。今すぐ行くから私の分も残しなさい』

「はいはい、お待ちしてます。なんなら自慢の彼氏も連れて来ていぞ」

『嫌』

プチッという音が響くと同時に、通話は途切れた。

さて、これである程度の戦力は確保できた。プラス二人でどうにかなるかは分からないが、いないよりはずっとましだろう。

あとはゆいさんの姉貴くらいしか友達はいないが、ゆいさんが心底嫌がりそうなので、そっちはやめておこう。

「んー……やっぱり、友達が少ないってのはちよいとへこむな」

「気にすることはないだろう。長い付き合いのできないたくさんの友人よりも、死ぬまで一緒に酒を飲める親友がいる方がいい」

「……そうだな」

「まあ、あたしは酒が飲める年齢までこつちにいるかは微妙だけどな……」

こつち。今、ここにあるこの世界。

あつち。俺の商売所。屋台を引く場所。幻想郷。

少し寂しげに目を伏せるサンの頭をポンと叩いて、俺は口元を緩めた。

「馬鹿言つな。永遠の別れなんて、それこそ都合主義の物語でもない限りあるはずないだろうが。サンが幻想郷に戻りたいんだった

らそれでもいい。……でもな、一年に一回、盆でも正月でもなんでもいいや……絶対に、顔を見に行くからな」

「……なべっち」

「その時には、一緒に酒でも飲もうぜ。俺とゆいさんとサンで、旦那の愚痴でも言い合いながら、今と同じようにおしゃべりでもすりやいい」

「……………」

サンは少しだけ顔を伏せて、俯いたまま口を開く。

「……うん、分かった。ありがとう」

「じゃ、今日の所は肉食おうぜ。俺も明日からまた頑張るから、サンも頑張れ」

「……ああ」

嬉しそうに微笑みながら、サンはゆっくりと頷いた。

その笑顔を見つめながら、俺も笑顔を返した。

なべっちに、なにがあつたのかは分からない。

あの雨の日に、なべっちがなにを思っていたのか、私には分からない。

それでも……彼女は、自分自身で選んだ。

自分がやり続けてきたことを、続けることを、選択した。

「ゆいさん」

「なに？」

「色々考えたけど、もうちょっと頑張ってみる。おでん屋台引つ張って、俺になにができるのか、なにがしたいのか……考えてみたいんだ」

「分かった。なべっちがそうしたいんだったら、そうすればいいと思うよ」

「ありがとう」

なべっちは、軽く笑った。

いつものような皮肉げな笑みでもなく、鬼のような笑いでもなく、それは見る人に安心を与える、ごくごく普通で当たり前な。

女の子のような、可愛い笑顔だった。

第十五話：たまには肉でも食べたいさ（後書き）

次回は未定だけど、多分炭鉱か眼帯のお話。

本編の更新はその後かなあとか思ったり思わなかったり。

ま、ちよいと気楽にやっていきまさあw

第十六話：空を自由に飛びたいな（前書き）

はい、タケ・プター！

と、まあ分かりやすいボケはさておき、お待たせしました第十六話です。

今回の話から数話はちよいと異色。ゲームからちよいちよいとキャラを

お借りしての進行になります。

え？ こんなキャラ知らない？

そういう時はなにも言わずに東方LALの動画を追い続けましょう。いつか『ああ、そういう意味だったんだな』と思う時がきつと来ます。

ではでは、第十六話の始まり始まり♪

第十六話：空を自由に飛びたいな

階級差別不平等。

それらをひっくり返すには運が必要だ。

努力するのは、その運を引き寄せる手段の一つなんだよ。

人は、誰かを変えることはできない。

影響を与えることくらいはできる。でも、最終的に変わることを決めるのは、その人自身の意志に他ならない。

変えられない自分なんていないし、変わらない自分もない。

そんなことは信じられない。俺はそう言ったけど、ゆいさんは真面目だった。

『信じようが信じまいが、なべっちは変わってるんだよ。今も、明日も、十年後も』

「じゃあ、ゆいさんも変わってるのかよ？」

『うん、そうだよ。目に見えてはいないけど、私もバージョンアップしていますよ？』

「……そうかな？」

『そう思いたいだけかもしれないけど、そう思うことに意味があるってね。……まあ、私のことはともかく、なべっちはちゃんと変わってるよ。多分、良い方向にね』

「それこそ……信じられないよ」

『なべっちはさ、ちょっと前まではなんでも殺せる女の子だったでしょ？』

「……………」

『だから、ゆっくりに対して冷たかった。いつでも殺せるから、殺した時に心の痛みを感じないようにするために、ゆっくりに冷たくしていたんだよ』

「……………」

『でもね……いつでも殺せるってことは、いつでも殺さなくてもいいし、いつでも許していいってことでもあるんだよ。なべっちにながったのかは分からないけど……それは私の理解を越えちゃうけど……なべっちは、誰も恨まなくてもいいんだよ。ゆつくりを憎んでもいいし、ゆつくりと一緒にゆつくりしてもいいんだから』

「……でも、俺は、殺したよ」

『なら、私も殺してるね。鶏肉も豚肉も牛肉も野菜も、これまでたくさん食べたもの』

「……………え？」

『勘違いしちゃ駄目だよ、なべっち。私たちは殺す。殺して食べる。たくさん命をいただいて、私たちはここに存在しているの。残虐に殺すのが駄目？ 命を弄ぶのも駄目？ そんなものは殺戮者で捕食者である《私たち》の都合でしょ。ただの感覚、個人的な生理的嫌悪の問題。もつとざっくり言っちゃえばね……どんな経過を辿るうとも、私たちがなにかを殺しているという事実是不変』

「俺は……そんな風には考えられないよ」

『うん、知ってる。なべっちはそういう人だから。……だから好きなんだよ？』

「……分からないよ。俺には、ゆいさんの考えが分からない」

『それでいいんだよ。他人のことなんて、分かってもいいし、分からなくてもいい。……でも、自分のことは分かってあげてね』

「自分のこと？」

『そう……だって、なべっちはいつだって——』

人には人のルールがあり、妖怪には妖怪のルールがある。

例えば、紅魔館。あそこは彼女たちの家であり、彼女たちの住処

であり、同時に彼女たちのルールが適用される、彼女たちの社会だとも言える。

まあ、堅苦しく考えることはない。郷に入っては郷に従えということだ。

ルールに従えば迫害されるようなことはほとんどない。もちろん、ルールを把握する前に迫害されるようなことは……きっと、どこにでもあるだろうが。

そんな堅苦しいことを思っていた矢先に事件は起こった。

「ふぎやあああああああああああああつ!？」

頭から熱湯を浴びせかけられたような……そんな衝撃を受けた。慌てて上着を脱ぎ捨てて地面を転がり、熱さが収まった所で体を起こす。

幸いなことに軽い火傷しかしていないようだったが、うつかり外に投げ捨ててしまった上着は砂まみれになっていたし、注文したコーヒーは台無しになった。

「ああつ! すみません、お客様! 大丈夫ですか!？」

慌てて声をかけてきたのは、黒い翼の生えた大きなウェイトレスさん。

驚きのあまり表現が曖昧になってしまったが『大きな』とは背丈ではなく、女性みんなについている、男性みんなに愛される胸部パーツのことである。

まあ……ウェイトレスの胸の話はともかく……。

頬を伝うコーヒーの水滴を払いながら、俺はゆっくりと立ち上がった。

「なあ、OPPAIさん」

「え? えつと……あの、あたしには黒川夏樹という名前が……」

「じゃあ、ツッパイ夏樹ちゃん。一つ聞きたいんだが、天狗ってナモノは頭から熱湯をぶちまけられても平気な生き物なのか?」

「……あ……えっと、その……普通に火傷しちゃいますけど……」
色々と言いたいことはあったようだが、彼女は疑問にだけは答え
てくれた。

俺はこくこくと頷いて、ゆっくりと右手を差し出した。

「うんうん、話は分かった。じゃあ……後は分かるな？」

「え？」

「いやいや……俺ってばアレ、大人だからさ。示談というか政治的
な解決を望む方向にしようと思うんだよ。夏樹ちゃんもこのバイ
トとかやめたくないだろ？」

うむ、実に分かりやすい解決方法。悪人の手法と言えなくもない
けど、限界まで熱されたコーヒーを頭からぶちまけられれば、誰だ
って俺の気持ちが分かると思う。

まあ……野郎はまず彼女の胸元に目が行くだろうが、俺は女なの
で関係ない。

夏樹ちゃんは少しだけ考えて、やがてポンと手を打って俺の手に
あるものを乗せた。

「なおり草です。怪我によく効くんですよ」

なおり草。幻想郷のあちらこちらに群生している草。

滋養強壮に優れ、食用や薬用に使われる。夏樹ちゃんが言うよう
に、怪我に良く効く。言わずもがな、火傷にも良く効く。

ぶつちやけると、雑草なのだが。

「……………」

「……あ、あの、お客様？ なんだかちよつと目が怖い……」

「いいや……おねーさんは怒ってなんかいないヨ」

「あれ？ お客様って女性の方だったんですか？」

あらら、軽やかに侮辱されたゾ？ ぶつ殺されたいのかな？

普通に聞いたら悪意以外の何者でもない天然丸出しの言葉が堪忍
袋を崩壊寸前に追い込んだが、理性だけでぎりぎり踏み止まる。

落ち着け……男に間違われるなんていつものことだし、頭からコ
ーヒーくらいどつてことないだろう。怒った時のゆいさんなんて

熱したフライパンとか、芝刈り機（死ばかり機と訳しても可）とか
平気な顔で振り回すじゃねえか。

頑張れ、俺！

大人だぞ、俺！

「すみません。私、てつきりオカマの方かと……」

「このおっぱい天狗！ 空気抵抗に負けて墜落しろ！」

あまりの暴言に耐え切れず、ありきたりな悪口しか言えなかった。
なんだろうね……なんでこんなに野郎に間違われるんだろうね。

胸もあるし、下着もつけてるのにこの有様だよ、コンチクショウ。

まあ……もういいや。とりあえず、もらうものもらってさっさと
帰ろう。

「あのさ、君がどう考えてるのは知らんけど、とりあえず服の弁
償代と火傷の慰謝料くらいは払ってもらわないと困るんだよ。事と
場合によっちゃ、出る所に出てもらうことになりかねないし」

「お金があつたら人里でバイトなんてしてません」

「この際金じゃなくてもいいよ。ほら……翡翠の取れそうな川辺と
か、希少金属の鉱脈とか、ブン屋に売れそうなネタとか、そういう
の」

「売れそうなネタがあるんだつたら、自分で使いますよう……」

「ってことは、君も新聞を書いてるってことか？」

「……………はい。一応、あっちの本棚の方に置かせてもらって
ます」

「ああ、あのクソつまんねえ新聞か」

「ふえええええええええええええええええええええええん！」

図星だったのか、いきなりマジ泣きする夏樹ちゃんだった。

フォローしたい所ではあったけど、彼女の新聞は冗談抜きでつま
らないので、フォローの言葉すら出てこない。

新聞を持ち出して反省点を列挙するのもいいが……ぶっちゃけ、
発行しない方がみんなが幸せになれる程度の内容なので、いかにと
もし難い。

「そもそもさ、人里で発行するんだったら身内ネタはいかんよ。それから、読者のことをあんまり考えてねえだろ？ スキャンダルっぽくしたいのは分かるけど、見出しの文字がピンク色ってのも良くないし、画像はブレまくってるし、最終的に記事の内容がよく分からなくなっちゃってるし、これなら寺小屋のガキ共が書く子供新聞の方がもっと楽しく読める。あ、新聞の最後についてる四コマ漫画だけはものすごく面白かった」

「……………」

へんじがない。ただのしかばねのようだ。

作ったものを真剣に批評されると、人はなにも言えなくなってしまう。

夏樹ちゃんは、おでんに駄目出しされた時の俺と似たような感じになっていた。

「あー……すまん」

「いえ、いいんです。あたしの新聞がつまらないのは分かってましたから……文先輩やはたて先輩みたいに面白い新聞が書けてたら、人里でアルバイトとかしてませんし」

「……………」

いや、はたてちゃんの書く花果子念報は言うほど面白くねーぞ？ そんなツツコミが心を横切ったが、ここはあえて黙っておく。

どこかで見たような記事が満載ではあるが、花果子念報は夏樹ちゃんの書く新聞よりは面白い方だ。

人間にも配布しているのに、記事になっているのは身内ネタばかり。

身内というか同種族。天狗の官僚、大天狗とかなんとかの私生活における色々。

「どうせなら、色恋沙汰のスクヤンダルくらいにしておけば面白そうだけだな」

「色恋沙汰？」

「他の妖怪は知ったこっちゃないが、少なくとも天狗と人間に限定

すれば、食欲と性欲は切っても切り離せないものだろ？　そういうものの方が興味をそそりやすいんだよ。人里の美味しい店やら市場を専門に取り扱ってる新聞もあるし、幻想郷の有名人が誰かにご執心とか、そういう記事があったら読みたくなるだろ？」

そんな記事を書いた文ちゃんは、某巫女に追いかけまわされる羽目になったが。

そんな記事を書いた文ちゃんは、某魔女に追いかけまわされる羽目になったが。

そんな記事を書いた文ちゃんは、某メイドに追いかけまわされる羽目になったが。

博麗神社で休憩をしていると、爆発オチが日常茶飯事になるから恐ろしい。

と……そこまで言うてから夏樹ちゃんの方を見ると、彼女は可愛らしく頬を膨らませていた。

子供っぽいというか、分かりやすいというか。

「そういうのは、あんまり好きじゃありません……」

「気持ちは分かるけど、新聞を生業にしたいんだったら、ある程度の面白さは追及しねーと部数は伸びないぞ？　新聞が売れてりゃこんな所で俺にコーヒーをぶちまけなくてもよかったわけだし」

「……………うつつ」

痛い所を突かれたのか、夏樹ちゃんは涙目になった。

さてさて、ここまで関わってしまったからには放置するのも後味が悪い。かといって、上着を台無しにされた無念はなんとか晴らしたいところだ。

それに、天狗の私生活とやらにも少々興味がある。

「ま、今のままバイト生活のその日暮らしがいいんだったら無理にとは言わんが、ここらで一発面白い新聞が書きたいんだったら手を貸してやるっ」

「……私、お金持ってませんよ？」

「お代は力ネでもモノでもなんでもいい。価値のあるなしは俺が判

断するし、君が俺のことをクソの役にも立たないと判断したんだっ
たら、お代は要らないよ」

「……………」

夏樹ちゃんは腕組をして、五分ほど長々と考えた後、ゆっくりと
溜息を吐いた。

「分かりました。よろしくお願いします」

「ん、了解。精々役に立ってみせるさ」

俺がにやりと笑うと、夏樹ちゃんはなぜか溜息を吐いた。

「……商売が上手いって羨ましいです。どうやったら、そんなにふ
てぶてしくなれるんですか？」

「はっはっは、商売は別にして後で絶対にしばらくからな、夏樹ちゃ
ん」

多分悪意はなく、他意もなく。

それでも、天然ってのはわりとひどい存在だと思う今日この頃だ
った。

で、個人的にはこれから空を飛んで天狗の里にでも行くのかと思
ってわくわくしていたのだが、残念ながら世の中そんなに甘くはな
い。

夏樹ちゃんが向かったのは、ちよつと贅沢な場所に宿泊したい時
なんかに使われる、人里の中でもわりと大きなお宿だった。

「あたしが手に入れた情報によると、あの宿に大天狗の秘書が宿泊
しているそうです」

「大天狗？」

「詳しいことは省きますけど、天狗の中でもかなり偉い人物です。
基本的には、優秀な人物が試験によって抜擢されて役職に就くこ
とになります」

「……ふうん」

そりゃ、なんとも……面倒そうな話だ。

厳しい人間であっても、自分の子には甘い奴なんざ腐るほどいる。縁故で自分の跡を継がせたいと思う奴だっているだろう。試験に受かった奴でも、現実問題に直面して心を折る奴だっているだろうし、甘い汁吸いたさに足を踏み外す奴だっている。

成果主義、人材優先と言えば聞こえはいいが、生物というモノは理屈だけで動けやしない。不満が爆発していかないようなので、現状では上手く機能しているようだが。

まあ、俺とは関係のない話なのでどうでもいいことだ。

……いや、どうでもいいと思ひ込みただけかもしれないけど。

「面倒だけど……羨ましい話だよな」

「へ？」

「器じゃない奴がその役職に就いても、周囲を含めて全部が不幸になるからな」

腕っ節の弱い奴が勇者になっても、城を出た途端に殺される。

綺麗でも可憐でもなく、世界を憎んでいる人間はお姫様にはなれない。

主人公のライバルは、決して主人公に勝つてはいけなない。

そういうことだ。

「ま、それはともかく……これからどうするつもりだったんだ？」

「その大天狗様は、あたしがアルバイトをしている喫茶店のコーヒーをお気に入りで、よく配達を頼まれているそうなので……」

「配達ついでに取材をするってことか？」

「ええ。そのためにあの喫茶店でアルバイトを始めたんですから」
そう言つて、夏樹ちゃんは笑った。

もちろん、門前払いになる可能性の方が高いが、力づくとか強行取材とか、そういう発想がないのは好感が持てる。

もつとも……『あちら』はそう思っているかは微妙な所だが。

「夏樹ちゃん。もう一つ聞いていいか？」

「なんですか？」

「その大天狗って、どんな奴だ？」

「白鳥由美さんです。若いのに大天狗を務めてて、天狗の里じゃ今ものすごく注目を集めているんですよ！」

「……夏樹ちゃん。一つだけいいことを教えてやろう」

「はい？」

「若くて優秀な奴には、大体的場合、古株の経験値を凌駕する『裏』がある」

ゆっくりと立ち上がり、後ろを振り向く。

まず、目に入っただのは白銀の切っ先。綺麗な文様が刻まれた純白の槍斧。

俗に言う、ハルバードという名の武器。通常の槍より重量はあるが、槍の先についた斧、あるいは鉤によって相手を叩く、引っかけるといった使用方法があり、馬上の敵を引きずり下ろすことができる。たりもする。

言うまでもないが……こんな街中で振り回す武器ではない。

付け加えるなら、ハルバードという武器は、扱いが難しく使い手を選ぶ。少なくとも、達人レベルの使い手じゃなきゃ、こんな重たいものは振れやしない。

少なくとも、二十歳そこそこの女性が片手で扱っちゃいけない武器なのだ。

「……街中での抜刀は感心しねーな」

「あら、あなたにだけは言われたくないと思うんだけど。……とりあえず、ポケットから手を出して両手を上げてくれない？ もちろん、今握っているものからは手を離して」

ハルバードは怖いので、ポケットに入れておいたパチンコ玉からは手を離し、ポケットから手を出して、両手を上げた。

そこで、俺はようやく背後に立っていた人物を直視した。

そこには、真っ白な誰かが立っていた。

髪も翼も肌も白く、瞳の色は赤。血の色よりは鮮やかで、ルビー

よりは控え目な、肌の色と対極を成す、わりと派手な色だった。

一瞬呆気に取りられて……少しだけ息を呑んだ。

「なるほど……夏樹ちゃんみたいなのに目をつけられるわけだ」

「どういう意味？」

「中身はどうか知らないが、少なくとも外見は息を呑むほど綺麗だからな」

「あら、お世辞が上手いのね」

「一から十まで紛れもない本音だけど……まあ、いいや」

目を逸らしつつ、ゆっくりと息を吸って心を落ち着かせる。

平常心を保ったところで、それが通用する相手かは微妙な所だった。

彼女はにっこりと笑って……俺の顔を覗き込む。

「で、あなたは何者？」

「通りすがりのおでん屋さんだ。こっちは友達で鉄腕アルバイターの黒木奈津子」

「軽やかな嘘をどうもありがとう。……でも、私って嘘とか腹の探り合いとか苦手だからさ、ざくばらんに話してくれると嬉しいかな？」

「話さないとどうなるんだ？」

「腕をへし折るわ」

「……………」

わあ、おっかねえ。

笑顔でそういうことを平気で言えるあたり、ものすごくおっかない。

俺はゆっくりと溜息を吐いて、両手を上げながら口元を緩めた。

「俺がおでん屋って所までは本当です。彼女の方は新聞記者で、名前は黒川夏樹。面白い新聞を書きたいそうなので、面白半分で協力しています」

「なるほどね……。まあ、話は分かったけど敬語はやめてくれない？ 堅苦しいのは嫌いでね」

「……………」

堅苦しいのが苦手ではなく、嫌い。

それが生来の気質によるものなのか、あるいは普段から堅苦しい世界で暮らしているからこそその反動なのか、あるいはその両方なのか。

俺には分からなかったが、気持ちはなんとなく分かった。

「なら、敬語をやめる代わりにその重苦しいモノを引いてくれませんか？　っていうかなんでハルバードなんて持ち歩いてんですか」「護身用ってところかな。烏天狗は小さい頃に、護身と教育を兼ねて長物の扱いを叩き込まれるの。で、興味がある奴はある程度成長しても訓練は続けてるってわけ」

興味のあるなしでハルバードを扱っちゃうのはどうかと思うけど、それはまあ妖怪だからだろう。人間とはそもそも地力が違う。

剣ではなく槍なのも、空を飛べるためだろう。いざ戦闘となれば地上に降りて剣で戦うよりも、上空から槍を降らせた方が百倍ほど手っ取り早い。

……ともあれ、天狗らしい天狗である某ブン屋は、やっぱり規格外ってことだろう。

溜息混じりに苦笑して、目の前の白天狗を見つめて口元を緩める。「タメ口を聞く前に……一つだけ聞いていいですか？」

「なに？」

「あなたは……白鳥由美さんは、頭を下げられるのはお嫌いですか？」

「……………」

白天狗こと……白鳥由美さんは、少しだけ驚いたような表情を浮かべる。

そして、次の瞬間には、楽しそうに笑っていた。

「多分、あなたが思っている通りよ」

「……まあ、そりゃそうか」

「私からも一ついいかしら？」

「なんだ？」

「ちよつとお茶しない？」

まるで普通の女の子のように、彼女はそんなことを言った。

えらからうがえらくなからうが、女の子の本質は似たようなものだ。

お茶とおしゃべりが大好きで、ついでに言えば買い物も好きだ。

喫茶店でいつものコーヒーを呑むのも悪くはないが、屋台にゆいさんからもらった各種お茶の詰め合わせがあつたので、せっくなので呑んでもらうことにした。

招かれた宿の部屋は、由美の身分を考えても質素な部屋だった。

「ん……いい香りね。これ、なんのお茶？」

「幻想郷にやあんまり出回ってないが、ウーロン茶ってお茶だ」

「……どうやって作るの？」

「製法は知らない。俺も秘密のルートを使って調達してるだけだしなあ」

「ふむ……ああ、そういえばこの前、西の人里の方で急激な売上の停止があつてさ、当てにしていた収入がいくつかふいになっちゃったんだけど、なにか知らない？」

なにか勘付いているのか、由美さんの目が輝いている。

彼女の分野がなんなのかは分からないが、世情に聡くなくては犬天狗のような役職は務まらないのだろう。

かといって、俺が正直に答えるとは限らないのだが。

「いや、さっぱりだな。それはそうと、最近なぜか幻想郷全体で金属の値段がチマチマ上がってるんだが、裏で天狗が噛んでたりしないのか？」

「噛んでいるのは、私と私の優秀な部下たちだけ。今はそうでもないけど、技術の発展を見る限りじゃ今後成長が望めそうだから、今のうちに抑えておこうってだけよ」

「……なるほどな」

「で、売買を停止させたのはなんで？ その直後に事件が発生したってあたりが……なんていうか、きな臭くてね。情報はできる限り知っておきたいのよ」

既になんらかの確証を掴んでいるのか、由美はやたら強硬だった。仕方なく、溜息混じりに少しだけネタばれをする。

「俺には関係ないしなんにもしちゃいない。単に、パワーバランスを崩しかねない商売の割り込みがあったから、全員で足並み揃えて取引を停止させたただけだろ」

「……ふむふむ。ところで、優秀な上司と可愛い同僚は欲しくない？」

「俺は家族と一緒に今日と明日を大過なく過ごせりゃいい。名誉も野望も要らないよ。……由美こそ、平凡な日常と幸せな日々は要らないか？ 今なら焼き肉が食える程度の金で、世にも稀に見る素晴らしい野郎を紹介してやろう」

「ふうん……まさか、自分とか言わないわよね？」

「なんかもう毎度毎度訂正すんのもめんどいが、俺は女だ」

「嘘っ!？」

「嘘じゃねーよ！ つーか、俺のどこが野郎に見える!？ 胸もあるし髭も生えてねーし喉仏だって出てねえだろうが!」

「最近の……その……そういう技術はすごいって聞いたから」

「いや、確かにすごいかもしれないけど、正直ああいう天然素材には勝てないからな」

「……あの、そこでなんであたしの胸を指差すんですか？」

静かにお茶を呑んでいた夏樹ちゃんは、思い切り目を細めた。

天狗はスレンダーな子が多いので、実はちよつと気にしているのかもしれない。

ただ、由美さんはなぜか神妙そうな顔つきで、こくりと頷いた。
「なるほど……確かにそうね」

「そこでなんで納得しちゃうんですか!？」

「いや、そもそも天狗って基本スレンダーじゃないのか？ 由美もそうだし、俺が出会った天狗は大体ほっそりしてたぞ？」

「そうね。夏樹ちゃんのスタイルはちよつと際立ってるわ。……羨ましい」

「いや……その……飛びづらいし目立つしで、正直困ってます」

顔を真っ赤にしている夏樹ちゃんは……まあ、野郎なら間違っただけでしまう程度には可愛いかったりする。

可愛いと可憐はちよつと違うけど、大体同じだ。

少なくとも、俺みたいに男に間違われるような女よりは、ずっといいだろう。

「ん、さすがに幻想郷はクオリティが高いな。俺が男だったら間違はなく二人とも放っておかないぞ。っていうかさ……もてるだろ？」

「もてるもてないはどうでもいいでしょ。意中の男にもててなんぼだと思っけど」

「ほうほう……ってことは、由美には意中の男がいるってことか。どんな奴？」

「あー……まあ、私のことはいいじゃない！」

思い切り顔を赤らめているあたり、全くさっぱり誤魔化せていないが、どうやら長年の片思いで相手は気付いてすらいなかもしれないとかそんな感じだろうか。

さらにからかってやろうかと思ったが、不意に背中に悪寒が走った。

「……男なんて基本クソよ。偉い人にはそれが分からんのよ」

いつの間にか、夏樹ちゃんの目が据わっていた。

さっきまでは癒し系だった子が、いつの間にか荒み系になっていた。

ふと、テーブルの上を見ると、高そうなブランデーの封が切られている。

「……えつと、ちょっとだけ紅茶に入れて飲もうとしてただけ……」

「いや……由美は悪くない。運が悪かったただけ……そう思いたい」
「ねえ、おでん屋さん」

ゾクリと背中を悪寒が駆け上がる。

夏樹ちゃんは、真つ黒で真ん丸な瞳をこちらに向けながら、折れそうなほどの力を込めて、俺の腕を握り締めた。

「おでん屋さんも《そう》でしょ？ あたしの存在意義って、なんかちょっと天狗離れしたえろろな体付きとか……そんな風に『思ってる』んでしょ？」

「ち、違うぞ！？ 俺は恥ずかしがる女の子や男の子が可愛いとか思ってるだけで、体付きとか顔とかスタイルとかで判断はしませんよ！？」

あまりの恐怖に、思わず本音が出てしまった。

普段大人しい子に限って酒乱つてのはよくある話だが、夏樹ちゃんの場合は普段から鬱憤が溜まっているのか、ある意味凶暴になっているようだった。

ある意味っていうか……ヤンデレだけど。

「大体ですねー……そっちの白いは天狗のテンプレみたいな体格してるからともかくー……おでん屋さんって体付きのわりに滅茶苦茶腰細いじゃないですか。ただでさえ細身なのに、そこからさらに細いつてただけですか？ イメージとしては猫とか虎とか、そんな感じですよ？」

「いや……あの、確かにタメ口でいいって言われたけど、さすがにえらい人に『白いの』呼ばわりは暴言の部類に入ると思うよ？ あと、俺は運動してるだけだから」

「……ソレを平気で言える女子が……世界に何人いるト思ってるの？」

怖い。助けて。酔っぱらってるせいか声がぶれまくって恐怖がさらに加速する。

ちよつと泣きそうになつてしまつたが、ふと思いついて聞いてみた。

「夏樹ちゃんって……なんつーか、その……男に嫌な思い出でもあるの？」

「あるよー？　なんか昔から妙にいぢめられたりからかわれたりするのー……ホント、野郎なんてみんな爆発すればいいのに。もげるあと、バカツプルは爆発しろ」

乙女心は複雑だなあ。……それ、単純にもてただけだというのに。

あるいは、夏樹ちゃんが鈍いだけかもしれないけど。

「おでん屋さんには分からのです！　あいつらは女体と飯のことしか考えてない、とつても野蛮な生き物ですりよ！」

「女だつて男と飯と自分のことしか考えてねーだろ。お互い様だよ」

「むー……そりやそうかー……おでんさんは頭いいよねー……んー……くう」

ひとしきり騒いだ後、夏樹ちゃんはうつ伏せに……器用に俺の膝を枕にして、さつさと眠つてしまった。

羽やら髪が当たつてくすぐったいのだが、まあいいや。

ゆつくりと溜息を吐いて由美の方を見ると、彼女は笑いを堪えているようだった。

「やっぱり、私は勘が良いのかもしれないわね。君たちはとても面白い」

「あー……そうだな。とても今日が初対面とは思えないほど面白いだろうさ」

「それはそうと、あなたも人から頭を下げられるのは嫌いなのかしら？」

「……………」

夏樹ちゃんの頭を撫でながら言葉を探す。

俺の言葉は、俺の嘘は、俺の全部は、なにかの受け売りだ。

それでも、受け売りの中で……俺は自分の言葉を探した。

「人が人に対し礼を尽くしたいって思った時には、自然と頭が下がるもんだと思う。権力を振りかざして頭を下げさせたりするのは……俺は嫌いだよ」

「ええ、私も同じ意見よ」

「……それでもさ、頭を下げて生きるしかない奴も、やっぱりいるんだよ。由美は上下関係が嫌いだろうけど、その中でしか生きられない奴もいる」

「ええ……そうね」

「私はそういう風にしか生きられなかった……だから、私は由美のことが嫌い。自由気ままで楽しそうだから、羨ましくて妬ましい」自由気ままで楽しそうだから。

上下関係なんてどこにもなくて、部下を平気な顔で仲間と呼ぶから。

だから、俺は彼女のような人間が羨ましくて妬ましくて……嫌いだった。

それでも、彼女は微笑みながら、私の頭をポンと叩いて、笑った。「ええ、あなたがそう思うなら仕方ない。……でもね、私はあなたのことはわりと好きよ。あなたが私を羨ましいと思うのと同じくらいには、羨ましいと思ってるけどね」

「………そう」

なにが悪いかなんて、分かってる。

由美はちつとも悪くない。悪いのは、彼女の言葉を素直に受け取れない私の心。

誰かが大嫌いで、世界が大嫌いで、なにかもが大嫌いで……本当は自分が一番大嫌いで、だから全部嫌いなふりをした。

本当は愛されたかったけど、最初から諦めていたから、嫌いなふりをした。

全部嫌いだと嘘を吐いた。

もうこれ以上、傷つきたくなかったから。

それでも――。

「……由美」

「なに？」

傷つきたくないと願ったけど、そんな願いは叶うはずはない。
願いの代わりに誰かがくれたのは、一発のげんこつだったような
気がする。

化物のような人生で、嘘ばかりの生き様で、それでも狂気に陥る
ことなく生きてこれたのは、誰かがそうやって叱り飛ばしてくれた
からだ、今なら思える。

「嫌いって言って、ごめん」

「あと……ありがとう」

「私は、私のことが大嫌いだけど」

「私は……本当は由美のことは嫌いじゃない」

「羨ましくて妬ましいっていうのは、嘘じゃないけど……な」

だから、今日だけは、少しだけ頑張つて。

誰もが口にする、当たり前で平凡でありきたりな言葉を、口に
した。

そして……ほんの少しだけ、不器用に笑った。

第十六話：空を自由に飛びたいな（後書き）

はい、そういうわけで十六話でした。

あと二話くらいやったら本編に戻ろうかと思っています。

次回、第十七話『大人になるために その1』。

今回と同じような話になるかと思いますが、お楽しみに♪

第十七話 大人になるために その1（前書き）

前置きついでに、下らない独白をしよう。

最近、気付いたことがある。

僕が小説を書く理由。

それは、心の叫びをなんとかして外に出したかったから。

少しでも人に自慢できるものがあつたなら、絵を描いた。

みんなで物作りがしたいんだつたら、アニメーターになった。

自分の声を聞いて欲しいんだつたら、声優になった。

えらくなりたいんだつたら、努力して資格でも取つたのかもしれない。

けれど、僕には自信がなかった。誰かに迷惑をかけまいと常に必死で、

人の目を見てびくびくして怯えていた。

目が悪かったけど、専門学校に入るまで眼鏡を作らなかった。

今思うと……人も、自分も、なにも見なくなつたんだろうと思う。

愛想笑いを浮かべ、怖いのを誤魔化しながら、毎日を凌いだ。

人が怖かった。自分が情けなかった。もっと良くなりたいと思って、

行動することすら怖かった。失敗を恐れまくつた。失敗を恐れない人間は

全員頭の悪い鈍感野郎なんじゃないかと、ある意味本気で信じていた。

なにもかもを恐れて、なにもかもを怖がつた。

その理由を考えることもできなくなるくらい、全部が怖がつた。

この気持ちが分からない人は、そのままでいい。

あなたは十分な愛を親や友達からもらっています。自分らしく生きてください。
もしも分かる人がいるなら……なんでもいいから、心の本を開いてください。

第十七話 大人になるため その1

あなたの心の叫びを、聞いてあげてください。

第十七話 大人になるために その1

大人って、なんだろう？

大人ってのは、愛の生き物さ。

……いや、いきなり意味が分からん。っていうか、お前は誰だ？
世界チャンピオンの愛に憎悪の暗闇の愛の虚無の涙にむせび泣く
いたいけな少女の涙を狙うモンスター教授を愛する地獄から来た情
け無用の男！

いや、そのネタは普通にやばいからやめろ。

はっはっは、それならレイヴンとでも呼んでもらおうかな。

……やだ。この人きもい。名乗りがなんかもう……中二っぽくて
きもい。

きもいと言っつな、現代っ子。

じゃあ、まっくろくろすけ君。それはどういう意味なんだよ？

まっくろくろすけ言っつな。オレの姿が人型の影ってことがばれん
じゃねーか。背景も味も色も素っ気も意味もない語りパートだとい
うのに、お前ときたら揚げ足ばかりだ。

いや……影のようななにかにいきなり中二病発言かまされてどう
すればいいのかさっぱり分からなくなっちゃってさ、とりあえず気
分を害したから金を寄越せ。

分かった。その代わりといっちゃんだが、お前の愛をもらおう
か！

えいつ。

へぶっ……いや、ちょっと待って。なんか気合いの入ってない掛
け声だけど経絡秘孔を的確に突くのはやめ……痛てえつつつてんだ
ろうが！

セクハラは打ち首獄門の上市中引き回しレベルの犯罪だから仕方

ない。

ヒイツ！？ セクハラで極刑もごめんだが、それは順番が逆だ！
その順番だと殺した後に引き回してんだろ！ 確実に子供のトラ
ウマになるよ！？

天狗の鼻は小さい頃にへし折っておくに限ると……ゆいさんが言
ってた。

あー……まあ、気持ちは分かるけどあの魔女の言うことは聞か
ない方がいいぞ。ほどほどに折っておかないと、トラウマとかになっ
て大人になっても人と上手くコミュニケーションが取れなくなっ
ちゃうからなあ。

……身に覚えでもあんの？

あるに決まってるだろ。ほら、なんつーか……オレって超天才で
みんなからわりとちやほやされたりしたんだけどさ、アレって今思
うといい傾向じゃなかったよな。先輩からは目をつけられるし、後
輩からは嫌な目で見られるし。

アンタの想い出とか知らんし。

ほらすぐにそういうことを言う！ リア充は爆発しろ！

別にリア充じゃねーよ！

分かってる分かってる。リア充はみんな同じことを言うんだ。大
体お前、同居してる魔女や幼女は可愛いし、同級生には恵まれてる
し、後輩には好かれてあまつさえまだチヨイ役としか出てない連中
もおおむね可愛いじゃんか。これがリア充じゃなくてなんなの？

馬鹿なの？ 死ぬの？ むしろ死ぬよ。

いや、全員性格破綻者なんだが……俺も含めて。

破綻しても生きている。つまり、破綻しようが壊れようがやる
べきことはやらなきゃいかんってことだ。生きるってわりと情性で
なんとかなるもんだね。

そろそろ、ゴールしてもいいよね？

そう言いながら拳を握るのはどうかと思うが……ま、なんだかん
だ言いつつも生きるってのはそういうことだ。生まれて、生きて、

寝て、食って、うんこして、えろいこととして子供を産んで、子供を育てて、病気が寿命で死ぬってわけだ。

……そーゆーのは、よく分からない。

分からなくてもいいんだよ。幻想郷の連中見れば分かるだろ。年食ってるからって分かるわけじゃないしえらいわけでもない。いつか分かるなんて言葉はお為ごかしに過ぎない。分かってもいいし、分からなくてもいい。

ぶっちゃけ、どっちでもいいんじゃないか？

ああ、どっちでもいい。分かりたきゃ努力することだ。それが大人になるってことだからな。

最近は努力してないこともないけどさ……分かんねーよ、やっぱり。

簡単に分かるとは言ってない。簡単じゃないから、大人なのさ。

めんどくせーな、おい。

なんだか、面白くもなんともない夢を見たような気がしたがそんなことはなかったような……そうでもないような、微妙な気分だった。

「ふああ……」

欠伸をしてから背伸びをして、ゆっくりと起き上って周囲を見る。粗末なベッド。クソまずい粗食。鉄格子。

まあ、俺の世界ほど強固ではないけど、人を閉じ込めるのには十分過ぎるその施設は、牢屋とか留置所とか呼ばれたりする。

「んー……見れば見るほど理不尽な状況だな」

「お前さんが暴漢の腕をへし折ったりしなきゃこんな所に押し込めなくてもよかったんだよ」

振り向くと、鉄格子の向こうには黒髪のにーちゃんが皮肉げに笑

っていた。

顔はかなりハンサムな部類に入るだろうが、仕事の多忙さ故か常に疲れたような表情を浮かべているのが特徴的だ。

こういう人を、ワーカホリックとか、天性の苦労性と言うわけで。

「おはよう、権力の犬。お勤め御苦労さん」

「朝っぱらから喧嘩売ってんのか、テメエは！」

「はっはっは、残念ながら鉄格子の向こうにいる俺には手を出すことはできない。鉄格子ごしに、俺を殺す手段があるんなら話は別だな！」

「……………」

「いやごめん。すみません。無言で刃物を振りかぶるのはやめて」なぜ刃物を持ち歩いているのか。それは誰にも分からない。もしかしたら、本人にすら分からないのかもしれない。

多分、尖ったナイフみたいなお年頃なのだろう。自警団とか面倒そうだし。

自警団自体はこの人里にもあるが、俺が今回やって来た北の人里は、幻想郷で一番大きな人里だ。

高級住宅、歓楽街、商店街にスラム街。人が集まれば貧富の差というものは生じてしまうもので、当然のことながら犯罪も多くなる。そういったあれやこれやを取り締まるために、自警団の質も量も他の里とは一味違う人材が揃っているらしい。

まあ……自警団がどうであろうとも、馬鹿はどこにでも湧いてくるわけだが。

「挑発したのは素直に謝るけどさー……ちょっと腑に落ちないじゃない？ こっちは稼ぐために屋台引いてんのに、食い逃げしようとした拳句、とっ捕まえたなら襲いかかってきやがってさ、仕方ないからぶん投げただけなんだ」

「そりゃ昨日何度も聞いたぞ。……腕は打ち所が悪くて偶然折れた、ともな」

「そうなんだよ。偶然に偶然が重なって、腕は偶然折れちゃったわ

けだ」

「ちなみに、目撃者の証言だと、逆関節を極めながら一本背負いを決めるんでもない野郎がいるってことなんだが」

「野郎じゃねーし！ もう言い飽きたが、俺は女だって何回言わせんだよ！」

「……逆関節の一本背負いは否定しないんだな？」

「手加減はしてるよ。本来なら腕をへし折った後、転がった相手の鳩尾や首筋に膝を落とす技だし」

「どう考えても殺人術だろうが！」

「食い物の恨みは恐ろしいってのは常識だろ。人間ってのは食い物と尊厳で成り立ってる生き物だからな」

「……いや、そりゃそうかもしれないけど……」

発言の過激さに引いたのか、あるいは多少は納得できる部分もあったのか、どちらでもいいことだが、怯んだ時は攻撃の手を緩めないのが俺のやり方だ。

にやりと笑いながら、言葉が続ける。

「どうせ、俺が腕をへし折った相手ってのは権力者の馬鹿息子かなんかだろ？ で、自警団としては、捕まえた犯人をそのまま釈放するわけにはいかない。……どちらが真に悪いのかとか、感情とかそういうのは脇に置いてな」

「ちっ……嫌な言い方だな」

「そりゃ仕方ない。スポンサーは大事にするもんだ。……で、それはそれとしていつ釈放してくれんの？」

「悪いが、しばらくは無理だ」

「えー？ 早く釈放してくれないとゆいさんに怒られるじゃん」

「仕方ねーだろ。……ま、こっちにも色々と事情があつてな。悪いようにはしないから大人しくしとけ」

「ハ、どっかの遊郭にでも売られるのかと思つたが……どうやら、見立て通り馬鹿息子の親や親族は真つ当みたいじゃねーか？ 大方、馬鹿息子の馬鹿な行動を握り潰すために自警団に動いてもらつて

とか、そんな感じじゃねーか？」

「百目鬼か、オメーは」

「いや、屋台とか引いてると労働者のおっちゃん達が愚痴りまくってるから、そこから推察しただけ。もちろんその中には自警団の連中も含まれてるわけだな？」

「……………」

なにやら遠い目をして頭を抱えるにーちゃん。

まあ………… 苦勞しているのだろう。なんていうか、苦勞性っぽいし。さてさて、こういう時こそ口八丁舌先三寸で乗り切るのが、俺の流儀だ。

「取引をしよう」

「取引？」

「アンタは俺を釈放する。俺はアンタの仕事を手伝う。こんなもんでどうだ？」

「トドメでも刺そうつてのか？」

「違う違う。俺が欲しいのは情報だ。こっちの人里に踏み込んでから、まだ日が浅いからな。この機会に行ったことのない場所をあっちこっち歩き回れば、普段とは違う情報が入ってくるかもしれないだろ？」

「………… 怪しいな。またなんか企んでるんじゃないか？」

「こっちに来てから日が浅いって言っただろ？ 残念ながら俺が持つてる手札はこれで打ち止めだ。………… っていうか、頼むから早く出してくれ。二日目に突入すると冗談抜きで命がやべーんだよ！」

「えっと………… 分かった。分かったから、牢屋越しに胸倉を掴むのはやめてくれ」

俺の『必死過ぎワロタ』といった感じの様子にドン引きしながらにーちゃんはさりげなく胸倉を掴んでいた俺の手を外す。

それから………… 重く、深い溜息を吐いて、俺の目を見つめる。

「分かった。それじゃあ、仕事を一つだけ頼む。………… 言っておくが、逃げるなよ？」

「無茶な仕事だったら逃げるけど、そこはアンタの人間性を信用するよ」

「……アンタじゃない。俺の名前はジャックだ」

「分かった。よろしくな、ジャック」

にやりと笑って、鉄格子から手を差し出す。

ジャックは溜息を吐きながら、それでも俺の手を握ったのだった。

人を撃つ時は心を細くしなさいと、誰かは言った。

その言葉がどういう意味を持つのか、今の孫一にはよく分かるような気がする。

スラム街と呼ばれる場所に、鈴木孫一は住んでいる。

街の掃溜め。暗黒部分。表側とは別のルールで動いている街。

酒と金と女と命。それから法に触れるあれやこれや。表側よりも、それらが格安で供給される街と言えれば分かりやすいだろうか。

ただし、ルールは違えど人の営みは同じものである。ルールさえ守っていれば、ある程度安全は保障される。

もちろん、ルールを侵害する者は処罰されるのも同じことだ。

似顔絵と懸賞金。WANTEDの文字が躍る紙を見つめて、彼は溜息を吐いた。

「ったく……暇だよな、誰も彼もさ」

そう呟く自分も、懸賞金狙いの暇人なのだが、まあそれはそれとしてだ。

眼帯の男……鈴木孫一は人里の地図を広げて赤く印をつけていく。今回の仕事はスラム街に逃げ込んだ馬鹿野郎の捕獲。スラム街の支配者は表の厄介事が持ち込まれるのを嫌ったらしく、腕利きに片端から声をかけているらしい。

どいつもこいつも暇人だが、金が欲しいのはどいつもこいつも同じなわけで。

「さて……どうしたもんかな」

潜伏場所の見当はついていないが、相手に仲間がいなくても限らない。かといってここでもたもたしていると、あっさりと他の奴に懸賞金を持っていかれてしまうだろう。

「うーん……かといって、誰かの手を借りるのはなあ。今月は色々厳しいし……」

「おい」

「いや、下手に出るとぼったくられるしなあ……」

「ぼったくられない誰かに頼めばいいんじゃないの？ 友達とか」

「無償で手を貸してくれる奴なんか、スラム街にはそういないよ」

「へえ、薄情なんだな」

「誰だつて自分が一番可愛いし、自分が一番大切だからね」

「そついうもんか」

「……………ん？」

遅まきながら……そこでようやく、独り言に合いの手が入っていたことに気づく。

顔を上げると、そこには誰かが立っていた。

一瞬、それがなんなのか分からなかった。

鈴木孫一はスラム街に住む情報屋である。

職業柄、たくさんの人間を見てきた。良い人間に悪い人間。善良と悪行を履き違えている人間。どうしようもない人間から、まるで聖人のような人間。……そして、人間の形をしながら人でなくなつたモノ。色々な人間を見てきた。

目の前にいる人物が異質だったわけじゃない。孫一が見てきた人間に比べれば……彼女は普通の部類に入る。

短い髪。鋭い目つき。引きしまった身体に、皮肉げな笑顔。第一印象は猫。

どこからどう見ても普通の男だが、孫一の心は警鐘を鳴らしていた。

「えっと……どちら様かな？」

「権力の犬に雇われたアルバイトさ。あんたが鈴木孫一か？」

「そうだけど」

「ジャックつて名前の自警団員から伝言だ」

そう言いながら、アルバイトと名乗った男は、孫一に向かって手紙を差し出す。

手紙を開くと、そこにはそう悪くない額の報酬と、現在追っている相手の交友関係、それから……決して無視できない情報が書かれていた。

「なにが書かれてんだ？」

「ん？ ああ、刃物とか銃器の密売とかもやってたみたいだから気をつけろってさ」

「……それ、ものすごい大事おおいじじゃねーか？」

「大したことはないよ。基本的に自分の身を守る以外に使い道はないし。大っぴらに使っちゃうと、怖いお兄さんがたくさんやって来るから」

自警団のような組織の介入はないが、ある程度の秩序は必要になる。

もちろん……その程度の秩序じゃ個人の安全は守れないので、ある程度の年齢になると刃物や銃器の所有はほぼ必須になっているのだが。

「まあ、話は分かった。後は俺に任せて、君は早く帰った方がいい。ここはあんまり治安のいい場所じゃないから」

「ん？ ああ……別に俺が女だからって気を使ってももらわなくても

……」

「……」

少なからずの驚愕を、多大なる労力を使って押し殺す。

確かに、よく見れば胸が膨らんでいるし、顔立ちや体付きも男にしては細いし、まつ毛も長ければ目も丸い。

男と言われれば納得しそうだが、間違いなく彼女は女性だった。

(……いや、ちょっと待て?)

自分の出した結論に納得しかけて……孫一はもう一度彼女を見つめる。

「はっはっは、ほら見る。やっぱり分かる奴には分かるんだ。……っていうか、どうしてみんな俺を男と間違えるのか意味が分からん」にこにこと、やたら嬉しそうに笑っている彼女は紛れもなく女性だ。

だが、違和感が拭えない。目の前にいるのは間違いなく、どこからどう見ても女性なのに、孫一はそれを全く納得していないのだ。あるいは、無理矢理納得させられている、と言い換えるべきか。ゆっくりと息を吐いて、孫一は営業スマイルを浮かべた。

「気を使ってるわけじゃないんだけどね。単純に、ここから先は俺の仕事の領分ってだけのことだから」

「なるほど。じゃ、俺はジャックに挨拶してから帰らせてもらおう」
「ああ、そうした方がいい」

営業スマイルを崩さないまま、孫一は背中を向ける彼女を見送った。

彼女の姿が見えなくなってから、ゆっくりと息を吐いた。

「なんか……妙に疲れたな」

見た目は普通のはずだ。ちょっと男っぽいくらいなもので、彼女は紛れもなく人間の女性……の、はずだ。

それなのに、なぜか妙に引くかかる。

ちくはぐで噛み合っていない。普通に見えるのに、なぜかそれが嘘だと分かる。

彼女は嘘を吐いている。

その嘘の表も裏も分からず、嘘を吐いている確信だけがある。

「っ……ま、いいや。とにかくさっさと仕事を終わらせて、今日は早めに寝よ……」

言い訳のように独り言を呟いていた、その時。

ドサツという重い音が聞こえた。

反射的にライフルを抜きながら、家から飛び出す。

孫一の目に映ったのは、頭から血を流して気絶している彼女と、彼女を背負って連れ去ろうとしている男たち。

助ける？ 無理だ。数が違い過ぎる。戦えば死ぬ。

助ける。理屈なんて関係ない。

異なる二つの意見が孫一の中でぶつかり合い、孫一は前者を選択した。

飛び出した勢いのまま、適当な壁の影に隠れて、男たちの様子を見うかがう。

「……………」

幸いなことに、男たちは壁に隠れた孫一には気付くことなく彼女を連れて行った。

その男たちの中に、見覚えのある顔があったことを、孫一は見逃さなかった。

「やれやれ……やっぱり、暇はよくないな。暇だとだてろくなことを考えない」

毒づきながら、孫一は目を細めて、ゆっくりと溜息を吐いた。

「ま、そんなに遊びたいなら……相手をしてあげようか」

人間つてのは面白いもんでな。一回条件付けをしちまうと、大抵の場合は疑問に思わずに笑って流せちまうのさ。

……なんのことだ？

物語を読む時のコツってやつさ。誰も彼もが伏線を気にするくせに、誰も彼もが当たり前のことを見逃す。考えりや分かること、不

自然な点がいくつも残っているのに、当たり前のように、当然のように、鉄板芸のように繰り返されると、見逃しちまうのさ。

意味が……分らない。

じゃあ、どうしてお前は男に間違われるのかな？

……そんなの、俺が知るかよ。

胸元が膨らんでりゃ、どこからどう見ても女だわな。顔立ちも女のそれだし、背丈だって標準よりちよい上くらいだ。胸元に関しちや、お前がいつもいつでもちよつと大きめの上着を着ているから分らないでもないが……普通に考えりゃ、女を男に間違えるはずがないんだよ。

……じゃあ、なんで……。

とぼけんなよ、狼女。それはお前が一番良く知ってるだろ？

………。

お前が自分自身にすら嘘を吐いている限り、永遠に大人になんかなれやしねえよ。大人つてのはな、自分自身を愛することができる人間なんだ。自分を本当の意味で大切にできる奴は、同じ位他人を大切にすることができる。確かに、お前のいた場所は最低で最悪で心を殺しちまっても仕方がないのかもしれない。けどな、ずっとそれじゃ駄目なんだよ。お前自身が、お前の心に耳を傾けて、なにがしたくてなにがしたくなくて、どう生きたいのか……そういったことを、ちゃんと聞き取らなきゃいけない。

………。

ま、今すぐには無理だろうが……今はとりあえず好き放題しとけ。好き放題？

言いたいことを言えってことさ。

閃光。爆発。煙幕。

倉庫の中でげらげら笑っていた男たちの声は、一瞬でかき消えた。男たちの足跡を追いかけて、隠れ家に非致死性のスタングレネードを投げ込んだだけなのだが、当然のことながら効果は抜群だった。「……さて、と」

倉庫に入ると、中は死屍累々といった有様で、立っている人間は一人もいなかった。もちろん、死んではいないだろうが、鼓膜くらいは破れているかもしれない。

「いつそ殺しても良かったか……いや、そりゃ早計かな」
苛立っている自分の心をなだめながら、孫一は慎重に倉庫の奥へと進んでいく。

木箱の影に隠れるように、彼女はそこにいた。
手足を縛られているようだが、外傷らしい外傷は見当たらない。念のため手で触れて確認してみるが、頭のたんこぶ以外は怪我はないようだった。

「おい、アルバイトさん。生きてるかい？」

「……………う……………」

「やっぱり駄目か。仕方ない」

意識が朦朧としている彼女を背負って、孫一は口元を歪める。
妙に鼻につく独特な匂い。その匂いに覚えがあるわけもないが、彼女の様子から確信を得ることはできた。

彼らは銃器だけではなく、麻薬も取り扱っている。

もちろん、スラム街にそういったものを取り扱っている者がいないわけではないが、量と価格と質に関しては厳重に管理され、それを犯した者には悲惨な末路が待っている。

まあ……………はつきり言ってしまうえば、スラム街で広まっている麻薬は煙草程度の中毒性しか持っていない、大人の気分転換に用いられるようなものばかりだ。

少なくとも、彼女が嗅がされたであろう強い薬は存在しない。

「……………あ……………ん……………はあ……………」

「とりあえず、外に出よう。ここにいとなんか……………間違いを犯し

そうだ」

吐息が耳に当たる。あとはなんか柔らかかったりいい匂いがしたり、そういった諸々を振り切って、孫一は彼女を連れて倉庫を出た。

「ハ、使えない連中だ」

倉庫を出た所で、片腕を吊ったごつい男がサブマシンガンの銃口を孫一たちに向けているのが見えた。

その顔は、ジャックの手紙に同封されていた似顔絵に、よく似ていた。

「蜂の巣にされたくないや、女を連れて倉庫に戻れ」

「彼女になにか恨みでもあるのか？」

「その女は、俺の腕を折りやがった上に薬まで盗みやがった！ 自警団の連中ならまだしも、マフィアのボスにチクられたら妖怪の餌にされちまうんでな。……後でテメエも捕まえるつもりだったが、こうして出てきてくれて手間が省けたぜ」

「……なるほど」

彼女と、スラム街で彼女に接触した人間を消すつもりだったらしい。

彼女の盗んだ薬とやらの行方が気にならないでもなかったが、孫一は彼女が起きないように優しく地面に下ろした。

「お、おい！ テメエ、勝手な真似をするんじゃないやねえ！」

「悪いけどさ……明日からも色々忙しいんだ。アンタに付き合ってる暇はあんまりないんだよ」

孫一は少しだけ目を細めて、口元を緩めた。

「ばん」

男は混乱する。

孫一の手にはいつの間にか、ライフルが握られている。

もちろん銃口は男に向けられていて、いつ火を吹いてもおかしくない。

そしてなにより……サブマシンガン相手に、余裕綽々でにやりと笑う孫一の笑顔が、なによりも恐ろしかった。

「はい、これで一回死んだ。今のうちに降参するんだったら、受け付けるけど？」

「……な、なに言ってやがる！ テメエ、頭おかしいんじゃないかっ！？」

「頭は正常さ。少なくとも……子供を破滅させるような薬をばら撒こうとしてるアンタよりはね」

もちろん、たった一発の銃弾で人を殺せるとは思っていない。

手持ちのライフルはちよつと旧式で、頭を狙ったとしても頭蓋骨に弾かれるかもしれない。手足や急所を正確に狙ったとしても、孫一が助かる保証はない。

相手が引き金を引けば、それで孫一の命は終わるという事実は変わらない。

しかし……自分の命が助からないのならば、やることは明白だろう。

（さて、今度こそ最後の大勝負になりそうだ）

鈴木孫一の生い立ちは、それほど幸福なものではない。

いつ死んでも構わないような生き方を多少なりともしてきたし、そのために片目を失った。人を殺したこともあれば、誰かを騙したこともある。

それでもスラム街に居るのは……子供たちがいたからだ。

どういう意図でそうなっているのかは分からないが、スラム街では子供の安全は保障されている。治安の悪い場所では弱い者から搾取されるのが普通なのだが、マフィアのボスから路上生活者に至るまで、全員子供には優しい。

もちろん、怒りもするし、叱りもするが、決して殴りはしない。よく考えれば変な話かもしれない。治安は良くないはずなのに、

孤児院があつて子供たちが元気に暮らしている。スラム街の誰も彼もが生活にあまり余裕はないはずなのに、度々孤児院を訪れては、ささやかな寄付をしたりしている。

いや……変な話ではないのだろう。

その孤児院には、身体だけは大きくなって心は子供のままの、立派でも何でもないわがままな大人たちが願った、たった一つの想いが込められているだけだ。

下らない暗黙の了解かもしれない。もしかしたら、孫一の勘違いかもしれない。

それでも――。

「うん、そうだね」

彼女は一つだけこくりと頷くと、弾かれたように飛んだ。

状況は緊迫していた。男は孫一を見ていたし、孫一は男を見ていた。その場の誰もが彼女に気を配っていなかった。気を配る必要はないと思っていた。

想定外の事態に慌てた男が、彼女に銃口を向けるまでにかかった時間はコンマ数秒。

その刹那に、孫一の放った銃弾が、男の手を撃ち抜いた。

「ぐあっ!？」

男が血の流れる手を抑えるのと、彼女が男の股間を蹴り上げるのはほぼ同時だった。

叫び声を上げることもできず、白目を剥いた男が口から泡を吹きながら昏倒する。

彼女はそんな男を見下ろして……ゆっくりと息を吐いた。

「お……おい。大丈夫かい？」

「大丈夫よ」

「え？」

その言葉は、まるで普通の女性のようにだった。

彼女はゆっくりと振り向いて、女の子のように笑った。

「助けに来てくれて、ありがとう」

それだけを言って、不意に笑ったまま崩れ落ちた。

地面と衝突しないように、彼女を慌てて抱き止める。思ったより以上に軽いことに驚きながら、孫一は安堵の溜息を吐いた。

「……ありがとうは、こっちのセリフだよ」

彼女が動かなければ、孫一は間違いなく死んでいただろう。

もちろん、彼女の意識がはっきりしていた保証はない。次に会った時、彼女は自分がやったことを綺麗さっぱり忘れているのかもしれない。

それでも、孫一は忘れないことにした。

彼女が自分を助けてくれた事実と。

子供の頃の自分が誰かに求めていた、たった一つの言葉を。

「さて……それじゃあ、帰ろうかな」

彼女を背負って、孫一はゆっくりと歩き出す。

命を救われたお礼に、今度彼女になにか奢ろう。そんなことを考えていた。

よく分からないまま、事件は終わった。

薬を運んでいた男やら協力者やら薬そのものやら、そういった危険なものは自警団の方々やら馬鹿息子の親族やらがサクッと解決したらしい。。

後で話を聞いてみたけど、薄く笑ってジャックはこんなことを言った。

『ま、ぶっちゃけ俺に関わりがなきゃどうでもいいことだが……風の噂じゃ、人間としての謙虚さが備わるまで、炭鉱送りってことになったそうだ』

……と、いうわけで。そういうことになったようだった。

結局……俺自身はあれからゆいさんにしこたま怒られた。怒られ

ただけじゃなく泣かれたりもしたし、サンにもさすがに怒られた。まあ、それは今後の反省点だ。

二日以上の外泊は、やっぱりよろしくない。

それはそれとして……せつかく見つけた穴場を放置するのはもったいないので、おでんの味に飽きられるまでは、その場所で屋台を出すことにした。

「……とはいえ、穴場での商売は正直疲れるんだよな」

日が沈んで辺りは真っ暗。そろそろ客もいなくなる時間帯。

ようやく一息吐いたところで、ものすごく腹が減っていることに気付いた。

「この時間じゃ、他の屋台は引き上げてるよな……」

おでんの方に手を付けるといふ手もあるのだが、おでんはもう食い飽きた。

今はなんか……とにかく、おにぎりが食べたい気分なのだが、残念ながら持つてきたおにぎりは全て完売。商売繁盛笹持つて来いのだった。

家に帰っても、今日はゆいさんとサンは買い物ついでに夕食を食べてくると言っていたのでなにもないはず。

仕方ない。代替案としては微妙なところだけど、コンビニでおにぎりでも買うか。

そうと決まれば、今日の所はさっさと帰ろう。幸いなことに、おでんも残り少ない。

「こんばんわ。今日はまだやってるかい？」

「ああ、大丈夫だ。あんまり数は残ってないけどそれでもよけりや

……」

言いかけて、声をかけてきたお客が、知った顔であることに気付いた。

あんまり覚えてないけど、私を助けてくれた人。

「いらつしゃい、孫一」

「名前、覚えててくれたのか？ ナベちゃん、あの時はかなり意識

が曖昧だったから、てつきり忘れられてると思ったよ」

「……ナベちゃん？」

はて、俺はコヤツに名前を教えただろうか？

俺が首をかしげると、孫一は苦笑しながら口を開く。

「あー……子供たちが勝手に君の荷物を漁っちゃってね。その時に身分証明のようなものを見たんだけど、悪かったかな？」

「んにゃ、孫一には世話になったし別にそれくらいならいいさ」

一日目は留置所だったが、二日目は孤児院で世話になった。

記憶にはないけれど、ぶっ倒れている間孫一が看病してくれたらしいことは、その子供たちから聞いている。

「で、何の用だ？ 今日のおすすめは大根とはんぺんんだけど」

「残念ながら、今日の所は差し入れたよ」

「差し入れ？」

孫一から受け取った包みを開けると、そこにはおにぎりが二個入っていた。

まあ、なんというか……実にいいタイミングというか。

「ん……ありがとう」

「じゃ、俺はこれで。今度は客として食いに来るから」

「あ、ちよつと待て！」

「ん？」

慌てて呼び止めて、タッパーに残ったおでんを放り込み、孫一に手渡す。

お返しというわけじゃないが……看病してくれたお礼のようなものの。

「そろそろ店仕舞いしようと思ってたんだ。よかったら子供たちと一緒に食べてくれ。後で味の感想とか聞かせてくれると嬉しい」

「いいのか？」

「いいも悪いも……まあ……その……残すのは、もったいないし」

「ありがとう。御馳走になるよ」

「……おう」

なぜか、意味もなく顔が真っ赤に染まる。

いや……別に恥ずかしがる必要はないんだけど……柄にもなく恩返しとか思い立ったもんだから、なんとなく気恥ずかしい。

ゆっくりと息を吐いて気分を落ち着かせて、俺はいつも通り口元を緩めた。

「じゃ、今日は帰る。今度は客として来てくれ」

「そのつもりだよ。暇があったら孤児院の方にも顔を出してくれると嬉しい」

「暇があったらな」

大学生は基本暇だらけなので、安請け合いしながら屋台を引いてその場を離れる。

屋台を引きながら、さっきもらったおにぎりを一口食べる。

ちょっとしょっぱかったけど、美味しかった。

第十七話 大人になるために その1（後書き）

はい、そういうわけで十七話でした。前置きで説明し忘れましたが、オリキャラ巡りその2となっております。

前回は説明しましたが、いずれ意味は分かりますw

さてさて、書きたいことは作中で大体書いてしまったのですが、現在に違和感のある人は、心の本を開いてみてください。

不安でたまんねえとか、自分が嫌いだという人も、開いてみてください。

書いてあることは大体一緒なんで、『うな人になるために』みたいな書名なら確実かと思います。

もしも自分の苦しみに気付いたら、自分の本当の望みに気付いたら、あなたが苦しんだ分だけ、誰かに優しくしてあげてください。そして、なによりあなた自身を許して、大切にしてください。

多分、『それ』を許すまでには長く苦しい道のりが待っていますが、頑張っていきましょうw

毎度のことですが、ここまで読んでくれて本当にありがとうございます。

次回は、多分本編更新。氷精編に突入する予定ですw

・・・その前に引越せにやなんので、ちよいと執筆は遅れま
すがw

ではでは、今回はこの辺でw

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8255g/>

当方、おでん屋台あり

2010年10月8日10時40分発行